THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年　第十一號

（第二百廿四號）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話七貳貳番）京都本店
東京市京橋區南植町壹番地（電話本局五壹八番）東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地（電話七貳六番）長崎出張所
廣島市紙屋町（秦忠兵衛方）（電話六〇八番）廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

製本既成　特價發賣　製本既成

女子高等師範學校教授　簡野道明先生著

長原止水畫伯裝幀意匠

故事成語大辭典

▲背皮製金文字入
▲菊版全一册美本
紙數壹千八百頁
定價金五圓

有らゆる故事、有らゆる成語を網羅して精到明確なる詮釋を附せる大辭典は世の久しく渇望せる所今ここに著者七年の苦心によりて本書を公にすることを得たり。紙數凡一千八百頁、語句二萬を超ゆ、錄する所單に故事成語に止らず漢籍の解題あり、文藝に關する偉人・閨秀の傳記あり、或は國文に引用せる詩句文語を註解して國文學研究上の障礙を除き、或は文體詩格並に詞藻を解説精選し、其他普通我國に行はるゝ俚言の出所を明らかにし梵語を註釋し且支那の勝地舊跡名山大川等を叙述せるなど取材極めて豐富多方面也。加ふるに詳密なる字畫索引を附して搜索に便ならしむ稱して故事成語大辭典と云ふも、實は東洋學藝の一大寶庫也。故に支那文學史學哲學の研究者は勿論、各學校、一般歷史家、國文家、著述家、及文部省教員檢定受驗者、其他苟くも文筆に關はる諸君の座右缺く可からざる寶典也。

特價

一回拂參圓五拾錢　拂込順により直に送本

二回拂四圓　申込と同時に貳圓拂込　殘金は四十一年一月三十日迄に拂込み次第送本す

郵送料　東京市内金四錢　市外金參拾錢　臺灣清韓樺太は金五拾錢となす

◉見本　申込次第　進呈

◉發行所　振替貯金口座四九九一番　電話（長）本局二四三八番

東京神田區錦町　明治書院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉開闢以來の絶大著作

題辭 序評

山縣公爵題辭
西園寺侯爵題辭
蜂須賀侯爵序
大隈伯爵序
原内務大臣序
牧野文部大臣序

男爵福島中將序
（序評いろは順）
芳賀文學博士
星野文學博士
大槻文學博士
柳莊河田先生

嘉納高師校長
鎌田慶應塾長
坪内文學博士
坪井文學博士
坪井理學博士
櫟齋村岡先生

易堂粂先生
澤柳文部次官
喜田文學士
三上文學博士
三宅文學博士
矧川志賀先生

白鳥文學博士
沼南島田先生
重野文學博士
春城市島先生
櫻坪旗野先生
◉其他諸名家

吉田東伍先生著

大日本地名辭書

◉大本 縱九寸橫六寸五分 六號活字廿四字詰三十一行三段 紙數五千一二百頁

裝訂極美背皮上製
最新詳細地圖十一枚
索引共 全四册
正價 廿五圓

◉篤學摯實なる著者が、名利を棄て寢食を忘れ、前後十三年の心血を濺ぎたる結果茲に始めて本書の完成を見る本書は實に我明治の昭代を飾るべき光輝ある大著述也

◉既往三千年本邦人の手に成れる汗牛充棟の書は其分量に於て一も本書に及ばず、本書は實に我國開闢以來以來之大著述也

◉此大著の起稿輯錄より印刷校合まで全く獨力にて成就せる著者の熱心と精根とは、眞に超人間的にして、殆んど不可思議の精力也

◉本書の眞價と著者の博識とは夙に學界の認むる所。此の如く浩瀚にして此の如く完全なる地名辭書は歐米の學術界に於ても亦絶無とする所。實に東西獨歩の名著也

此廣告によりて御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

六十日間實費特賣

（本書の實質）

汎論部

本邦地名に關する**總說**（轉化、文學、起因、原義、性格、界域、）及び政治**沿革**の大綱を擧け**國號**の由來を**考證**したるもの。○古來學者の研究を綜合して著者の卓拔なる識見を以て鐵案を下したるもの。單に此一篇にても地理上の一大著述たるを失はず。

各說部

は即ち本書の**主體**也。大略國郡の區分に隨ひ無慮**四萬一千**の標目を以て山谷、河海、池沼、港灣、田野、森林、道路、郡邑、社寺、陵墓、城砦、關津、建築、名所、舊蹟、一切**地理上の事物**は天然と人間とを論ぜず古今の**變遷**殊に一人事の**興廢**等凡て關係事項は**一々典據**を明にして細大漏さず。其**該博精深**古來匹儔を見ず。古人の手に成れるを以て編敍統一あり對比あり徵證は正確に判斷は愼密に且輓近科學的新研究をも攝收して餘す所なし特に**歷史的地理**に至りては幽徵を開き錯誤を正し、已に逸却せるを蒐集し、又歷史上地理上**未決の大疑問**の如きも著者の識見を以て**判決**し其の他從來地理上秘密の地域をも光明界に投じたる等、皆著者獨得の擅場に明快に、本書が包有せる歷史上の知識の如き到底尋常歷史書類の企て及ぶ所に非ず、其眞價に地學史學專門大家の嘖々嘆稱する所にして夙に斯學のオーソリチーを以て目せらる

索引

別冊として國郡目次、五十音引、頭字書引の三檬を備へ、其所屬の國郡より、又は讀訓を知りて文字を知らさる場合、文字を知りて讀訓を知らざる場合にも、直下に何人にも撿索し得べからしむ。

◉弊社が本書の印刷に着手せしより**前後九年**此間**莫大**の**資本**を投じて一意成効に盡瘁し玆に始めて出版業者として多**最大の名譽**を感するの情に禁へざる所也。此の理想的大著を完成するを得たるは弊社は此名譽を以て自ら甘じ此際特別販賣を行はんとす。此の如き非營利的販賣は以後再びせんと絕對に不可能にして特に部數亦限あるを記憶せられん事を希望す。

拂込	特價	申込金	毎回拂込金額	拂込期限
一時拂	十六圓	貳圓五拾錢	十參圓五十錢	期限內拂込即時送本
三回拂	十七圓	貳圓五拾錢	七圓廿五錢宛	毎月廿五日限拂込事拂込金に應じ三回に送本
六回拂	十八圓	貳圓五拾錢	參圓十錢宛	
十三回拂	十九圓	貳圓五拾錢	壹圓五十錢宛	

外に遞送料市內金十二錢市外壹圓臺灣、樺太、韓、淸、金壹圓六十錢

●期限內と雖ども、豫定部數に滿つる時は直ちに特賣を停止す

▲大冊見本（郵券二錢御送次第）

◉發兌元 東京神田 振替貯金五〇一番 電話本局一〇三六 合資會社 **富山房**

此廣告によりも御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

幸田露伴君著 ▲希有の美本▼

三版出來

小說 はるさめ集

◉全一冊。定價七十五錢。郵稅八錢。

先生の代表的名作『一口劍』『風流佛』『みれん』の三巻を收む。悉くこれ明治文學史上特筆牢記すべき希世の逸品たるは世已に定評あり。而かも刊本夙に絶へて其得易からざるを憾みとし、乃ち先生に請うて合本す。本書を讀まざるものは、未だ以て明治の文學を語るべからざる也。

好評三版 幸田露伴君著 坂井紅兒君裝釘

潮待ち艸

空前の美裝 定價八十五錢 郵稅八錢

先生の隨筆也、詩を談じ、文を品し、史を論じ、處世を說きて、他の企及すべからざる妙趣あり。附錄『土偶木偶』亦先生が近作小說中の白眉として、錦上更に花を添へたるの觀あり。幸に愛閲を賜へ。

好評再版 幸田露伴君著 沼田頴川君註

註釋 一日ものかたり

全一冊清雅 定價四十錢 郵稅四錢

白峰の條の悽惋なる、長谷寺の夜の悲壯なる、西行法師の心胸を活寫して、詩情轉た蕭凉！

楓村居士新著 ▲十一月下旬發賣▼

近刊

椿說 俠雄錄

全一冊（印刷中）

最新刊 文學士沼波瓊音君閲 四海庵宮垣角人君著

俳味禪味

▲全一冊頗風雅。定價四十錢。郵稅四錢。

俳味とは如何？禪味とは如何！蓋し禪味を解するの士にして亦始めて眞の俳味を談ずべし。本書は俳禪芭蕉によりて、統一せられ、建設せられたる俳味禪味の眞髓を鼓吹して、『寂』趣味の福音を宣傳し、極端なる物質萬能主義に茶毒せられたる、現時の人心に一大覺醒を與へ、枯木の生活をして趣味を生ぜしむて虛飾を去りて簡易に就かしめ、以。近時思想界の新革命見たり。

七版出來 文學士佐々醒雪君序 文學士沼波瓊音君著

俳句講話

全一冊瀟洒 定價四十錢 郵稅六錢

俳句は如何にして作るべきか、俳句は如何にして味ふべきか、抑も俳味なるものは果して那邊に存するや。本書は此等一切の問題に趣味饒き解案を與へ、以て乾燥せる現時の人心に一味の清風を點ぜんとす。何人と雖ども案頭一本を缺くべからず。

三版出來 文學士久保天隨君序 文學士沼波瓊音君著

俳句研究

全一冊清楚 定價四十錢 郵稅六錢

本書は俳句の研究たると同時に、自然の研究也、美の研究也、又人生の趣味教育也。著者が犀鋒の觸る、所、物皆油然として俳趣を生ず。俳人たると然らざるとを問はず、一本を繙いて、津々たる十七字詩の美類に醉へ。

高濱虛子君新著 樋口五葉君裝幀

近刊

俳句趣味

全一冊（印刷中）

發行所 東京本鄉一丁目 振替貯金一七一壹 東亞堂書房 賣捌 全國著名書林

中央公論

秋期大附錄號

十月發行

三百頁悉く金玉の文字（好評嘖々、雜誌界の白眉）

▲政界の新現象▲公侯伯子男……社論

▲元老時代去る……無名氏

勞働と人生（絶筆）……綱島梁川

▲外交上の新局……竹越與三郎

▲葉隱れ……福本日南

未亡人（小說）小栗風葉

復讐（小說）佐藤紅綠

第一人者（脚本）眞山青果

鳥の腸（小說）生田葵山

牲性（小說）徳田秋聲

▲文章論……山路愛山

▲新聞と雜誌と著書……三宅雪嶺

齋藤綠雨論……幸田露伴、馬場孤蝶、後藤宙外、戸川秋骨、佐々醒雪、塚原澁柿、幸德秋水、上田萬年、戸川殘花、

▲協約の流行と世界の平和……池邊吉太郎

▲島崎藤村の「水彩畫家」の主人公について……丸山晩霞

丁未文壇掉尾の偉觀（尙僅少の殘部あり定價三十六錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論第二十二年第十一號號目次

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりて御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 中島力造先生編◎讀書會印行　第三輯上卷新刊

倫理心理宗教 教育社會哲學 新著梗概

第一輯上下
第二輯上下
第三輯上卷
各一冊
每册定價
金五拾錢
郵稅各八錢

世界思潮の津梁として學界に推奬せらるゝ本書は、其材料を精撰し其體裁を改良して、今や第三輯上卷を發刊せり。蓋し各專門學者の手に成れる解說の忠實なると、批評の剴切なるとは、本書の特色として夙に江湖の認識せらるゝ所ならむ。而して今本卷に採錄せられたるものを擧げんに、ブッシュ氏の**アヱナリウス論**（中島力造解說）はアエナリウスを唯物論者の內より拔きて、之れをヒユマニストの中に加へんとし、ブルー氏の**倫理學と道德學**（中島力造解說）は、倫理學の研究は之れを直覺的になすべからず、宜しく社會學及び心理學に據り、併せて實際と離るべからざることを論じジョアッキム氏の眞理の本質（中島力造解說）は、ヘーゲル、グリーン二氏の唯神論的學說を改造せんとて縱橫に之れを論評し、轉じて其銳鋒を人生主義及び實用主義に向けて之れを辨難し、ロイス氏の**永世の概念**（朝永三十郎解說）は、種々の方面より個體を論じて、眞の個體眞の個性に永恒の標象の存することを論じ、ゴールトン氏の**ユージエニシクス**（得能文解說）は、遺傳の理に本ついて人種の體質上及び精神上の進步改良を圖らんとし、ツエンケル氏は**社會的心理學**（中村安是助解說）は、完全なる倫理說は道德の理想と道德の事實とを調和せしむるものなるとを論じ、ビネ氏の**推理の心理學**（淀野耀淳解說）は、心理學の立脚地より推理を研究し、ミエンステルベルヒ氏の**永劫の生命**（松原得悟解說）は、人の人格は究竟の生命にして永劫に亘りて滅せざる撰にを論じたり。若し夫れ加藤博士の**自然界の矛盾と進化**（譽田豐吉解說）に至りては、邦人の著作にして本會のに理入れる最初のものにして、有機界の三大矛質を說きて法律道德の進化に及べるものなり。苟くも中外日進の思潮の趨勢を解せんとするものは、之れを如何んぞ看過するを得ん。殊に卷頭に載せたる加藤博士の書狀は、博士が盛意懇到本會の擧を賛し、會員の奮勵を促せるものにして又座右の珍となすべきなり。

目次進呈 第一輯、第二輯、目次御入用の方は往復はがきにて申込次第呈送す、

發行所　東京市京橋區南傳馬町貳　振替貯金口座二八〇九番　**目黑書店**　東京市日本橋區通三丁目　振替貯金口座一七一九番　**成美堂**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



第二十二年
第十一號
(第二百二十四號)

内閣の運命を卜す

〔上〕

秋と共に政治期節は來れり、政客相遭ふ毎に現内閣の安危存亡如何を語らざる莫し、吾人を以て之を看れば、少くも今一年有半は現狀を維持すべし

内閣の運命を卜すべき最大資料は申すまでもなく豫算也、明治四十一年度の豫算は、稍々難關なるが如く傳へられしも、豫想より遙かに平坦に進行したりしが如し、半官的に報導せらるゝ所によれば、四十一年度も亦非募債、非增稅の方針に由り、大體前年度と似寄りたる所に於て編成せらるゝといふ、果して然るべし、今日に於て之れ以上を望むは望むものゝ無理也、難きを他に強ゆる也、否今の内閣にし

て絶群の抱負と技倆とあるに非ざる限り、到底之れ以外を望む可らざるのみ。

内閣の機關新聞が動もすれば非募債を手柄顔に吹聽するは噴飯すべし、市井兒的に評すれば、今や我が官民は外國に借金せんと欲するも貸手なきに窮せるに非ずや、外債は募らざるに非ず、能はざるのみ、歐米市場に於て日本財政の前途を危惧するもの、日本財界の將來を疑惑するものある以上、公債は遂に募集す可らず、彼の株式申込に於て數百倍の盛況を見たりし南滿洲鐵道會社が僅かに八千萬圓の外債を募り得ず、頗ぶる不利なる條件を以て辛ふじて其の半額を得たるに過ぎざりしを視れば、外債を募るの至難なる知るべきのみ、或は歐米市場の金融必迫を以て、米國企業の過度に歸するものあり、而かも巴西公債の能く成立したりしに徴するに、我が財政及び財界の不信用なると蔽ふ可らず、即ち外債募集は當分望みなく、内債また募集しがたく、唯だ預金部をして一時之を引受けしむる結果、日本銀行をして制限外の兌換券發行を爲さしめて、一時物價騰貴の趨勢を助長せしむるに過ぎざらん、非募債を以て財政上何等かの功績らしく吹聽するは、思はざるの甚だしき也。

非増税も亦深き根據ある見識には非ず、否、内閣は增税の竟に已むべからざるを知るも、議會の形勢非なるを看て、未だ之を實行する勇なきのみ、抑も戰時税は非常特別税にして戰後に之を改廢すべきと政府及び議會が國民に負ふ所の公義務たり、改廢の結果は、其の缺陷を補充し、併せて歳入の不足を補充するがため、更らに新税を起し、又は税率を增加し、若くは新專賣を實行するの外なきと、何人も之を識認するも、衆議院議員等其の任期の將さに盡きんとするより、民心に媚びて增税に反對する恐れあり、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政府黨たる政友會すら增税を悦ばず、將さに之に反對せんとする氣勢を示すが故に、內閣乃ち憚かつて未だ發せざるのみ、內閣の意蓋し總選擧後の議會に提出するに增税案を以てし、議員若し難色あらば、解散の決意を以て之を强ゆるにあるべし、測るに議員の多數また增税の已む可らざるを諒して、竟に之に協贊すべき歟、少くも政友會は然かすべし、是れ內閣の考量する所にして、此の趣旨より次の總選擧に於て政友會の多數を占めんとを期待するのみ、換言すれば、增税は四十二年度に至て始めて實行すべく、四十年一度に在ては、兎も角も剩餘金、俘虜收容費の收納等を以て歳計の不足を補ひ、一時を糊塗し彌縫すべきのみ。

大戰の後は、漫りに財政上に激變を生ぜしめず、暫らく民力を休養せしむると共に、前途の計畫を鹽梅するに愼重の考慮を費し、議會の形勢の定まるを待て、徐ろに堅實なる財政策を建つるを智なりとすべし、非常の力量あり經綸あるものに非ざれば、戰後早急に一定の方針を立つるを得ず。自から計らずして之を成さんとするも、却つて國を誤まる虞なきに非ず、故に吾人は今の內閣に多きを望まず、其の爲す所を是認せざる能はざるのみ

〔中〕

彼の前內閣系に屬する人々も、又民間黨として內閣に反對する黨派も、其の心事を解剖すれば必ずしも增税に反對するものにあらず、否、或は增税を希望するもの亦之なきにあらず、然るに曾て之を公言せざるは何ぞや、曰く必らずしも怯にして然るに非ず、また唯だ民心の增税を悦ばざるを恐るゝのみ、總

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

選擧を控ゆる眼前に於て、公然增稅を主張して以て民心に去らるゝを恐るゝのみ、今の內閣が非增稅を豫算の方針と稱して、恰かも得たりと做すと齊しきのみ。

故に四十一年度の豫算は、內閣に於て意外に無造作に編成せられたるが如く、議會を通過するとも亦案外無造作なるやも知るべからず、但だ掛念すべきは、非政府黨をして種々の惡言を放たしむる一事に在り

吾人の聞く所によれば、大藏大臣阪谷氏は各省の局長と先づ膝詰談判を爲し、各省の經營すべき事業の功程と之に要する費額とを問答して、略々其の所要の總高を明瞭ならしめ、以て事業繰延を實行したりといふ、蓋し例年會計年度の初めに於て、內閣會議を以て各省所要の現金高を協定するを例とし、各大臣皆豫算額より寸分も讓步せざりしに、今や阪谷氏は、此の內閣會議以前に局長と交涉して各省所要の現金高を算定し、其の結果として事業繰延を爲したるなり、各省大臣恐らくは啞然自失したりしなるべし。

外債募集の不利なる今年度に於て、事業繰延は或は賢き措置なりしやも知れず、然れども實際進行し得ざる事業を企て、過當の豫算を編成して徒らに歲出を多くしたるは、是れ國民を欺ける也、少くも國民に對して親切ならず、財政の鹽梅に於て嚴格を缺くの譏を免がる可らず、若し或は實際豫定の事業を遂行し得ずとするか、是れ多額の豫算を編成しながら大事業を經營する能力を缺くもの也、嚴重にいへば國事擔任の能力なき非難を免がるべからず。

若し內外市場に於て公債を募集し難き形勢を豫察し、之に備ふる一手段として、故らに事業繰延を實

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行したりと言ふ乎、此の辯解は稍々巧みなるものと稱せらるべし、然るに豫算に於て議會並びに國民を欺ける乎、抑も又國事擔當の能力を缺くか、二者其の一に居らざる可らずとするの非難、嘲罵、揶揄は必らず此の冬期の議會に於て、內閣大臣の滿身に浴せ掛けらるべし、此の不名譽なる攻擊は、各大臣恐らくは之を忍耐せざるを得ざるべし、唯だ此の非難、嘲罵、揶揄を浴せ掛くるものと雖も、此がため四十一年度の豫算を不成立ならしむるが如きとは萬々ある可からず、彼等と雖も四十一年度の豫算の竟に糊塗彌縫に終るの外なきを知るものなれば也。

此の事實を以て四十一年度豫算の難關と言はゞ言ひ得ざるに非ず、而かも之がため斷じて豫算不成立に終るとなしとすれば、則ち內閣假令多少の手疵を負ふにせよ、之がため致命傷を受くるまでに至らざるや論なきのみ、隨つて內閣の運命の危殆なるが如きは、吾人の未だ想像し得ざる所とす。

〔下〕

有體にいへば、今の政局の卷舒は、殊に內閣の運命は、多く西園寺桂兩侯の意思によつて決定すべし、而して桂侯の意向に依て定まると最も多し。

然るに桂侯は調和的材能に於て現代の政局に冠絕す、其の爲人頗ぶる武斷的にして、實に山縣系統の特色を佩ぶるも、其の才略智慮は寧ろ伊藤型にして、漫りに敵を作るを好まず、常に大局に着眼して規模自から洪大也、西園寺侯また酒脫にして物に拘泥せず、行政整理の打切を斷言して黨人を駭かすが如き果斷あるも、人品優雅にして漫りに爭鬪を欲せず、彼のタフト卿來るや、朝野歡愨を盡せるも、侯獨

り超然として高く標置して容易に許さず、畏度の大なる、人の摸せんとして容易に摸すべからざるものあり、此の人にして桂侯に對す、斷じて輕々しく相反目し相爭鬪せざるや言を俟たず、思ふにポウツマス條約に於ける桂伯の苦心は、西侯の深く諒とせる所にして、西侯の內閣の怙恃に惱めるは亦桂伯の切に同情する所なりき、其の最初の政權の授受の談笑の間に於てしたると齊しく、來るべき政權の授受も亦應さに兩侯談笑の間に於てせられんと略々察すべきのみ。

素より西侯に原敬氏あり、長谷場純孝氏あり、桂侯に大浦兼武男あり、關淸英氏あり、互ひに政治を生命として相對壘し、寸歩も讓らず尺攻寸守、虛實を盡して妙を極むと雖も、而かも兩侯未だ之がために多く相累せらるゝには至らず。

思ふに桂侯は、明治三十八年の創痍の癒ゆるを待ち、四十二年度の增稅全く成りて、財計運用の資料略々備はり、而して西園寺侯漸く政務に倦み、人心また新を欲するに乘じて、徐かに相代るヿを期待すべし、而して此の場合また談笑の間に於てし、西園寺侯の政友會をして、假令全然其の味方たらしめざるまでも、少くも善意の中立を守らしむるを期するや言なかるべし、桂侯の調和的才能蓋し當さに然るべきのみ、蓋し侯にして決然蹶起せば、其の與黨たる大同派をして進步黨に結ばしむるヿ易々たらん、而して政友會の一角を誘致せば、衆議院に多數を占むるヿ決して至難に非ず、然れども侯は斯の如く對議會に勞せんよりも、寧ろ調和の德によりて、圓滿に國務を遂行するを利とすべし、第一次の山縣內閣以來、黨派操縱に關する經驗として侯の學べる所のもの然る也、侯は寧ろ靜平なる貴族院の多數を擁し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

衆議院に多數を占むる西園寺侯と相交懽するを以て智なりとせん、果して然らば、現内閣の運命は、閣自から之れを決すべし、民心漸く之を去て而して西園寺侯稍々政務に倦むとき其の一なり、原氏松岡氏の如き圭角多き人物が自から禍因を作りて内より内閣の一致を破るとき其の二なり。而して二者孰れが早く來るべきかは疑問に屬す、吾人未だ猝かに之を想定する能はざるのみ、唯だ〳〵四十二年度の豫算成立までは、即ち今後大約一年有半の間は、政局に大なる變化なかるべき歟、或は曰く、西園寺侯の健康甚だ佳ならず、爲めに内閣の更迭を看ると意外に早からんと、然れども斯の如きは素より吾人思量の範圍内に存ぜず、吾人の思量する所は唯だ形勢の推移是のみ、是に由て以て内閣の運命を卜知するのみ。

對米移民問題の解決

(一)

我が移民問題、殊に米國太平洋沿岸に於ける我が移民問題は、頗ぶる考慮を要すべき所のものにして、決して一片空疎なる國權擴張論の得て解決すべき問題に非ず。

我れ若し條約の正文のみを取て頑強なる態度を取らば、彼れも亦條約正文の但書に憑據し、其の憲法々律を以て我が移民を驅逐せんことを圖るべし、事玆に至らば、互讓妥協の誠意全く莫く、竟に武力を以

て最後の判斷を爲すの外なきに至るも測る可らず。我れ既に淸國に勝ち、露國に勝つて而して今また太平洋の彼岸國と相爭はゞ、列國は果して我れを好戰渴血の國と做さゞるや否や、勝利の上には光榮あり、光榮の下には往々嫉妬なきに非ず、我れ假令血に渴せるに非ず、戰ひを好むに非ざるも、嫉妬を以て我れを迎ふるもの、竟に我れを目して渴血好戰の國と做すとなきを保せざるのみ。

百戰百勝は善の善なるものに非ず、今にして我れ互讓妥協の途を索めず、徒らに國權擴張の題目に力瘤を出して漫りに太平洋の彼岸國と爭ふ、假令必勝の算ありと雖も、後に來る咒詛の禍の大なるを思はゞ、斷じて輕擧妄進す可らず、抑もまた天を畏れ憚かる所を知らざる可らず、移民問題を解決せんとするもの、先づ深く思はざる可らざる也。

米國が多くの戰艦を盡して遠く太平洋に進出せしむるも、一個の遠洋航海のみ、彼れ萬一我れと爭はんとするも、其のマニラには未だ大艦隊を收容すべき軍港なく、設備なし、或は浦鹽斯德軍港を租借せんといふも、露國は今日本の敵國に非ず、米國と聯合して日本と敵對するものに非ず、如何ぞ其の大國の面目を損じて其の軍港を他に貸すが如きとを爲す可けんや、米國艦隊は畢竟日本英國の好意によりて、我が横濱、神戶、長崎、香港に由るに非ざれば、到底太平洋に止まる可らざるのみ、思ふに彼の艦隊が我れを襲ふの至難なるが如く、我が艦隊の彼れを襲擊するとも亦至難ならざる可らず、但だ我が海陸軍を以て彼の非律賓島を征服するとは一擧手一投足の勢のみ、我れ乃ち非律賓を扼し、東洋に來る米國の商船貨物を拿捕せば、米國は之を奈何ともす可らず、即ち日米開戰の後、日本に勝算ありて米國に一の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

良策なきは、必らずしも智者を待て知らざるのみ、故に吾人の移民論に互讓妥協を主張するを以て、彼の淺薄なる米國新聞紙の恫喝に懾伏し、米國戰艦の來東に畏縮したるものと做すと勿れ、吾人愚と雖も、未だ米國を恐るゝが如き怯者に非ず、吾人の恐るゝ所は、唯だ漫りに大言壯語して以て列國より渴血好戰の國と視做され、其の咒詛によりて神の怒りを蒙むる奇禍を招くにあるのみ。

（二）

移民問題に就て、我れは斷じて無條件の讓歩を爲す可らず、少くも條約上の表面に於て寸歩も枉ぐ可らず。

若し我れ讓歩して、米國に於ける移民に制限又は防遏を受けんか、太平洋沿岸の各國は視て以て日本人劣等の明證なりとし、到る處日本人の入國を制限し防遏せんと欲すべし、是れ我が日本人種を以て劣等人種と視做さるゝ也、日本國民の大耻辱也、日本國民の發展を制限し妨害する也、日本國の國權縮少也、彼の英領加奈陀は論なく、墨其哥、秘露、智利、巴西の如き亦相率いて日本國民の入國を拒絶すべし、否、濠洲、非律賓を始め、世界到る處の邦國皆日本の移民を容れざるに至るべし、是れ豈忍ぶ可けんや。

故に吾人は先づ北米合衆國と對等の條約を締結し、我が移民をして英佛墺露獨伊の諸國民と均等の待遇を受けしめんとを主張す、少くも原則として日米兩國民を對等とし、英佛墺露獨伊と平等ならしめんとを主張す、是れ理由なく日本人を劣等とする謬見を排し、無意味の日本人の入國を制限し防遏せんと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する他の暴戻を沮止する所以なれば也、日本今日の名譽と地歩とを保有するの途は、到底此の外に出づると莫ければ也、而して人道正義は又實に斯くするを當然とすれば也、米國大統領ルーズヴェルト氏も現に其の國會に贈れる教書に於て、極めて明白に此の趣旨を聲言したれば也。

（三）

吾人は條約上に於て斯く主張し、飽まで對等の地歩を占有せざるを得すと做すも、實際に於ては、我が移民に制限及び改良を加へざる可らざる必要あることを確認せざる能はず、唯だ斯の如きは、我れ自動的に之を爲すべきのみ、斷じて他動的に爲すべからず、條約上の義務として、對手國より制令せられて之を爲す可らずとするのみ。

米國にある我が移民は、米國人と同化するとなし、是れ根本の弊也、米國には他國より移住したるもの極めて多し、現に歐洲各國より來る移民の數年々一百萬内外に達す、殊に人烟空粗なる太平洋沿岸の諸州に於て最も然り、桑港の如きは、凶險なる獨逸伊太利の勞働者殊に多く、其の風儀不良にして泥醉爭鬪脅迫等警察を煩はし法律に觸るゝ者の多き、到底日本移民の比に非ず、然るも彼等は米國に歸化し、米人と同一の宗教を奉じ、同一の言語を語り、同一の家居飮食起臥を爲して渾然融和す、日本人は然らず、僅かに其の服裝を彼等に近くするも、亦往々にして日本服を用ゆるものなきに非ず、其の家民、飮食、言語亦悉く日本のもののみに由り、曾て彼等と融和せず、同化せず、彼等と同一農場、同一工場に働作し勞役するも、曾て彼等と相語り相親み相謀らず、截然として別個の天地を有し、別個の團結を爲

して風馬牛相及ぶなし、勿論巧みに米國語(英語)を話し、彼等の間にあつて共に談笑するもの莫きに非ずと雖も、斯の如きは千百人中僅かに一二人のみ、多くは全く彼等と異國異人種たり、是れ清人と日本人との特色にして、且つ容易に米國に歸化せず(歸化權なきが故に然りと做すと勿れ、歸化を欲するものは萬人中一二人のみ)勞働して少しく貯蓄すれば直ちに日本に歸り去るを例とす。

殊に日本勞働者の多數が、米人の習俗に反し、米人の慣例を無視するとは、彼等の最も惡感を抱く所たり、其の言語の喧囂なる、裸體若くは半裸體にて平氣なる、例せば布哇の耕地桑港附近のキャンプ、晩香坡の漁場に在る日本移民の生活狀態は、米人をして大抵日本人を半開國人、劣等人種と視做さしむるも亦全く已むを得ざるものたり、斯る移民にして、動もすれば露國に勝ちたるに慢心し、尊大倨傲、往々彼等を凌辱するに至て、彼等豈益々憤恚し怨恨せざらんや。

彼等歐洲より入込める勞働者が、日本移民を排斥し迫害するの非義非理なる、常識ある米國の男女如何ぞ之を辨ぜざらんや、則ち辨ずると雖も、日本移民に同情すると薄くして、却つて動もすれば非義非理なる排斥を默認し、若くは之を贊成する所以は何ぞや、日本移民の生活と素行と、已に甚だしく米國人の惡感を招けるが故のみ、少くも英佛墺露獨伊の勞働者よりも、より多く米國人に嫌忌せらるゝが故のみ。

吾人は有體にいふ、日本移民の米國人に嫌忌せらるゝ、決して米國人の偏僻なるが故のみにあらず、日本移民實に其の責任を負はざるを得ざるとを、日本人若し清人に對する感想如何と反省せば、此の一

事多言せずして判斷し得べし、是れ豈我が國自から進んで制限し改良すべきものならずや。

（四）

太平洋沿岸に於ける日本移民排斥の運動には、自から徑路あり、脈絡あり、之を一瞥する亦多少の興趣なきに非ず。

夫れ甘蔗大王となるは冒險思想ある歐米人の曾て夢想せる所にして、布哇耕主の如き實に其の夢想を現實したるもの也、勿論近時世界の砂糖産額大に增加し、隨つて其の價格大に減少し、其の富また從前の甘蔗大王の如くなる能はずと雖も、而かも年々の利や尙ほ甚だ大也、而して其の大利を永く維持せんとすれば、製產費を節するの外なく、之を節するの途は主として布哇にある日本移民の賃銀を低廉ならしむるにあり。

其の法他なし、多數の日本移民を布哇に留めて、勞力に不足なからしむると共に、强制的に其の賃銀を引下ぐるに在り、然るに日本移民の狡智あるもの、米本國に渡航すれば、高價なる賃銀を得らるゝのみならず、布哇より米本國に渡航するの自由にして無制限なるを知り(日本より布哇に渡航し、若くは米本國直航するには種々の制限あり)、且つ米本國にある雇人口入業者等が、日本移民を招致するに百方手段を用ゆるに乘じ、陸續として米本國に轉航せんとす、甘蔗大王たる布哇耕主等は、これがため布哇の勞力に缺乏を來たし、兼て日本移民の賃銀を騰貴せしめざるを得ざるを憂ひ、其の年々積立てたる大金を資として此の防禦策を講じ、一面には米本國の首都華盛噸府に於て國會議員の間に運動し、議會に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本人排斥法案を提出し通過せしめんと欲し、一面には日本移民の轉航する一要地たる桑港市に於て、盛んに日本人を排斥せしむるに努め、其の新聞紙を買收し、又勞働組合の幹部を買收して公然日本移民排斥の運動を爲さしむ。

　桑港の勞働組合は、獨墺伊露より移住せる勞働者によりて組織せられ、殊に意地惡き獨伊兩國人多數にして、彼等は先づ日本移民が多少己れ等の職業を奪はんとする傾向あるを掛念し（實際彼等の職業を奪へりと云ふ程の事實は無し）殊に日本移民が廉價なる賃銀を以て柔順に勤勉し、漸く雇主の信用を得んとするを嫉み、布哇耕主より買收せらるゝを幸ひ、誇張誇大に日本人排斥を主張して一個の政治綱領をまて作爲したり、彼等勞働者は現に歸化して米國人と爲り、普通撰擧法に由て投票權を有し、其の頭數（即ち投票權數）を以て今や桑港市に於ける有力なる一大團體と爲れるがために、之を利用し、又は其の歡心を得んとする政事家新聞記者も亦相率いて之に唱和し、益々誇張誇大に非日本論を主張し實行せる也。

　抑も太平洋沿岸にある日本人は、幾んど數萬人に達すと雖も、米國より之を視れば大海の一粟のみ、殊に事業多く、勞力の需要幾んど無限なる米國に在ては、日本移民の如き實際眼中に措くの要あらず、隨つて日本移民が彼等の勞働を奪ひ、彼等の賃銀に影響するが如きとは未だ曾て之あらず、即ち桑港市の勞働組合の主張の如き、全然杞人の憂慮なるのみ、殊に其の根源の布哇耕主に存するに於て、全く一種の野心運動に外ならざるのみ、而かも能く太平洋沿岸を風靡する勢ひを有し、米國の男女また或は此の

野心運動の脈絡系統を看破するものあるに拘らず、動もすれば彼等を咎めずして却つて日本人の排斥を默認するが如きは何ぞや、嗚呼是れ日本移民の生活狀態の深く米國人に嫌忌せらるゝものあるが故ならずや、洵に遺憾なりとは雖も、米國の男女現に日本移民に感情を害すると深し、故に日本人排斥の聲ある、假令非義非理なるも、亦動もすれば之を默認して却つて日本人排斥に同意せんとするのみ、日本移民を制限し改良するの必要なる、實に第一の根本要義たる也。

（五）

我が日本人の清人を看るや、實に異樣の情なき能はず。

清人は概して無遠慮也、不作法也、其の不潔なる身を以て、其の異樣にして固有なる辨髮と寛袍とを以て、其の喧噪にして鴃舌なる語言を以て、其の黄金萬能、人を人とも思はざる一種の道德（寧ろ慣習）を以て、到る處に、嫌惡すべき種子を散布し、我が淳良清潔なる風儀を紊亂すると少からず。

且つ清人の勞働者は、柔順にして薄遇に甘んじ、驚ろくべく低廉なる賃銀を以て我が雇役に應ず、曾て上海に扇風器の据付けを勸めしものあり、勸められしもの曰く『否、我が地方には其の要なし、清人を雇ふて二六時中絶へずカーテンを煽せしむれば、其の費す所扇風器よりも廉にして而して便なればなり』と、清人の賃銀の低廉なる斯の如し、現に九州の我が鐵道工事に清國工夫を雇使して頗る好都合なりしが如し、然るに鐵道廳は竟に斷乎として清人を解雇すべく命令したりき。

日本人は實に之に異論なき也、否、鐵道廳の命令を歡迎したるが如し。蓋し清國工夫にして多く我が

日本に來らんか、到る處我が日本勞働者の職業を奪ふに止まらず、彼等の來る彌よ多ければ、其の生活と習俗とを以て彌よ益々我が風俗を紊亂するの虞ありと做すが故のみ、理に於て、義に於て斯の如きもの果して當然と稱すべきや否や

吾人は之を斷言するの前、先づ我が官民に向つて、米國に於ける我か移民と米國人との感想如何を一顧せんことを要望せざる能はず、抑も日本移民の米國に於ける、日本に於ける淸人と相距る果して幾許ぞや、淸人は柔順なるも、日本人は今や戰勝を恃みて驕慢也、是れ寧ろ淸人以上ならずや。米國人が日本移民を嫌惡する、理に於て義に於て果して如何、而かも情に於ては實に恕せざることを得ざるにあらずや、淸國工夫の解雇を命じたる日本政府は、一面米國に讓歩せざらんと欲するも得ざるべきのみ。

* * * * * * * * * *

吾人は日米條約に於て、我が移民の英佛墺露獨伊と平等同等ならざる可らざるを原則とせんことを主張す、少くも米國が日本人を蒙古人種より除外して以て歸化、結婚、入國等總て歐洲人と均一ならしめんことを主張す、日本今日の地位名譽よりして、正義人道の大本よりして、素より然らざるを得ざれば也、然れども米國人が日本移民を嫌惡する感情に至つては、之を寛恕せざるを得ず、隨つて此の嫌惡を避くるがため、實際の事情を酌量して我が移民に相當の制限を加ふるは當然也、我が移民をして努めて米

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國に同化せしめ善良なる移民たらしむるがため、速かに且つ有効なる手段を執る事を要す。

米國政府は宜しく條約に於て我れに讓るべし、日本政府は事實に於て自から進んで彼れの欲する所を實行すべし、是れ互讓也、此の誠意を以て妥協す、移民問題を根本的に解決する豈此の外に出づ可んや。

吾人は獨り之を以て北米合衆國と協商するに止まらず、加奈陀政府とも亦然かせんことを主張す、我が移民の實狀を究めず、漫然として國權擴張を主張す、抑も彼の淺薄且つ無責任なる開戰論を爲す米國新聞と何の異なる所ありや。

桂、西園寺時代

（上）

無名氏

元老時代の已に去れることは前號に述べた通りであるが、凡そ一つの時代が去れば之に代る他の時代が來るのは自然の順序で、即ち今日は桂、西園寺時代といひ得べき時代となつたのである。只一概に桂、西園寺時代といへば漠然たるやうであるが、詳かにいうて見ようなら、必ずしも桂と西園寺のみが今日の時代に於ける只二人の大人物であつて、此二人の力のみで日本がクル／＼廻つて居るといふ譯ではない。けれども彼等二人は今日の政治上の代表者で、其周圍の力が桂に集らざれば西園寺、西園寺に集らざれば桂といふ具合で、彼等二人者は自ら現代政治的勢力の焦點となつて居るといふ意味である。

今此話をするに就て第一に知ることの必要なるは、桂と西園寺とは抑々何者であるかといふことである。之を研究することは單に今日の政治を了解するに必要なるのみならず、又極めて興味の多いことであらうと思ふ。

二人には非常なるコントラスト反襯がある。總ての點といふことは出來ないが、多くの點に於て違うて居る。思想に於ても、趣味に於ても、若し彼等に主義ありとすれば主義に於ても亦違ふ。只一つ同じことのあるのは彼等は全く――全くといふことは出來なくとも殆んど全く世の中から誤解されて居たことである。然し其誤解されて居たことは彼等が今日の如き働きをなすについては寧ろ仕合せであつたかも知れない。一言にいへば西園寺侯は輕薄のハイカラと思はれて居るし、桂侯は最も彼を惡口する人にはサーベルを下げた幇間といはれて居る。而してそれは二つながら全く世

間の見損ひであつた。此世間の見損ひが却て豎子をして名を成さしむるの結果になつたかも知れない。

西園寺といふ人はどういふ人かといへば其生立は實に麒麟兒である。彼は十代で早くも山陰道の總督になつた。之れは門地の然らしむる處であつたかも知れんけれども、單に門地丈けといふ譯ではない。其才氣英發已に群を拔いて居たことによるだらうと思ふ。其一つの證據を擧ぐれば戊辰の役に於て、朝廷は群疑滿腹、衆論紛々たる時に西園寺が末座から何か一言二言いふた。處が岩倉公は之を聞て「小僧よくいふた」と叫んだのである。「小僧よくいふた」といふ言葉は實に飾りのない率直な言葉で、端なくも岩倉公の心を丸寫しに寫し出したのである。さういふ調子であつたからして彼は夙に木戸孝允などいふ人からは望を囑されて居た。元來公卿といふものは手に負ひないものである。處で西園寺は其公卿の中で年は若いし、氣は勝て居るし、發明ではあるし、なか〳〵他人の手には負ひなかつた。單に他人の手に負ひなかつたのみならず、實は西園寺が西園寺の手に負ひなかつたゞらうと思はれる。夫れから彼は佛國に洋行するとゝなり、歸てから東洋自由新聞の發行となり、それからとう〳〵伊藤公との關係が出來たのは確か明治十四五年の間の事であつたらうと思ふ。彼は伊藤公が憲法取調の爲めに歐洲に赴く時に隨行員の一人として行き、其後も始終政治上に於ては伊藤公と關係を持て居た。然し彼は伊東巳代治や金子堅太郎のやうに伊藤公に追ひ廻はされて使はれた人よりもそつと人間が違つて居る。又井上毅のやうに伊藤公の相談相手となつて侃々諤々相論じ相爭うて行くといふ人とも又少し違つて居る。つまり彼は伊藤公のお客分で始終一貫したのである。如何にエライ才能を持て居ても若し彼が伊藤公に求むる所あればもそつと公に盡さなければならぬので、少くも陸奥宗光の如くには盡さなければならんのであるが、然し彼は一切伊藤公に求むる所なかりしが爲に、ぬらりくらりして伊藤公のお客分となつて居たのである。其後彼は色々の役目を勤めたけれども別に大した働といふものも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつた。寧ろ閑職にあつたといひ得るのである。明治廿七八年役の時も帝室のお使者として韓廷に使し、初めて閔皇后に謁見した。外國人て閔皇后に謁見したのは恐らくは彼が初めてあらう。又公使として獨逸に行て居たが別に大したこともなかつた。或人は嘗て彼を評して、「西園寺には三つの英語の in がある。第一は intelligent で即ち聰明といつてよからう。第二は indefferent で即ち無頓着といつてよからう。第三は indolent で即ち無性といつてよからう。此三つのインで以て西園寺侯を殆んど胡桃の殼の中にぶち込んだやうにぶち込んで了つて居る」といつて居る。處が西園寺侯は第三次伊藤内閣(明治三十一年)の時に文部大臣となり、其時分に彼は初めて自分のやつて居る文部省のことに多少の熱心を持て居るといふことが分り、全くインデッフエレントばかりでもないといふことが出來た。夫れから又明治三十四年に第四次伊藤内閣が瓦解した時に於て西園寺侯は當時樞密院議長であつて假設總理大臣となつて總理大臣の代理を勸めたのである。實は其時に初めて彼は其本色を發揮したのである。彼の總理大臣代理を勸めて居たことは彼是三十日前後であつたらうと思ふが、實に卓厲風發、裁決流るゝが如しといふ事であつて、初めて彼は單にインデッフエレントでないのみならず、又インドーレントでない事も分り、外は冷淡なやうてあるが、なか〳〵インナー、ヒート(内部の熱情)があり、又ハイカラな風流公子のやうであるが、實はシーリアス、ステーツマン(嚴然たる政治家)の一人にレックン、ウイズ(算上)するが出來るといふとを示したのである。で識者の中には假設でなく、此儘に繼續せしめた方がよからうと思うて居たものもあつた。彼は其時に已に總理大臣の試驗に及第した。否な優等の及第であつた。處が彼は其儘に居坐りする事の出來なかつたのは彼と伊藤公との關係上、各元老との折合に於て止むを得ない事情があつた爲めてある。彼の今日あることは、已に當時に於て豫想するとが出來たのである。

我々は茲て又ひつくり返つて桂といふ人のことを話

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さねばならぬ。世間ては桂侯を好運兒と思うて居る、又さう言て居る。成程彼は好運兒てあつたには違ひない。けれども彼は決して昇進の早かつた人てはなく、彼及び品川彌二郎の如きは長州人としては寧ろ昇進のヌラかつた人てある。彼は其同輩が將官となつた後まて矢張り佐官てあつた。同輩が華族となつた時も矢張り士族てあつた。早熟の方からいへば彼も亦西園寺侯に多く譲らない。然し我輩は茲に彼の傳記を語るの暇がない。彼は十代て君側に呼び出されて使はれて居た。戊辰の役には奥羽の間に轉戰したが、其時は僅かに二十に達した位てある。彼の當時の戰友の紀念碑は彼の手によつて世田ヶ谷の吉田松陰の墓の側に建てられた。彼は其後其儘朝廷に使へて居たならば彼の昇進は必らず早かつたに違ひない。處が彼は戊辰後は一個の學生となつて佛語を勉强した。而して彼は洋行の志あつて其準備せんとしたが、其洋行については尾崎三郎と競爭して——競爭といふ譯でもあるまいが實は彼に先ぜられて其便宜も失ふたのてある。て彼は戊辰の役に貰つた賞典祿を學資として自分て、プロイセンに遊學した。此事は彼の一生の經歴に於て最も注目すべきことてある。彼は伯林に於てどういふことをして居たか分らんが、少くとも兵學のみならず、文明人士の受くべき教育は一通り受けたに違ひない。彼が今日軍人よりして政治家となり、而かも政治家として社會問題にも宗教問題にも注意を拂て居る所を見れば、當時の素養のお蔭のあることは分らうと思ふ。こゝて不思議なるは彼は軍人としては山縣公と大關係あるに拘らず其政治上の洗禮は恐らくは木戸孝允公より受けられたと思るはことてある。彼れは外國より戾てからも單に陸軍の方面のみならず太政官にも入り、參議院にも入つて政治の方面にも從事した。彼れは實に日本の軍人として非常なる好機會を取逃して居る。それは西南の役に出て武功を奏することが出來なかつたことて、而して其れは彼れが當時外國に居たが爲めてある。十年の戰爭の後にいよ〳〵陸軍を國民的軍隊となす所のレオルガニゼーション（編制改革）がある時に彼が歐洲から歸て來たの

は、彼にとつて實は稀有なる舞臺であつた。で我軍隊の改正（レオルガニゼーション）といふことについては今一言にして盡すことは出來ないが、第一は佛蘭西式を改めて獨逸式にすること、第二は徴兵令を完全に布いて名目のみならず、事實に於てもいよ〳〵國民兵役とすることで、彼は實に其時のリーヂング、スピリット（嚮導者）であつた。明治十七年頃であつたか、此兵制改正の前に、歐洲の兵制視察として大山公が野津、三浦、彼及び川上などを率ゐて彼地に出掛けた。そして其旅行といふものは伊藤公の憲法取調旅行の我憲法に於けるが如く、我軍隊にとつては實に大關係を有するものであつた。其結果彼は陸軍に入り、川上は參謀本部に入り、事實に於ては桂の陸軍、川上の參謀本部となつたのであつた、其後の事蹟もいろ〳〵あるが餘りに管々しいから今こゝにはいはぬ。

彼と川上といふものは此時初めて、彼等の一種不思議なる交際を始めた初まりである。不思議なる交際といふのは、彼等は最も親しくあつて、而かも最も熱心なる競爭者であり、最も熱心なる競爭者であつて而かも終りまで手を握つて居たことを指すのである。而しこれは彼等自らさうしたのではなくして、實は主として大山公の力であるといはなければならぬ。かういふ處て大山公の本領は稍々發揮せらるるのであるが、大山公は彼等二人にいふには、「君等二人は互に仲よくして我陸軍の柱石として我陸軍を完成するに勤めて吳れ、薩長反目といふが、君等二人手を握て居さへすればそれてよい。兎も角も今後は君等二人でやれ」とて、充分に二人を勵まし、又共同一致すべきことを勵ましたのである。川上と桂とは川上が薩摩て、桂が長州といふ丈けて、二人の生年月も同じく、又彼等が少佐から大將になる昇進の日も同じであつて、桂と川上の間は川上の死ぬる時（明治三十三年）まで總て一緒であつた。桂と川上といふ人のコントラストは桂と西園寺とのコントラストよりも面白いが、此話は後日に讓ることにしよう。斯くの如くして桂侯は第一期の帝國議會に陸軍次官として最も立派なる役目を最も立派に勤め

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上げて、さうして初めて彼は軍隊と接近する爲めに第三師團長として名古屋に行た。彼は軍人であつたが、戊辰の役後直接に軍隊を率ゆることは、此時（明治廿四年）名古屋の第三師團長として行たのが初めてらしく思はるゝ。さうして廿七八年役に於ては兎に角海上の範域を以て名高くなつた。といふのは等三師團が先きになつて海上の冬籠りをやり、宋慶が十萬の兵と稱するものに圍まれて首尾よく其處を切り拔けた。而して歸て彼は初めて子爵になつた。彼の戊辰の功が其時初めて充分に識認せられたので、彼の廿七年間の辛抱が其時初めて効果を奏したのである。他の授爵になつた人は其時何れも男爵を貰ふか、又已に爵を持た人は一級上つたのであつたが彼と川上は二級飛んだのである。それから彼は臺灣總督となり、間もなく第二次松方内閣の初めに彼は陸軍大臣に擬せられたのであるが、其時已に極まつた其位置が、彼の責任にあらざる他の事情の行違ひよりしてとう〳〵彼は陸軍大臣になることを得なかつた。之ト當時に彼は自ら臺灣總督をも捨て、彼の昇進は復此處に一度頓挫した事になつた。處が明治三十一年第三次伊藤内閣の出來るに際して彼は陸軍大臣となり、彼が二十年來若くは三十年來望んで居た位置はこゝに初めて得られたのである。此第三次伊藤内閣が倒れて、隈板内閣の出來た時も、隈板内閣が倒れて、第二次山縣内閣の出來た時も、彼は依然として陸軍大臣たりしのみならず、第二次山縣内閣の時は彼は實に政府を代表して政黨を操縱した唯一の人——唯一の人といふ能はざれば、其最も主なる一人であつた。而して其後第四次伊藤内閣の出來る時に於て彼の其職に留ることを伊藤公が苦請したに拘らず、彼は病氣と稱して閑地に就いた。で自分の代りに兒玉を勸めて之に任せしめた。所が第四次伊藤内閣といふものは桂が先見の明があつたのかどうかは知らないが、久しからずして倒れ、而して此第四次伊藤内閣の倒るゝに際して桂には意外の事が出來て來たのである。意外の事とは即ち桂に總理大臣の位置をオッファー（提供）された事である。（上をはり）

桂、西園寺時代を解するは即ち現代の政局を解する也。本篇は僅かに桂、西園寺二侯の經歷の概略を物語りたるに過ぎず。乞ふ翹首して更らに續稿の出づるを俟て。（編者しるす）

尚前號「元老時代去る」の文に於て井上侯の性格の批評中「褻卑」とありしは「拙鄙」の誤り。又西鄕侯の性行の叙述中「馬關に談判に行つた時」とありしは明治十七年の「天津に談判に行つた時」の誤り也。玆に之を訂正す（編者再びしるす）

誤用せられたる高遠の眞理

戸川秋骨

相對する二個の直線にしてこれを如何に延長するも、遂に相會する事なきものを稱して並行線といふ。此の並行線の理より演繹して、三角形の内角の和は二直角に等しき事を證明し得べし。かくの如きは幾何學最初の定理にして殆んど自明の理なり。かくの如き最初の定理にして不確實ならんか、吾人は一本の柱をも建立する事能はず、一條の椽も安置する能はざるべし。蓋し幾何學の定理は凡て演繹の法に依りて得らるべしと雖も、その根本たるべき當初の公理は自からかくの如き事實より歸納せられたるものに外ならざるべし。吾人は實に並行線の相會すべきを想ふ能はず、三角形の内角の和の二直角に等しからざるを考ふる能はず。然るに意外にもこゝに斯くの如き明白なる定理を否定するものあり。高等數學なるものは則ちこれなり。其言ふ處に從へば並行線は終に相會すべしと。但しその相會するや永遠に於てなりといふ。並行線にして既に然り、三角形の内角の和の二直角なるも必らずしも自明の理にあらざるなり。

高等數學の言ふ處眞に斯くの如しとすれば吾人や、惑なき能はず。若し並行線を相會するものとして計上せんか、恐らく一軒の家も建築する能はず、一條の軌道も布設する能はざるに至らん。それ高等數學は數理の原則を論ずるものなり。その敎ふる處は算數學代數學幾何學の基礎たるべき原理たり。此の原理に依りて數に關する凡ての眞理は演繹せらるるものなり。而る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に今その原理を示すべきこの高等數學にしてかくの如き一見常識と相反するが如き眞理を敎ふ。抑も何の故ぞや。高等數學の敎ふる處非なるか。何ぞ必らずしも然らん、吾人は此の間に於て多大の眞理を認めずんばあらざるなり。

高等數學の並行線を以て相會すとなすには一大條件あり。曰く永遠に於てといふ事これなり。余はこの永遠に於てといふ事の、如何なる意味に於て用ゐられ將た數理の上に如何なる結果を生ずるやを知らず。然れども永遠の一語は非常なる條件なり。吾人若し永遠の一條件を獲取し得んか、また何事か爲し得ざらん。「若し」と「然しながら」の兩食料を供されたる馬は何千萬里をも走ると等しく、永遠の條件だにあらば、吾人は凡ての契約を履行するの要なきなり、凡ての責任を負ふの要なきなり。何となれば永遠には時日の制限なくして、永遠は終に來る事なければなり。余は實に高等數學に於て此の永遠が如何なる働きを爲すやを知らずと雖も、此れと等しき事情は哲學の考察の上にも亦認めらるゝを知る。哲學に於て絕對と稱するものは、則ちこの永遠にして、その眞理の尋常普通の道理に於ける働きは、高等數學の敎ふる處の普通數學に於けると等しきものあるなり。則ち絕對の眞理なる語は吾人の屢聞く處にして、その眞理は相對の眞理の基礎となるものなり。人間の行爲を硏究の對象せる倫理學も、世間を對象とせる社會學も、凡ての學問はその原理を此の純理の哲學に求む。諸般の學藝に對する哲學の地位は、則ち普通數學に對する高等數學にして、その敎ふる處は往々並行線の永遠に於ける會合となり、三角の內角の和の二直角にあらざる事となる。現代の哲學界は往々科學の侵略する處となりて、かくの如き絕對的の眞理を說く事稀れなりと雖も、なほ事實に於てはその威力依然として、學藝の全局を壓す、人間の心意は自から斯くの如き眞理を渴望するが故なるべきか。吾人は善惡無差別論を哲學にきけり。人間の權利平等の論を哲學にきけり。超人論を哲學にきけり。これ等はみな並行線の會合を說くものと見做すべきものならずや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

併しながら實世間に向つて善惡無差別論を實用せんか、その結果は知るべきのみ。若し他人の財産を盜用して可なりとすれば如何、その秩序を破り社會を亂すの害、豈に一軒の家を建立する能はず、一條の軌道を布設する能はざるの比ならんや。善惡無差別論のかくの如くに用ふべからざるは、何人の眼にも明らかなるべく、またかくの如き理論の適用せらるゝ處は自から別に存する事、具眼の人のよく了知する處なるべし。然れどもかくの如き絕對的の眞理は、往々その形をかへその姿を變じて出沒し、人をして計らず誤謬に陷らしむ事あるは吾人の屢々見聞する處なり。たとへば社會主義の如きは、その主旨と條理とに於て如何にも道理らしきものあり。然れども此れを直ちに現代に實行せんと欲するが如きは、恰も平行線の會合を期して家屋の建築をなすに等しく、到底行はるべきものにあらざるのみならず、此れを現實にせんと欲するに於ては、また多大の害毒を流布する事なしとせず。今日の社會主義は幾多の變遷を經て、余が今こゝに言ふが如き單純簡明の主張と思想とを有するものは少なかるべしと雖も、なほ往々到底現存すべからざる理想鄕を夢想して、人を謬らんとするものなきにあらず。余はたゞかゝる論者の場合を想像してこれを一例となしたるのみ。

顧みて吾が學問の歷史を一瞥するに、吾れに於ては曾て高等數學なるものあらざりき。所謂哲學なるものあらざりき。哲學らしきものはありし、哲學的傾向はありしと雖も、所謂純理を說く哲學なるものは存在せざりしなり。恐らくは支那に於ても然り、老莊の學はやゝ哲學らしき所ありと雖も、これ亦要するに支那一流の思想に外ならざるべきか。少くとも支那思想の大多分は孔孟の儒敎なり。儒敎は政治の敎なり若くは修身の敎なり。吾が國に若し哲學らしきものありとすれば、そは吾が人心の自然より出てたる渴望にあるべし。佛敎は支那に於ても吾が邦に於ても、人心をして形而上の考慮に嚮はしめしと雖も、そは宗敎としてなり。宗敎は結局宗敎なり。哲學上の思想は自からその趣を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

異にするものにして、これ實に吾が國に缺乏せる一事實なり。一言にしてこれを蔽へば、吾が國民は並行線の會合すると云へる高等數學を知らざりしなり。故に其思想は決して現實を離れず。その倫理は父子君臣の倫理なり。男女は必らず別あるべき倫理なり。並行線の會合、人間權利の平等の如きは思ひも依らざりし學說なりき。然るに西歐の文物輸入せられて、こゝに高等數學も共に紹介せられたり。所謂哲學的思想は新に渡來せり。余がこゝに哲學といふは心理學を指すにあらず、認識論を言ふにあらず。哲學的考察の生命あるものなり。自由平等說の如きはこれなり。天賦人權說の如きはこれなり。男女戀愛觀の如きも亦その一なるべし。

　臣下は必らず君王に忠實なるべしと敎へられたるものが、一朝君王も人民も平等の權利を有すと告げられたるもの豈に驚かざらんや。往々主君の壓抑を被り來りたるもの、驚きて且つ喜ばざらんや。人間各個のその自由を享有せる由を聞きたる時、かれ等實に意外の感ありしなるべし。こゝに於てかかれ等は斯くの如き所說の起因と意義とを問ふの暇なく、自由民權說に隨喜せり。一も二もなく壓制政府はこれを顚覆すべしと主張して狂奔せり。自由黨はかくの如くにして生れたり。かれ等は實に未だ夢想だもせざりし、並行線の會合を聞きたるなり。且つその自由平等說の如きは並行線のそれの如く、難解のものにあらずして、頗る俚耳に入り易きものなりき。かれ等の歡喜は察すべく、此れを以て主義となし、これを以て一生の金科玉條となしゝも怪むに足らず。則ち自由說に狂奔したりし人々は、その產を傾け、その業をすてゝ、この眞理のために使役せられたり。然れどもかれ等はこの眞理に魅せらるゝの餘り、初等數學の事を忘れたり。かれ等は人間の自由を獲取する前に、自身の獨立を强固にすべき事を忘れたり、自身の生活を安全にすべき事を忘れたり。かくの如くその熱中せるものを獲取せんと狂奔するもの途の半に達するや達せざるやに於て、すでに顧みて自身の生活難に際せるを悟れり。余は今こゝに自

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

由黨の歷史を繰りかへすを欲せず。只かの狂奔の結果は士人の窮乏となり困苦となり終に墮落となり、政黨としてはその曾て打破せんと欲せしもの丶爪牙となり少くとも妥協して安逸を貪るものとなり了せり。これ實に絕對的眞理に傾聽して、却りてその終りを善くせざりし明白なる一例にあらずや。

自由黨の事は過去に屬す。吾人はなほ現在に於て同様なる眞理の誤用若くは濫用の行はる丶を見る。そは青年男女の行爲なりとす。古の敎に從へば男女は七才にして席を分つべきものなりしといふ。當時は人も社會もこれを以て當然の事となせり。戀は御家の御法度なる事、各家を通して然りき。然るに新らしき哲學は——余は敢て哲學といふ。所謂新思想にしてその淵源は哲學にあり——男女相愛するの自然なるべきを敎ふ。男女の相愛は則ち結婚の因なりと說く。此れ豈に意外なる福音にあらずや。古にありては子女は常に父兄に從順なるべきを論されき。然るに新らしき敎は精神の自由なるべきを告け、苟も自個が向上のためには、家事も放擲すべく、責任をさへ放棄するも妨げずと說く。(かくの如く明白に具體的に敎へたるものありしや否や知らずと雖も、その意義は瞑々のうちに傳へられたる處にして、今もなほ然か敎へられつ丶あるなり)これまた極めて好都合の敎訓ならずや。決して相會すべからざる並行線の會合すといふよりも都合よき敎理ならずや。かくの如き福音かくの如き敎義を說かれたる青年男女は如何ぞ雀躍せざらんや。己が好み合ふ男女が、父兄の言に反き、先輩の敎に聽かず相ひ携へて逐轉ずるは自然の徑路にあらずや。煩悶と稱し、宇宙の六原理を探ると稱して、務むべき家業をすて、學生は當然勵むべき學業を放棄し、展轉反側し、その極自身を自由にするは自身の權利なりとして、淺間に至りはた華嚴にゆく。これまた自然の數にあらずや。余は上來記述せる理に依り青年男女のかくの如き行動を以て、誤用せられたる高等數學に出づると爲す、則ち絕對の眞理を濫用したるものとなすものなり。蓋し男女の相愛は自然の事にして素より當然の事なり。個人の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

精神はその尤も貴重すべきものにして、これがためには形而下の事すべてこれを放擲するも或は可なるべし。然しながら青年男女のかくの如き擧動は、算數學代數學幾何學等を學ばずして、直ちに高等數學の一部を生噛りにしたるものならずや。三角形の内角の和が二直角なるや否やをさへ知らさるに、早く並行線の會合を主張するは愚にあらざれば狂なり。愚も狂も亦可なり、然れどもかくの如く只高等の事にのみ狂奔するもの、それ遂にその青年自身に禍するなからんや。殷鑑は遠からず、自由黨は則ちこれなりき。戀にあこがれ、煩悶に狂ひたるもの丶その結果果して如何になるべきか。並行線を以て會合すべしとなして柱を立て椽を置くもの丶愚と等しからずや。此れがために學校は卒業するを得ず。父兄の信用は消盡し、その結果曾て自からが輕侮し擯斥したる徒輩の前に膝を屈するに終らざるは稀なるべし。余は青年諸君のこ丶に注意せられん事を望む。殊に切に留意せられん事を望む。高等の數學絶對の哲理は可なり。吾人はこれに依りて始めて日常の行爲行動に意義あらしむるを得るものなり。然れともそは尋常普通の事を完ふしての後に於て致ふべき事なりとす。青年諸君或は言はん、すでに絶對の眞理が日常行爲の基礎たらば、日常の行爲に先き立ちてこれを知るの要あらんと。否、甚だ然らず。代數學幾何學を知らざれは解拆幾何學は學ぶべからず。數の理は深し、豈に單に解拆幾何學の片言隻語を聞きて直ちに此れを了知し得べけんや。余は青年諸君が此意を體し、奮勵その任務を盡されん事を重ねて切望す。願くは余を以て緩漫迂遠の說をなす學究となす勿れ。事例は自由黨の事を擧くるまでもなし、青年の失敗は今日比々目睹する處ならずや。

　併しながら余は獨り青年諸君に向つてのみ注意を望むにあらず、父兄先輩諸氏の猛省をも乞はざるべからず。余が地方の學校に敎鞭をとりしや、生徒の事を歎願するもの、大抵父兄が頑固なればといふを常とす。蓋し口實なるや知るべからずと雖も、これを口實となすはそのなし得る程の事實が世に存在するが故のみ。

余は則ちかくの如き場合必らずまた答へて言へり。爺の藥鑵と頑固とは古來の定則なり。斯くの如きを憂慮するは意氣地の乏しきものなり。君志あらば宜しく自から荊棘を排して猛進すべしと、余は今もなほかく言はんと欲するものなり。然れども世の父兄先輩の頑固なる往々青年の志を知らず、却りて青年を謬らしむる事なきを保せず。青年が所謂高等數學に狂奔するに拘はらず、父兄先輩のうちには高等數學の存在すら知らず、二二は四なるべく、二に三を加ふれば五なりとの至極尤もなる加減乘除の外を知らず、並行線の會合に至りては夢想だもせず、ハムレットの所謂覆載の間、所謂哲學を以て考察するもの以外の事物ありとする、高遠の眞理あるを知らざるものあり。かくの如き父兄先輩はその子弟の行動の意外なるに驚き且つ怪みまた憤激して、こゝに彼此の間に巨大なる溝渠を作成する事少なからず。焉んぞ知らん青年のその動作は、現代の教育が徐々に敎へんとするものを一擧にして味はんとしたる結果なるを。その結果は悲むべし、然れども青年をして茲處に至らしめし所以のものは吾人の深く同情し、はた識者の大に注意すべきものなくばあらず。青年の過失は叱責するを得べし。父兄先輩の無智に至りては、これを矯正するに難し。先輩諸氏自からの注意を乞ふの外道なからんか。

國體進化論

小山東助

一

勝利は人をして强からしむ、一個人に於て然るが如く、一民族としても亦然り、戰捷の光榮に依つて、日本民族の自信力は、更に一段の高進を見たり、旺盛健全なる自信力は、發展進歩の原動力なれば、其高進を見たるの事實は、祝福するに堪へたれども、由來自信力の旺盛に過ぎたるは、動もすれば盲目なる自負心と變じ、却つて健全の度を失ふ者なり、健全の度を失へば、發展進歩の原動力たる可き者も、却つて退嬰保守の封

助者となりて、勝利の華實を凋萎せしむ、素より識者の與みする所に非る也。而かも勝利は美酒の如く、往々にして人を酔はしむ、全く酔ふに至らざる迄も半ば酔ひたる勝利者に在りては、自己の能力を信ずるの餘り、他の長所をも閑却して、包容攝取の必要をすら、或は蔑視し去らんとす、天下半酔の人少しとせず、予をして直截に言はしむれば、日清戰後に於ける日本主義主張者の如き、即ち其好模型なりき、日露戰後に於ては即ち如何、近來徽音を放ち來れる國體論者の如き亦是れ也。只時勢の進歩は、隱約の中に在り、否寧ろ顯然たる者ありて、十年以前には兎も角も團體的の一思潮を爲す迄に日本主義は行はれたりしも、昨今の國體論は、氣息甚だ奄々として、殆んど半死者の呻吟を聞くの感なき能はざるの差異あるのみ。共に是れ旺盛なる、且つ幾分の誠實ある、國民的自信力の表現なる可けれども、審に察し深く思へば、斷じて健全なる自省力の所産に非る也、自省を缺ける自信は、概ね皆妄信也、迷信也、暴信也、日本主義に就ては別に辯ずるの要無し、近時の國體論に至つては、如何に近世科學の假面を被るとも、遂に半は盲目的なる獨斷の弊たるを免れず、之を以て直ちに暴信、迷信、妄信の發表なりとは言はざるも、少くとも自省を缺ける自信の發表たるは確か也、日本帝國の內部生命は、斯の如き固陋偏狹なる信條に固着す可くもあらざれど、國民的に自省し、世界的に達觀する根本の見識無きが爲めに、此種の國體論は生るゝ也、玆に所謂此種の國體論とは、博士加藤弘之男の近著「我が國體と基督教」に現はれたる如き思想を指す者也。

予は加藤博士の著書全體に就て、批評を下さんとする者にあらず、此事一の興味ならんも、世論多くは之を悉せり、博士の明達なる、必ず既に了悟する所ありしならん、假令了悟するに至らざるも議論の要點は、說者難者共に能く會通したるならん（予は特に「太陽」及び「新人」に現はれたる海老名彈正氏の評論を以て其要を得たりと信ず、他に基督教趣味の新聞雜誌多くは辯難の文を載せたり）只予が瞥見したる範圍內に於て、何となく立意の透徹を缺くの感あるは、第一、國體其者に對する觀念是れ也。第二、國體

と世界教との根本的關係に就ての思想是れ也、假りに世上業に已に此二大要點を明辯したる論者ありとするも、予は獨自の確信に基いて、教を博士に請ひ、且つ其省慮に備ふるの必要を感せざる能はざる者なり。

二

吾が國體の解釋に就ては、明治の昭代誰か復た一點の疑惑を容れむ、是れ實に天日の煌々たる如く大空に書かれたる國民的確信なれば也。加藤博士は之を説明して曰く、

> 吾が國體と言へば申す迄もなく日本民族の大父たる帝室が萬世統治の大權を掌握して族子たる吾々臣民を撫育し給ひ又族子たる吾々臣民が其統治を受けて臣子たる道を盡すといふことに過ぎぬのである

博士が此説明は、區々たる用語の缺點を顧みず、直ちに其意義を捕捉すれば、何人も必ず首肯する所ならん、憲法の明文に「大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す」と謂ひ、典範に「大日本國皇位は祖宗の皇統にして男系の男子之を繼承す」と在るを對觀照合し來れば、博士の呼んで國體と爲す所の者の能く國法に適ふを知るべし、今や欽定憲法と皇室典範とは、儼然として帝國の礎柱を爲せり、現在及び將來に於て、誰か復た之を動かさん者ぞ、况んや此根本礎柱たる、全く憲法と典範とが新に創造製出したる偶然の作品に非ずして、二千五百年の歴史に於て鎔鑄陶冶せられたる國民的産物たるに於てをや。本來憲法若くは典範ありて始めて國體有に非ず、寧ろ國體ありて始めて憲法若くは典範を生めるなり、此理は多辯を要せざらんが、然らば國體の本質如何と言ふに、民族的確信即ち是れ也、而かも此民族的確信たるや、一時の輿論、若くは一派の學説と言ふが如き者とは全然種類を異にして、その拔く可からざる根帶を建國以來の歴史に有する千古一貫の大精神たらずんばあらず、乃ち日本の國體は、その源を建國の太初に發し、明治の昭代に復活して、萬世の後に通貫す可き不窮（エタアナル）の生命（ライフ）を有する也。何が故に生命と謂ふ乎、國體は民族的確信の結晶にして、民族的確信は、即ち民族一般の精神活動に外ならざれば也、既に精神活動なり、故に生命あり、而かもその活動たるや、全く帝室を中心とする無量の崇敬心を本として、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民族の亡滅せざる限り、永遠に存續す可きが故に、之を不窮の生命と謂ふ、決して妨ぐる所無きなり。且つ夫れ旣に生命なり、故に進化あり發展あり、我が日本の國體も、之を歷史の光明に照せば、進化發展の迹、歷々指點す可き者ある也。而して眼一たび此處に開け、日本民族の確信が進化發展しつゝありし事實を洞察し來れば、吾人の國體觀は、加藤博士の說明のみを以て到底滿足する能はず、博士の說明にも優りて高貴の價値ある或物を我が國體の上に、見出し得る也。予の斯く謂ふは、斷じて族父統治の思想を評價するに非ず、君臣父子の關係は、建國以來不動の體制にして、此點は毫も議論を要せず、國の斯くして立ち、民の斯く信じたる一事は、歷史的確實なれば也、只此根幹たる、本來不窮の生命を有する民族精神の發現なるが故に、之を中心として枝葉の繁茂し、華實の生育するは、條理の當に然る可き所なり、枝葉の繁茂し、華實の生育すると同時に、根幹も亦成長發達す、成長發達の中には自ら進化の理法行はる、國體にして民族的確信の表現なりとせば、進化無くして止む可けんや。

三

予は今茲に至つて、自己の思想を明表せんが爲めに、又世の誤解を避けんが爲めに、「進化」と云ふ語(ことば)の意義を先づ辯析せんと欲す、「進化」の解は學者必ずしも同一規に出でじ、且其適用範圍に至つては、特に多くの異見あらん、されど予は便宜の爲めに總ての紛論を避けて、直ちに斯學の一泰斗教授ル、コンテの定義を採用し、之を以て予が論步を進むるの利器とせん。教授曰く、「進化とは、內在の諸勢力に因り、或一定の法則に從つて、不斷の進步的變化を爲すと是れ也」予は此意味に於て「進化」の語を解するの、甚だ要を得て事に充るを信ず。進化の觀念の中には、自ら變化(チエンヂ)の意義を寓す、是れ豈國體不動の思想と枘鑿相容れざる嫌無からんや、人或は之に依て國體進化の一語を憤るもあらん歟、恐くは予が杞憂に過ぎざらんも、豫め之を辯明する、亦無用なりとせず、實に進化は變化也、不斷の進步的變化也、而かも予の今茲に進化を說くは、素より

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現在若くは將來に於て、個人の頭腦に描き出せる特殊の理想空想を本とし、擅に國體の變化を企つる亂臣賊子ある可しと豫想するに非ず、斯の如きは日本の國情に照して殆んど有り得可からざる事なり、若し假りにも有り得る事とせば、そは全く國體の退化にして進歩的變化にはあらざる也、蓋し國家社會の進化とは、部分と全體の一致調攝したる有機的發達を意味す、しかるに若し少數人の頭腦に描き出せる一時代の理想空想を以て、千載連綿の傳統を有する民族全體の確信を動かすが如き事あらん乎、是れ即ち部分と全體との調和を破壞する所以にして、進化(エボリユーシヨン)に非ず革命(レボリユーシヨン)なり、單に有機體內部の組織を破壞するのみならず、その結果として有機體其者の生存を不安ならしめ、其秩序と永續性とを損害し終らずんば止まざらん、斯くの如きは一定の法則に從ふ進歩的變化の思想とは、大なる徑庭無きを得ず、故に國體進化の說にして大聲高唱せらるゝとも秩序の愛護者、進歩の先導者を喚起するの効力こそあれ、斷じて秩序と進歩の破壞者を生み出すと無かる可き也。況んや茲に所謂進化說は、歷史の足跡に讀まるべき民族精神の經路(プロツセス)を說明するに止るに於てをや、若し日本帝國の歷史にして、此進化論的見地より說明せらるゝ事無くんば、日本人の過去生活は僅かに其一少部分のみ了解せられたりと謂ふ可き也。國體の如きも進化說の光明に照して始めて、眞にその萬國無比なる精華を認識し得べしと信ず。

四

予は今極めて短簡に、國體進化の史蹟を叙せんと欲す、本來我が國體は、建國の神話に於て、最も高明に言ひ現はされたり、即ち天照太神、高皇產神と相語りて、夫の豐葦原瑞穗國は、吾が子孫の王たる可き地なり、皇孫就て治せ、寶祚の隆えまさんこと、天壤と共に窮り無かる可しと宣ひしは、民族信仰の根本源流にして、事は曠遠の昔なるも、兎に角之を國體成立の豫言時代と謂ふべし。神武天皇橿原の地を相して、宮室を經營し、「恭しく寶位に臨み、以て元元を鎭むべし、上は即ち乾靈授國の德に答へ、下は則ち皇孫養正の心を弘め

ん」と詔せられたる當時、豫言は玆に滿されて、國體の成立を見たる也。而かも其後の數世紀間は、國體動搖の時代とも謂ふ可くして、帝統の威嚴は全く確立せられたるも、皇族の中にすら謀叛者あり、不敬者あり、天皇の命令は直領の民以外に及ばず、加ふるに邊疆の民猶ほ未だ王化に濕はず、三韓の事亦新に起り、武力統治の必要屢起れり、當時の形勢明かに國體の動搖を起せり、然れども此動搖は必ずも不安の動搖にあらず、寧ろ安定の先容たりとも謂ふべかりし也。佛教渡來以後に及んで、國體進化史上最も注意す可き二大現象起れり、一は失敗に終り、一は能く成功したるが、國體は此成功に依つて進歩的大變化を來したる也。之に就ては古來幾多の議論あるも、事實は素より曲ぐ可からず、曲げざるに依つて却つて國體の精華を發揮し得べしとは予の確く信じて疑はざる所、此點に關する卑見は、特に加藤博士一流の國體論者の注意を請はんと欲する也。

二大現象とは何ぞや、聖德太子在世の當時、佛教の信仰を基本として國家の體制を改革し、宗教と政治とを合せて天皇の大權に歸せしめんとしたる證跡あること也、若し此思想にして實現せられたりとせば、日本は教權統治の國となり、天皇は即ち法王たるに至りしならん、即ち族制上の權威に立てる天皇は、宗教上の權威に依つて立つの姿となる可かりしも、此冀望を實現するに及ばずして太子は他界の人となり、計劃は全く失敗に終れり、然れども太子の遺したる十七條憲法を讀むに、後世國學者の指彈するが如く、崇神敬意の意は毫も捕捉するに由なくして、其第三條に於ては、明かに支那哲學の思想たる天地覆載の理を以て、君臣の義を解釋し、大權の源は祖宗に發すとする傳來の民族信仰をば全く閑却したるの觀あり、恐らくは是れ新信仰の萠芽とも謂ふ可かりし歟、太子は佛教的に國體を變更する能はざりしも、後ち藤原鎌足起るに及んで、儒教的に國體を變更したり、變更したりと謂はゞ言葉少しく强調に失せんか、傳來の族父統治的觀念に加ふるに、新なる意義を以てしたる也、即ち大化の改新は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

根本に於て國體の改新とも謂ふ可かりし也、新なる意義とは何ぞや、孝德天皇即位の六月改元ありて其翌日大詔下り、其中に「復當有レ信、可レ治二天下一」の語あり、此一句大に注意を値すと謂ふべし。天皇の大權は本來族長たる資格に存して、其德不德、仁不仁に關するに非ず、而かも儒教を生み出したる支那は之と異りて、等しく族制統治の體樣を爲せども、彼は複姓、我は單姓、彼に在りては統治の權威を才德の人に歸し、我に在りては血族の長者に歸す、故に彼に在りては不德の君あれば放伐必ずしも惡しからず、我に在りては苟も敬を君に失へば、亂臣賊子たるを免れず、是れ彼我國體の明白なる差別なりし也。而かも大化改新の詔には、信あれば天下を治む可しと謂ふ、若し此意を窮極して、「信無ければ天下を治む可からず」と謂はゞ如何、是れ明かに日本の國體に背馳する思想にして、民族的確信の斷じて許さゞる所たらざらんや、然らば大化改新の詔勅は、空文虛辭に過ぎずと謂はん乎、是れ甚だしき曲論也、此種の思想は此一句に止らず、大化二年八月の詔にも、「萬物の內人是れ最も靈なり、最靈の間、聖人主となる、是を以て聖主の天皇は天に則りて御寓す」とありて、儒教の思想、光彩既に燦然たる也、且つ此改新の政に依つて、大權の活動範圍は一層擴大せられ、從來天皇に直隷せられざりし私領の民も亦親裁の下に立つに至れり、當時天皇は單なる族長の權威を以てしては、此事を斷行する能はざりしも、君主の職分は民の父母たるに在りてふ儒教の思想に基き、民の信を得るに依つて、百姓を治む可き道德的權威を樹てられたる也、而かも此新權威は、族長としての舊權威に全く代りたるにあらず、傳來の舊權威は依然として儼在するも、之に加ふるに新權威を以てして、新附の民を化育するに能く其道を失はざりし也、譬へば傳來の血族的權威は樹木の根幹の如く、新生の道德的權威は宛ら枝葉の如く、華實の如しとも謂ふべき者、大日本帝國が單なる一民族一姓氏の團體に止らず、天孫人種を中心として、何處にも膨脹し、如何なる人種をも包容し得べき偉大の國體を現出したるは、當に此時よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りすと謂ふ可き也、否、日本人の儒教を受け佛教を容れたる心胸の中には本來斯の如き進化を遂ぐべき要素を充盈したりしなり。只此間に一疑問の存するは、即ち此新權威を是認しながら、如何にして日本の國體が支那の夫れに依つて變改せられざりし乎、換言すれば如何にして「信あれば天下を治むべし」の思想を受納しながら「信無ければ天下を治む可からず」の思想を拒斥し、明かに兩者の間に存する論理的連鎖を裁斷して、其一を取り其他を捨てたりし乎の問題なり、此問題は古來國學者流の猶ほ惑を感ずる所なりしも、之を我が國體の本質に照映し來れば、此論理に合せざる如き事實も、自ら氷釋するを得べし、蓋し「信あれば」の語は「信無ければ」の對照語と認む可き者にあらずして、只民族の統治者たる族父の長者に、道德的權威の存在するとを表明したる而已、即ち大化改新の時代より、否、寧ろ其以前よりして、民族一般の確信は、天皇の血族的超越性を認めたるのみならず、又其道德的超越性を認めたる也、既に道德的超越を確認す、奚んぞ信無ければの疑惑を惹起するの要あらんや、此點より觀察すれば、大化改新の當時に於て、我が國體は寸毫も其本質を傷くる事なくして、能く支那國體の美所のみを吸收同化し得たる者と謂ふべし、予は玆に於て明かに國體の進歩的變化を認識せざるを得ざるなり。

五

王朝以後は政權武門に移るに及んで國體消衰の時代に入りたり、建武の中興は今之を說かず、室町時代に入つては皇室の衰微殊に甚しき者ありき、三條橋上より內侍所の燈影を望み、紫宸殿前市人の茶店を見たりし頃は言ふも畏し、足利義滿の驕瞞殿上人を脅嚇して太上天皇の僭稱を擅にしたる當時を回看せば、國體の明滅眞に震慄す可き者ありし也、而かも民族的確信は、猶ほ一道の生命を保ちて、信長起るに及び、漸く春色を綻ばし、秀吉絕世の資を以て、群雄駕御の志あり、諸侯を聚樂の第に會して、勤王を誓はしむるに及んで、天日堂々、暗黑の中より光耀し出でたり、德川氏天下を一統して、文教大に興隆するや、國學頓に鬱起して、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歷史的精神を復活し來り、國體の觀念旺然として强大莊嚴を極めたるが、偶々外來勢力の壓迫、內國封建の瓦解、緣因互に錯綜して、遂に王政復古となりたり、當時の國體觀念を仔細に吟味するも頗る有益なるべけれど、今は姑く之を措く、只玆に注意を逸す可からざる一大要點は、明治初年の王政復古は、一面復古なりしと同時に、一面全く維新なりしと是れ也。國體の觀念も復古したり、德川時代の熱心なる究硏に依り、新面目を以て復古したり、而して同時に又世界の思潮にも觸れて、全然維れ新なるの精神、活氣、識見を自ら開發したりし也。五條の誓勅最も能く之を表明す、その第四に曰く舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべしと、此一語、深く其精神を味へば、國體の觀念にも、觸着する所無くんばあらず、族父統治は建國以來の國體なるも、大化の改新は統治者の血族的權威に加ふるに、道德的權威を以てしたり、明治維新に至つては、更に加ふるに合理的普遍的權威を以てしたりとも謂ふ可き也、換言すれば統治者親ら合理的普遍的權威に基いて臣民を統御するの本分を宣明し給へる也、且又之と同時に一般臣民に向つて、合理的普遍的權威を以て一切行動の基礎とす可きを垂示し給へる也、蓋し天地の公道は智識上にも信仰上にも、合理的普遍的なるに相違なければ也、誓勅の第五は又廣く智識を世界に求めて大に皇基を振起すべしと謂へり、智識とは豈啻に物質に就てのみ之を言ふ者ならんや、焉んぞ道德、倫理、宗敎の智識を度外視して可なりとせん。斯くして明治維新の精神は、人心を開發し、皇謨を進張したると同時に、國體の觀念にも莊大の生氣を吹き込みたる也、この生氣を呼吸せる明治の臣民は、傳來の確信を固うすると共に、之を開廣するを得たり、こゝにも國體觀念進化の一段を認め得べき也。

顧みてル、コンテの定義を想起せしめよ、斯の如きの進化は、如何なる內在力に依り、如何なる法則に依つて行はれたる乎、之に就ては今精論を試みざれども、兎も角國體進化の事實は、如上の史蹟之を明表して餘りあらん、而して統治の主體が皇位に存するの一事、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

萬世に亘つて不易なると同時に、統治者と被統治者との間が、血族的父子の關係より道德的、及び合理的父子の關係に進化發展したるの事實を承認するに難からざらん、吾人は斯く思考し來つて、近時の所謂國體論者が、之を是認するや否やを聽かんと欲する者なり。若し此第一問題にして定まらんか、國體と世界教との關係問題は、刄を迎へずして立ろに釋け去らん、蓋し進化の光明に照したる我が國體の觀念は、道德的合理的なる限り、世界教と相扞格する些の理由無くして、寧ろ之を包容し攝取し同化するを以て、原始以來の特質とする者なれば也、若し夫れ不幸にして何等かの扞格あらんか、恐くは是れ兩者の一方が眞理に離れたる結果なれば、之をして互に調和融合せしむるこそ國家をして偉大ならしめ、世界教をして眞價値あらしむる所以なれ、眞理は只一つなり、只一つの眞理の前に、萬民を歩ましめ、國家を近けしむるは、識者の任務たらざらんや。今の時に當りて國體を說く、必ずしも無用なりとせず。只その本質と歷程とを窮めずして、單なる傳來の一思想に固着し、生々進步の原理、その中に在るを思はざるは迂と謂はざる可からず、況んや平生進化論の鼓吹に熱心なる加藤老博士の如きに於てをや。國體を高調する餘り、世界教の攝取をすら之に害ありと論ずる如きは、畢竟國體其者の解釋に大なる誤謬あれば也、中に萬古不易の原理を寓して、枝葉華實の生々進化する民族的精神の永生を明認せざる結果也。

次號の本欄には事故ありて本號に收め得ざりし
鎌田榮吉氏　の外尚ほ
中島德藏氏
の論文を掲ぐべくその他諸名家に續々依賴中なり



萬國社會黨大會

『ダス、エコー』

八月十九日、シュワブ州、スツットガルト市城内の聽堂に於て、萬國社會黨大會は開會せられたり。該市は時ならぬ世界的光景を放ち、旅館に充滿せる客は上は世界を風靡せる英語を以て語るものより、下は紐育州ザツトーの猶太人組合に至る、此組合の委員は主として露西亞波蘭の流民にして、かの露國に於けるポグローメ(猶太人虐殺の事)の爲め其故鄕より追放せられたる露西亞波蘭に於ける猶太人の利害に關して素晴しき意氣込を以て來れるもの也。渠等は流浪して亞米利加に渡り、玆に「猶太人勞働者組合」なる團結を形造れり。千九百四年、アムステルダム市に於て開會せられし萬國社會黨大會に於ける如く、今回も亦世界の各部よりの猶太人の應援は頗る强大なるものあり。渠等の異様の風丰は寧ろ萬國賤民大會と稱するも至當なるが如き扮裝をなせり。スツットガルト土着の委員は、之と各國委員間に衝突の少からんことに盡力せし旅館の注意怠らざりき、露西亞波蘭委員の其他の部分は瑞西の放流地より來る。其主なるものはプレハノフ。アレキゼルロド。及レオ、ドキチュの三氏也。後者は十三年間西比利亞に謫せられ、後日本を經て瑞西に逃亡せるもの也。其數奇の生涯を抒したる作物ベルンに於て出版せられたるもの有り。

委員の主なるは獨乙の三百人、就中百五十人は黨人にして殘る百五十人は職工也。之に次ぐは英國の百三十名、凡て公民的風采を併へたるチヤキ〳〵の英國紳士なれば樂天的のドッシリしたる人達也。次は瑞西の十八名、其首領は酒精問題を專門とせるチューリヒのグロイリヒ。其次は伊太利の十六名、之を率ゆるものはマイランの教授エンリコ、フェリ氏、伊太利の熱心なる社會主義唱導者也。伊太利のレビジョーニスト中ローマのレオニダ、ビスソラア亦之に加はれり。バルカン諸國よりはブルガリの九名、ルメニアの四名あり。瑞典よりは二十五名、那威よりは七名、丁抹より十六名の委員を派遣せり。和蘭の九名の代表者の引率者は偉丈夫老漢バン、コール氏也、アムステルダムの會議の議長たりし人。渠と双んで女流記者ロランド、ホルストなる美女丈夫あり。佛期西は此會議中第三位を占むる有力なるものにして委員九十名。ジョーレ。ジュール、ギユーエ。ベーランの諸氏が主なる指導者也。渠等はアムステルダムの會議に於ては三派に分れしが、此度は合併して佛期西社會民主黨の下に立てり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

北米合衆國の委員は二十一名にして、米國女子社會黨團體を代表せる女委員も一名あり。小さき白耳義も廿八名を出したり、是に仍ても此工業國が社會主義の擾亂烈しきことを見るに足らむ。其他の外國よりはアルゲンチンの三名、北亞弗利加の二名、墺太利亞及日本の一名を擧ぐべし。濠州の委員はレオン氏にして、職工問題を立場とせり。日本の代表者は片山潛氏也。此外に西班牙の五名を加へ、總員實に八百八十六名と註せらる。

其主席議員は白耳義のバンデルベルデ氏也。其ジョーレ。ベーラン。バンデルベルデ等の名は場中の人の口より口に語り傳へられ、日本、印度の代表者も場内の注目を率きたり。

アウグスト、ベーベル氏の演說

萬國社會黨大會開會の席上に於て、アウグスト、ベーベル氏登壇するや歡聲場を轟かし、喝采破るゝが如く暫時は止まざりき。氏はやゝ激越の調を以て述べていふ。

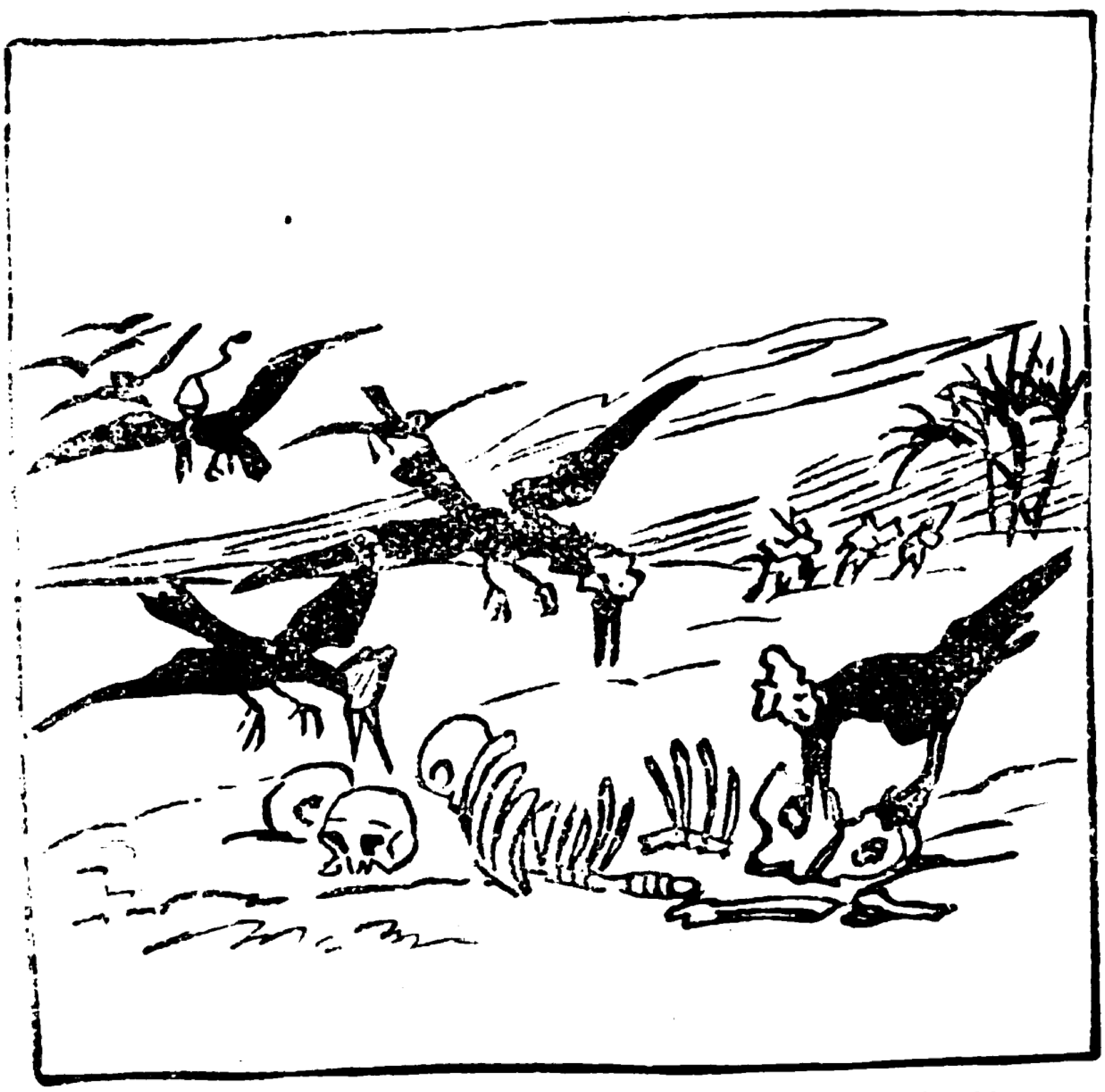
獨乙黨員の名を以て予はスツトガルトに於て衷心より喜んで諸君を迎へんとす。萬國社會黨大會の獨乙に於て開會せらるゝは這回を以て嚆矢とす。吾人がアムステルダムに於て此大會を催ふすや、世人は市民の自由の避難所として世界の外の所に比すれば特別なる安靜を得べくもあらぬ新獨乙帝國に於て開會するを危むが如くなりしも、吾人は斷然之を決行したりき。實に目と鼻の間なる伯林へ行く事は吾人決して快しとせず。ピユロー伯及警視總監の眼前に於て開會する事は吾人の趣味に叶へるものに非ざるなり（喝采、贊成々々の聲）然れども吾人は伯林に於て不可得のものゝ、スツットガルトに於ては可能なるべきを思ふ、さるからに吾人は茲に萬國大會を催ふし、前人の格を破りぬ。（拍手）



ROOSEVELT'S WAR SCARE. —*Tokyo Puck.*

ベーベル氏は諸國に於ける勞働者運動の進歩を舒べ、更に語を續けていふ。獨乙に於ては明かに之が除外例たり。市民黨、政府、及郡市役所が吾人に對して撰擧競爭をなす事、予が四十二年間の政治的活動に於て未だ逢遭せざる所且つ世界に於て決して非ざりし所也。其結果たるや獨乙社會民主黨は三百二十五萬の有撰擧權者を有し、即ち其有者は四百萬に上らんとする事是也。議員の數はもとより四十三に下り、世

人は伯林帝城に於て社會民主黨の敗亡を語るに至れり。敗亡か衰滅か吾人之を知らず。吾人は雨降つて地堅まるの喩の如く、以前よりは確固なる立場を得たると思ふの外なし。三百二十五萬の有撰擧權者あれはかゝる撰擧競爭に於ては充分也、蓋し此三百二十五萬は鐵の如き硬固なる人而已なれば、如何なる境遇に立つも吾人は充分之に信任するを得るを以て也。されば敵手に於ても已に之を察知せるが如し、それかあらぬか這回の捷利とても吾等は今日全く疑問として思料せり。偶然の捷利と稱し居れり。吾人は只正月二十五日の敗北を恢復することを括目して待たん而已。政治組織を附與せられたるもの最近に於て十三萬六千と稱せらる。即ち三十八プロセトンに騰れり。而して吾人に在つては吾人の皇帝が七月に於て十七萬馬克の收入を捨て得たるよりは一層高揚的のもの也。之に加ふるに職工組合の發達あり、社會民主黨の敗亡とは恁もかゝるもの也。世人は何故にフォン、ビュロー侯及其君は普露西下民には普通撰擧權を與ふる事を肯せざるかを思はざる乎。今一回敗北を試むべき好機は這裡に在らん。而もフォン、ビュロー侯は如今「北獨乙デルゲマイネ新聞」に於てナウマンスの普通撰擧の爲めに惹起せる擾亂に對し、此擾亂に向ふや騎して靈鳥を獲るが如き易々たるもの也と説明せしめたるをや。吾人は黨員諸君に言はんと欲す、吾人普露西人は百折屈せず撰擧場裡に角逐せんとすと。(拍手)屢勝たしむるは適以て其倨傲の念を熾ならしむる而已。吾人は先匠ゴエテ言はずや「得意の日の續くよりも耐へ難きものはあらじ」と今日は太陽再び輝ける也。吾人は此事を以てオリムピアの神が吾人に方人し、神々が吾人に左胆するが如き喜ばしき前兆として迎へんとす。

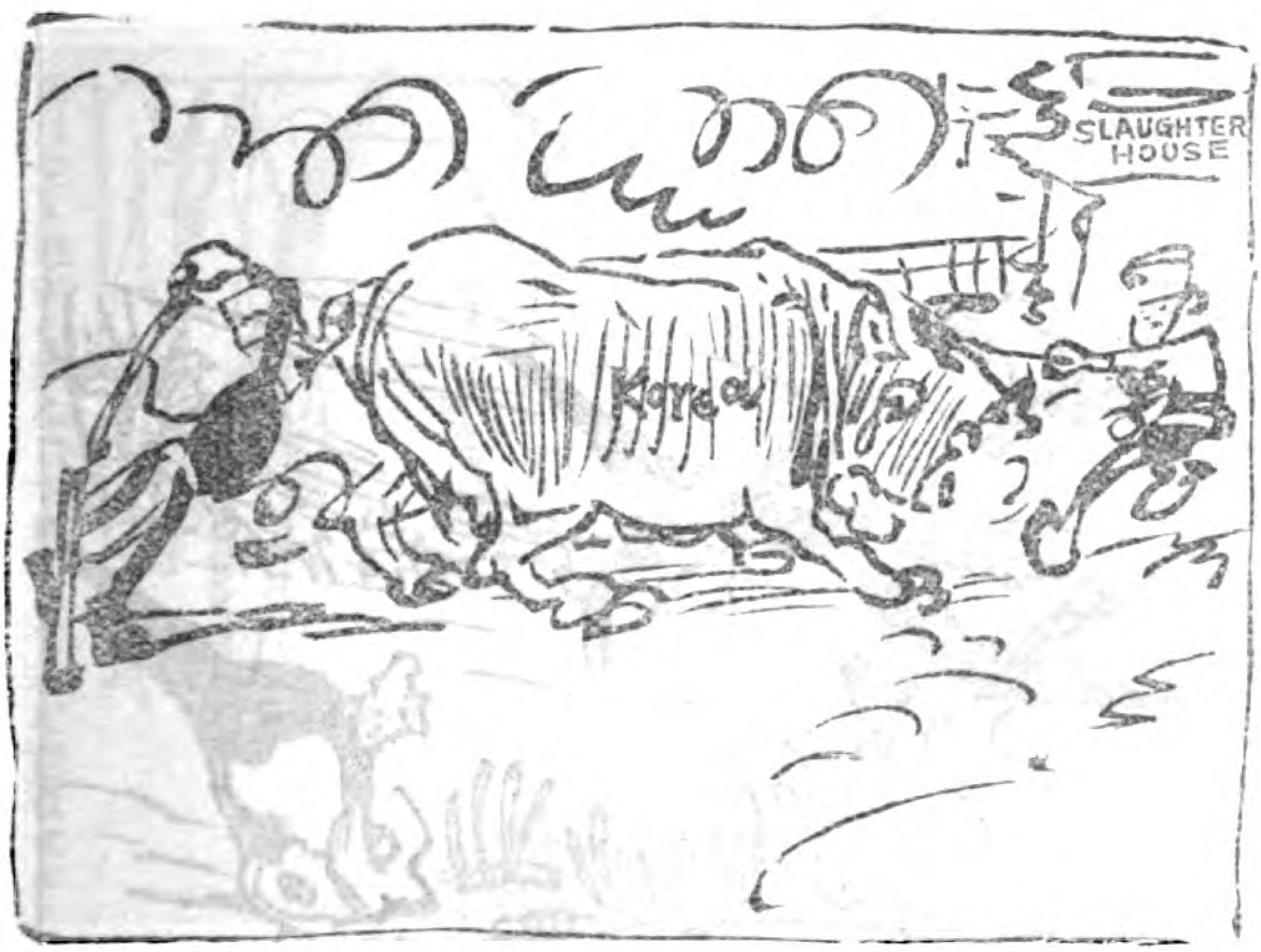


THE REAL RESULTS OF THE ALGECIRAS CONFERENCE.
—*Fischietto* (Turin).

萬國大會は前進せり、而して渠は日一日と其地歩を獲取しつゝあり。地球上到る所より此地に向つて委員は來れり、久しからずして萬國孰る國なく其代表者を派遣するに至るや必せり。吾人は自己の意識を有せる一

箇精錬なる軍隊也。予はスッットガルトの大會は海牙に於て開會せられたる政府の萬國大會とは全く別様の觀を呈せんことを冀望して措かざる也。かしこに於ては丘陵一の小鼠を産みぬ、而もその兒は難産後の死産なりき終りに臨んで予は國民の自由を旗旌として人類の自由を守護神とする社會民主黨の萬歳を祝す（衆之に和して萬歳を三唱す）。

之に次いてパンデルベルデ氏登壇し、口を開いてベーベル氏を以て社會主義者の指導者兼老功者となし、衆を代表して驚嘆畏敬すといひ、二十五ヶ國及その國民が玆に參集したり、即歐羅巴、加奈陀、コロムビア、ボリビア、アルゲンチン、日本是也、而して孰れも驚嘆すべき國民にして世界文明の産物として戰鬪艦の賜を知ると同時に、マルクスの資本論及共産主義の表白をも熟知せるもの也。カール五世の如く、吾人亦今日次の如く言ふを得ん、吾人の帝國に於ては太陽没することなしと。此パンデルベルド氏の演説は、登壇するや拍手喝采雨の如く暫しは鳴りも已まざりき斯くてロザルキセンプル匕氏によりて獨乙語に飜譯せられたり。議會の議長撰擧に久しき時を費したる後、發會式は解散せられたり。



Turin. THE KOREAN COW.
If the animal doesn't know enough to go where she belongs, she must be made to go.
—*Kladderadatsch* (Berlin.)

禍亂に誘はれたる佛國

「リテラリー、ダイヂエスト」

「如何なる同盟にも必ず人と馬とあるものなり」と、こは此斯麥の曾て稱せるところなるが、その意は、人は鞍上にありて轡韁に手綱を繰り、斯くて彼をして勝利を得しめんとする馬に柏車を當つるを意味するなり、カサブランカに於ける佛國と西班牙との連合はその孰れか果して人、孰れか果して馬なるかは、言ふに甚だ疑はしきものあり、西班牙諸新聞は隱密に、佛國が西班牙の轡を取り、西班牙を驅りて思ひも掛けぬ危險なる道に進ましめたるを難ず、西班牙共和主義の機關紙パハイスは、最も大膽に佛國は全然自己の爲に活動しつゝあるもの、斯くて西班牙をは自國と共に紛亂の

渦中に捲き込まんとするものなりと論ぜり、その說に曰く。

佛國が彼の進路に我をも誘へる時は、實に彼が野心を包める行動を取るに渇しつゝあり、而して碍げなき友國たる彼の行動は、その結果は或は彼自身の利益とならんとはいへ、之を以て我西班牙に利益ありとは夢想することなかるべし、我西班牙は、決して幻想的なる冒險的の戰陣を張るものにあらざるを、今に於て早く一般に了解せられざるべからず、我船舶、區々たる我船舶を亞米利加の海岸に送り、併せて我兵士をその海によつて圍まれたる亞弗利加の大陸に送ることは、之をアルジエシラス條約によれる光榮ある行動とも、あるは謂はゞ言はるべし、左れど斯くして得らるべき光榮は餘りに多額の失費を要す、斯く表面より抽象的に言へば或は神聖なる意味あり稱贊を値すべきものなるも知れずとはいへ、實は吾人に取りては甚だ架空なる利益を防護せんが爲に出て立つものならずや、正しく考察し來れば軍艦を派遣し、軍隊を輸送するに、適當なる誘因なるもの一も存することとあるなしと、マドリッド發行のリベラル紙も亦、政府が馬鹿らしくもモロッコ問題に干涉せるを詰責し、五十年間に發達し來れる西班牙の商業上の利益は、一朝にして過失の爲に失はるゝを致せり、而かもその過失たるや、これムーア人にあらずしてクリスト教民なり、而かもクリスト教民といふも就中佛國を以て最となすものなりと、その說は左の如し。

單にムーア人の野蠻なること並に文明を扶殖するはクリスト教民の天職なりと說き、即ちその暴虐なる大殺戮、これは彼等土人にその因ありとは雖も而かも之あるの故を以て嚴密なる責罰を免かるべからざるが、それをば言ふことなくして



THE SWOD OF DAMOCLES.
—*Kladderadatsch* (Berlin.)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暫く前の如くに說かんことは固より容易なり、左れど吾人はカサブランカ事實の眞相を調査すること一層精なれば精なる程、明かにその過失はムーア人に非ずしてクリスト教民に在ることを知る、若し彼等野蠻の代表者を以てその行動野獸の如しと評し得べくば、吾人は更に我等文明國人の代表者を以て、その行動宛として獵夫の如しと言はんと欲す、彼等の反亂は實は佛國に對して起りたるものなり、佛國公共事業會社が、土民の所有に屬する土地の專有を圖り、その掠奪に就いて少しも遠慮の態度なかりしこと、實にその禍因をなしたるなりと、

斯く論じ來つて更に結末にカザブランカの騷擾は、同所に於て繁榮せる西班牙殖民地に破滅を來し、併せて佛國移住民によつて更に顚覆せらるゝを免れずと論せり。

獨りエポカ紙(テドリツド發行)のみ大胆を粧ひ居れど、内心佛國によつて擾亂の渦中に誘はれたるを思ひ、戰慄するところあるは明瞭に知らる、日く

西班牙は自己の利益の爲に自己の取りたる進路に對し、其處に生ずる責任に對して何等の托辭あるべからず疑もなくモロッコに於ける我國の義務をば十分に果すところなかるべからず、何は兎もあれ今の時に於ては唯その不正なるのみならず、更に危機を催しつゝあるその反訴に對して、機は寸時も失ふべからざるなりと、又ラムパルシアル紙(マドリツド發行)も之と略ぼ同樣なる喚聲的句調にて、吾人は毫も亞弗利加に於て我國の領土を擴張せんとするものにあらず．況んや謂れなく佛國の領土擴張に對して幇助を與ふるものならんやと、

此難局に對する政府の意見は西班牙總理大臣マウラ氏によつて、極めて注意深く述べらる、西班牙並に佛蘭西諸新聞紙の報ずるところによれば、氏は氏に會見を求めたる幾多の新聞記者等に對し、次の如く語れりと、

モロッコ問題は非常に細心を要する問題なり、西班牙は西班牙として果すべき使命を有す、而して西班牙は佛蘭西並にアルヂエシラス會議に連署せる歐羅巴諸國と相謀り、一切の事件を處理すべし、モロッコに軍隊を派遣せること、之を以て土地占領の爲なりとせらるべからず、それ等の派遣は單に規律を維持し外國人の生命を保護し、斯くて特置歐洲警察を組織して共同に働かんとするなり、されば彼等は萬國警察の署員として認めらるべく、之を以て領土占有を目的とする軍隊と速斷せらるべからざるなりと。

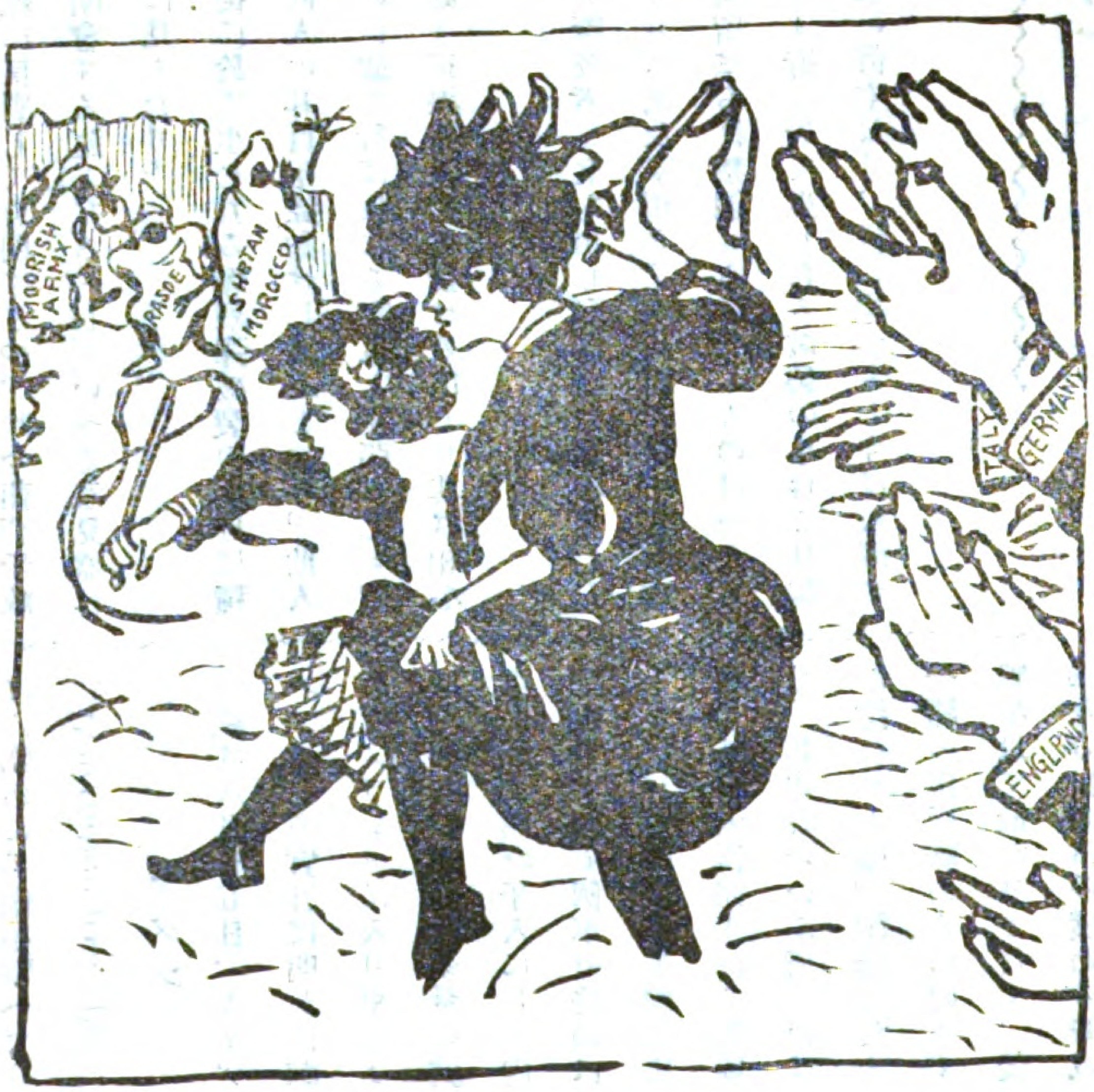
英國々會延期に關する上諭

『ダス、エコー』

頃者英國々會に下し給へる詔勅の内容を案ずるに過般我が近親に渡らせらるゝ羅馬王及王妃の訪問は王妃の殊の外滿足に思召さるゝ所たり。されば兩國間の交誼は舊にも培して益篤きを加ふる事疑を容れず。又我同盟國なる大日本帝國島帝より特別の使命を齎ら

して渡英せられたる伏見宮殿下に對して陛下は謝意を傳へ玉へり。他國に對する交情は後來も尙今の如く長へに渝らざる。我政府は百方手段を盡して平和の維持に貢献する所あらんとするの希望の爲鼓吹せられたり。政府は地中海及アトランチシエ海の一部に於て利害關係を有せる彼我兩國の利益を保護する爲め、西班牙國と條約を締結せり、又露國の勸誘に隨ひ皇帝には海牙平和會議の列席委員を指命し給へり。皇帝陛下は又平和會議の討議は其結果衆議の一決を以てめでたく局を結ぶべきを信じ給へり、即ち戰爭の悲慘を輕減し、世界の平和を確實にせんことを目的とせる提議に列國委員皆贊成すべきことを信じ給へる也。

印度に於て起れる目下の難事に對し英國政府は行政機關の改善策を企劃するに毫も怖るゝ所なし。其草案は既に起草せられ、印度の議員は印度議會に於て參與討論の權を確實にせらるゝことを規定せり。先きに終局を告げたる殖民地會議及將來之と類似せる會議の開かるる場合之が合同の事、かゝる際には國會の表示の下に一般に帝國の利害に關する問題には自由に發言するを得べき事などを定め給へり。皇帝陛下又オレンジ河域の人民自治の執行が殖民地に取りて幸福に圓滿に實行せられんことを希望し給へり、近者編成せる本國艦隊の觀艦式の際、皇帝陛下は船艦の立派なる構造及其驚嘆すべき光景、並に將校下士の卓絕せる體度並に其訓練を深くも嘉賞し給へり。又陸軍々制國民兵の改造及國法に關する點に就ても仰せ出さるゝ所ありたり。



GREAT CRY, LITTLE WOOL.
"Hurrah for France! Hurah for Spian! How beautifully they are delivering us from the pestiferous Moroccan assassins whom we fear so much."
—*Fischietto* (Turin.)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

葡萄牙に於ける暴動事件の眞相

『フォルクス、ツァイツング』

曩に葡萄牙國會が專權官の永續に反對して言明するや、昨今葡萄牙政府に於ては本年中今一度國會を開會する運となるべしといへる意見盛に行はるゝ由、里斯本よりの通信に見えたり。

彼の八月二日里斯本の勞働者街に於て生じたる爆烈彈破裂の事件は種々誇張せられたる電報を發して世人の耳目を聳動せしめんとせり。世人は之を以て葡萄牙王に對する暗殺に就て行はれたる事也と主張せしも、現今にては葡萄牙官邊より下の如き正誤の報道を發せるにより其眞相を知るを得たり。

勞働者街に於ける爆烈彈破裂の際死者二名を出し負傷者二名を生じたりとの報道は謬說也。又決してカロス王及宰相フランコ氏に對する反逆の所爲にもあらず。共和黨員の拘留せられ禁錮せられたるものは一人もなし。八月二日サント、アントニオ街に於て生じたる破裂の事件より拘引者はありたり、そは破裂せし家の借主なり、併し拘引者も今は放釋せられたり、

摩洛格の近況

『ダス、エコー』

摩洛格問題は漸く事六ヶ敷成らんとす。外人の居留民は蒼皇として同地を去れば、反王ムレー、ハフィドはカザブランカに進軍し、佛國人を掃蕩せんとし、佛國の將軍ドリユード氏はカゼル族に對して突擊を行はん爲めに兵備を整へたり。今や見るべし彼の有名なる「平和的侵掠（„Pénétration pacifique"）の日一日と其鋒芒を顯はし來れるを。

マタン

紙は八月廿五日、カザブランカより次の如き通信をなせり。ムレー、ハフィドの宣言は明かに確定せられたり。渠は摩洛格人に命じて佛人がカザブランカに入り來るまでは攻擊すること勿らしめ、更に揚言して曰はく無數の軍隊及多量の銃砲は進發中なりと。同紙が通信中には又下の事あり。西班牙人にして尙同市に在るものは摩洛格風の權門に其哨兵を配置し、而も佛軍の將帥には此に就て何等通牒をもなさゞりきと。

タンゲルにある英國殖民地は月曜日に於て議會を開催することを見合せ、外務大臣宛てにて英國政府に軍隊の派遣を請求する請願文を起草せり。其內容のいふ所にいはく佛、西政府は歐洲人の保護の爲め當地に人を遣れりと雖、配備未だ充分の安堵を與ふるに足らず、何者當地には僅一艘の巡洋艦あるに過ぎず、此上尙以上の船艦を要とす、時に英國の軍艦を以て最なりとなす、蓋しカザブランカ附近に佛兵の上陸する際、不幸なる出來事の虞ある時或は以て之に備ふるに足らんか云々、といふにあり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



近代の小説

上田敏

今日の人は文藝といへば直に小説を意味するが如く思ふ、歐洲大陸にても、十九世紀の近代文藝をいふ時には、多く近代の小説を論ずる樣なり、左れど小説のみが文藝にはあらず、その他に詩あり、劇あり、更に文藝の意味を廣義に取らば、歷史、傳紀、演説、又隨筆もあり、評論もあり、文藝には斯く色々の種類を有す、されど純文藝の論に移らば、兎に角詩歌を以て諸文藝の中心の位置に据え置くべきこと、爭ふ可からず、文藝が音樂、彫刻、繪畫等他の諸藝術と並び立たんには、如何にすとも詩を大本となさゞるべからず、左はれ、爾く中心とは言ふとも、之を味ふ所の讀者の數より言はゞ、十九世紀に於ては小説が最も目立ちて行はれ、又近代には小説界に古今未曾有の名著傑作現はれたり、されば文藝を味ふには、詩と小説とを併せ味ふことゝなるべく、從つて文藝を論ずるにも、亦兩者を併せ味ひて而る後論ずることゝなるべし。

さて我日本人が歐洲の文藝を味ふ時には、前二者中大概は先づ指を小説に染む、そは詩は極めて微妙なるもの故、飜譯にて味んは難し、必ず原文を讀むを要す、原文を讀むとするもその言語に熟達するが上に、更に今日の詩を解せんには、今日の詩を成す迄に、幾多蓄積せられ來れる連想の趣味を會得するにあらずば不可なり、詩を解するには練習を要す、如上の困難あるが故に、詩を味ふものは自然に少き譯なり、此事獨り我國のみにあらず、泰西といへども亦同く、國民の全體が詩を味ふには至らざるなり、況んや我等外國人に於てをや、如何にするも先づ心を小説に傾くるに至るは已むへからざる數なるべし。

予の考ふるところにては、文藝は他の藝術と少しく

趣を異にす、即ち美の要素と美以外の要素との二者を併せ含む、他の藝術ならば、美に關する要素のみにて獨立に存在し得るものも少しとせざれど、文藝は然らず、此二要素が渾然一つに融化し去るところに生ず、是れ文藝の弘く何人にも解せられ得る所以なるべし、文藝は如上の性質を具するが故に、特別に美に關して鋭敏なる感覺を有せざる人にても、猶ほ或る點迄は味ふことを得べし、左れど又或る點より言へば、文藝の他に比して稍雜駁なるところも職として此處に存す、之を以て俄に他の藝術に優るしは斷言し得ず、英吉利の詩人ランダアの語に、「詩は美術なり、而して美術以上の或るものなり」とあり、此語を以て、直に詩を他の藝術より優れりと斷言するにあらずば、予は右の主意に贊すべし、兎に角詩歌が他の藝術より異なるところあるは確實なり、之を人類原始時代の事蹟に徵して遙に昔時に遡れば、美以外の要素か此の文藝の中に頗る多く入り込み居れり、人文の初期に在りては、人心の活動は大抵皆詩の中に收められ、戀愛、戰爭、政治、宗教、勞作等は直接に之と關係ありき。然るにその後社會の發達するに從ひ、人心の活動に分化行はれ、此處に初めて今言ふ純文藝の如きもの生じ、美以外の要素よりは美の要素の遙に優れる藝術品は現れたり、之は何れの國の文藝史上にも歷々として徵すべきことにて、或は哲學を律語にて歌ひ、或は道德の教訓と文藝の趣意とを混用して詩に現したるもありたり、之が前述の如く社會の進步に伴ひ、漸々分化し來つて。遂に今日の如く、藝術と稱して厚生利用を目的とするにあらざる一種の活動が明瞭に人心に現れたるなり、此純文藝の正當なる嫡流は、當に近世に出でたる敍情詩の類を推すべく、其他問題文藝ならざる律語、散文の劇、或は物語等も此種に屬す、故に斯るものに對して興味あらざるものは、眞に純文藝を味ひ得る人と言ふべからず。

斯くは言へど、社會の進步に伴ひ分化が行はれたりとて、何人も盡く專門家化したるにあらず、寧ろ今人の心は複雜にして、全く相異するもの或は矛盾したるものをさへ、猶ほ心に容れ得るなり、況んや多少の關

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聯あるものに於ては多々益々辯ぜんとする風あり、故に純文藝の如く純の純なるもののみならず、それ以外のものを迄味はんとするは、近世の人情よりしては免れ得ざるところなり、されぱとて、勿論美の要素を全然缺き得べしとにはあらず、美の要素を缺くは惡しとすれど、中心に於てその要素のあらん以上は、頗る込み入りたる、說明、敍述、批評等を一種の藝術の要素となして味はんとす、是れ近代に於て、一見しては美を目的とせざる如き文藝の世に行はるゝ所以と思はる近代頻に見る幾多の小說の如きはその適例なるべし、今の小說は應用心理學、應用社會學、甚しきは應用生理學、應用精神病學といはんも可なる程なり、又之と同時に政治、宗教、經濟等に直接の關係ある問題文藝といふ如きものも生じ來れり、以上は極めて抽象風の議論とはいへど、皆一々歷史上の變遷に本き考察したるなり。抑も藝術を研究するには、歷史上の變遷により、藝術に品類（ジャンル）が生じ來れる點を研究せざるべからず、即ち進化論風の研究なり、生物に種の發生する如く、藝術にもそれに似たる現象あれど、此類の研究は今日猶ほ廣く行き亘らず、先づ十九世紀の後半に於てテイヌ等の論ぜしところを、右の研究の先驅なりとも言ひ得べし、例へばテイヌが人種、時代、境遇の三大則を以て藝術を說明せんとしたるは、餘りにやり過ぎたる爲、今日そのまゝには信仰されざるも、中に幾分の眞理を含むことは疑を容れず、テイヌ外にも左る說をなせるもの大陸諸國にもあり、就中佛のブリユンチエルは、テイヌの說の或る部分を變更し、別に創見を加へて文藝の『品類進化論』を唱へ之にて批評の原理を探らんとせり、又他方には最近美學の學者が藝術の起源を研究し、人類學、傳說學、社會學等より材料を集め、之に心理學風の研究を添へて面白き成績を得たり、予は小說にも此かる研究を加へ、此文學上の一品類に就き、古今の變遷を調べて然るべしと思ふ、例へば希臘時代の小說は如何なるものなりしか、歐羅巴中世のロオマンスは如何なるものなりしか、文藝復興期に於ける伊太利のノヱルレは如何にして生ぜしか、此等は或る點

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

までは、政治、經濟、法律等の歷史より説明し得べし封建制度を近代の國家制度と、武士と農民とが主たりし中世と及び士民と云ふ階級が或る意味にて同一の權力を有する民主制度の今日と兩々考察し來らば、中世の文藝と近世の文藝との差異は説明せらるべく、更に降つて十八世紀の英國に近世小説の萌芽を發せしは如何なる理由によるか、當時の英國の社會は如何なりしか、リチアドソン、フイイルデイングの小説が非常の勢を以て歐大陸に傳はりたるには如何なる理由ありしか、更に進んで十九世紀に至り、愈よ近代小説が量に於て文藝上に覇權を握り、その後半に及んでは殆んど他を壓倒せんとする勢力となりしは如何なる所以か、斯る種々の問題に向つて解決を下さば正に立派なる文藝史を成すべしと信ず、從來の文藝史も多少此方面に勉めたりとはいへ、猶ほ編年史體ならざれば列傳體の分子多くして、判然文藝の品類が變遷、進化し行く跡を書きたるものは少きが如し。

假に今佛國を例に取りて論ぜんか、十九世紀の前半は佛國の文壇に敍情詩の勃興せる時なり、之は十八世紀に於ける僞古典主義の反動なる、ロマンチズムの結果なり、仔細に考ふるに、此主義は小説にも已に現れて、シアトオブリアンの『アタラ』の如き名作あり、故に十九世紀の前半といふとも、佛には既に小説の隆運を見、更に後半に至りては、全く小説と評論との時代といふも可なる程にて、バルザツクの『人世喜劇』を始とし、後世に傳ふべき數多の小説を出したり、これ何故ぞ、原因に種々あるべけれど、中に就いて重なるものを撰べば第一は佛國民法の結果として多くの小財産が急に生じたることとなり、即ち貴族風の生活を送り得ず、さればとて貧民の苦境にも陷らず、兩者の中間に立ちて、財產は少けれど安全にして且つ單調なる生活を送る人民の生じたること之なり、斯る人々に取りては、自己等の實際に經驗することなき生活をせめて文藝に於てなりとも味ひたしとの欲望生ず、故に自然の勢此需要に對する供給として、一種の小説生じ來る、左れど小説とはいへ昔時の物語は不可なり、荒唐無稽

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の説話は不可なり、讀者の想像の達し得る範圍にて唯その經驗に得られざるもののみを書けるが宜し、即ち現代の生活を描けるが宜し、故に時代物よりは世話物を擇ぶに至るなり、第二には、前述の如く民法の爲に、又は中央集權の佛國に於ては、官吏の數の多き爲に、少額にして而かも安全なる收入を有する人多くなりしが、斯る人々には、その生活こそ安全なれ心中には幾多煩悶あり、これ有るは全く佛國革命の餘波なりとす、革命の爲に、古來の傳習は一掃せられ、從來の理想、標準は根抵より土崩瓦解し了りたれば、之に代る新しきものを更に建設せざるべからず、此等を因として煩悶は次第に起らざるを得ず、靑年に於ては特にその多きを見る、所謂世紀病之なり、之は理性と感情との衝突なり。又思想と行爲との隔絶なり、近代の社會を見るに、事物を考ふる人は事業をなす人にあらず、事業をなす人は事物を考ふる人にあらずといふが如き現象あり、愈よ以て如上の煩悶を强むるを致す、即ち中等社會が、一面には安全なる生活を送りながら、他面には絶えず心中に無限の煩悶を秘むる爲に、人間の内部生活に向つて、之を古人に比すれば甚だ深き興味を有するに至る、從つて内部生活を精描する小説を要求するにも至る、是れまた近代小説の起る所以なりとす。

以上の二原因より小説は世相風俗を描寫することゝなる、此風俗といふは衣服、器物の流行を描く如きものにあらず、佛國語にていへばムウルにて、英語のマナアスの事にして之を風敎と呼ぶも宜し、世相といふが最も可ならむ、即ち社會人心が活動して全體に現はれたる跡をいふものなり、左れど世相中に含まれたる人間は、社會に立つて互に相接觸し、相競爭する爲に一種の性格（カラクテエル）を生ず、從つて世相を寫すと同時に性格を描くも亦可なり、バルザックの如きは即ち此二つの描寫を兼ねたるものなり、バルザクの後、所謂自然派の作家フロオベエル、モオパッサン、或はゾラの如きは、專ら世相を寫すに力を用ゐたり、心理又は性格を解剖して精寫するは心理派の諸家にて、古くはスタンダアル

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新しくはブルジュエ、アナトル、フランス等の人々あり、斯く作風は自ら二つに分る、之を學問にて言はゞ前者は社會學の如きものなり、後者は心理學の如きものなり、左れど右は强いて分ちたるもの、古より皆此二つを混用し居れるは言ふ迄もなく、兎に角近代の小說は最も力を以上の二描寫に用ふと言ひ得べきが、此二つが時を追ふて愈よ接近し、ゾラの如きも晩年に至れば、初に唱へたる自然主義とは違ひ、自家の理想を述べ社會學經濟學風の思想を寫したり、又他方に於て諷刺小說、歷史小說、政治小說等も、才ある作者によつて作られたり、世は二十世紀に移りたる今日或は十九世紀に於けるバルザックの如き大天才現れなば、幾多の作風を綜合して更に一新機軸を示すやも知れず、之を要するに十九世紀の文藝は此の如く時代の要求の爲に現れたるもの、故に此等の文藝を十分に理解すれば又、時代の要求の如何なるものかを知るを得ん。

　小說は此の如く、種々美以外の要素を含む文藝の一種にて、その形式の伸縮自在なる丈、分析、結合、敍述、評論、何事をも含むを得べし、故に昔ならばバアクの如く演說し、アジソンの如く小品を書き、ボシュエの如く說教し、パスカルの如く宗教論をなせし人が今は小說を書くに至り、左る言論を好んで聽ける人が今は小說を好んで讀むに至れり、而して、人心に最も深き感化を與ふる作或は當面の問題が解決されたる後にも、尙ほ不朽の生命を有せん作には、初に說ける美の要素を有せざるべからざれど、一時の流行に滿足する小說には、特に美の要素を要せざることあるべし、故に小說を評するには、單に純文藝に於けるのみならず、更に他の考をも付する必要ありと思ふ、又近代の民主制度が長く持續せられん限りは、小說は文藝の樞軸となりて廣く世間に感化を與ふることゝならんと信ず。今代に於て詩歌は文藝の中心なり、小說は其圓周なり。（談話筆記）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治前後の厭世觀

戸川殘花

鎌倉より遠くはおく、明治前の大厭世家は西行と長明の二人なる可し。この後、兼好と元政との二人あれど前者に比較すれば世に近よりたる厭世家なりき。芭蕉は小西行か大西行かと云ふ可き人なれど、兼好元政に比較すれば更に世に近よりたる人なりき。この五子の傳を一讀すれば、厭世觀の移り變れる跡を知り得べし。人は到底時代の産兒、境遇の動物たるとはまぬかれ難し。西行は妻子を棄てゝ樹下石上の頭陀となり、長明は日野の奥に方丈の室を構へて獨居の閑に嘯けり。此の二子は世塵の外に立ち脂粉の呼吸を脱し名利の跡を踏まず佛法僧を歸依するのみなりき「ながらへんと思ふ心ぞ露もなき厭ふにだにもたらぬうき身は」厭ふ可き世もよし厭ふ可き身もなし、不請の念佛兩三返を申しゝなる可し。

月も花も鳥も佛智に結縁のよすがのみ、聲心雲水倶に了々、唯三寶の尊きのみぞかし。小我に非ず大我に非ず無我の崇ときのみ。

小我を憐むも慈悲なり、大我に導くも慈悲なりと雖も、無我の法味を與ふるは特に大悲大慈の法施ならずや。況んや身自ら實行して小我々利の衆生に示教するは、實に觀世音の菩薩行ならずや。五濁惡世投此身、就木木、就竹竹、頭上寶冠委埃塵とは西行長明二子が厭世又遁世の大願を發せし動機なり、二子豈名利戀愛の絶望より身を山林に投じ雲水に棄つる者ならんや。思ひ見よ、星霜七八百、夥多の衆生凡俗が名利に喘ぎ戀慕に渇せし焦熱の胸間に一掬の清泉一杯の活水を與へしものは誰れぞ、消極と評す可からず、積極と論ず可からず。消積の二極は一元の電のみ、東西なし南北なし要ずる所は法施のみ衆生を利益せんのみ、花散らず入合の鐘を友とする山僧も、亦是れ畵中の人たるのみには非ず相通關聯の因陀羅網なり。昔唐太宗が寺觀を看て多少の摟臺を畵趣ありと詩化したるは其の雅量に服すると共に大政治家の活眼に驚歎す。誰か曰

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ日本全國數萬の僧侶は遊民なりと、遊惰厭ふ可く惡む可しと雖も、僧侶のみ遊惰を追究す可きに非ず、爵祿あり位階ある遊民は日夕に繁殖せんとす、所詮用不用は社會の機關又は裝飾に適する所あるや否やに歸着す。室中に一扁額なく一書幅なくして可ならば止む、若し人室内の美感、家庭の快感を要するならんには寺觀尊む可し僧侶重んず可し、淸淨三昧の行者は更に尊崇す可きに非ずや。西行長明兼好元政芭蕉等は淸淨三昧の行者なり、即是れ厭世家遁世者靜的詩人なり、其の欲求する所は佛乘なり、即是れ一乘也、一乘とは正覺、正覺とは涅槃、涅槃とは法身、法身とは究竟なり、言語道斷の境界なり。然れども仔細に觀ずれば五子各自に特色あり、芭蕉は禪よりも老莊の風骨趣味に傾き、兼好も亦天台よりも老莊の風骨に傾むけり、宜べなる哉元祿前後の俳家小說家等は漢學流行の渦中に出沒せし人々ゆゑ、漢詩の趣味より老莊に感化せられて徒然草の詩趣文致を崇敬せり。

二十世紀てふ社會に活動する人は如何なる理想か有る、如何なる信念かある、厭世遁世靜的の趣味を排し佛老の高遠なる觀念は斥け、奮闘せよ成功せよ國家的社會的、人道的、家庭的云々と壯語す。抑も其の決勝點は何處にかある、小我の小天地には非ざるか。人間の紅日は西に斜なり易し昔賢は十年馬に騎りて朝鷄を聽くとかや皆是世潮に浮沈して一百歲に滿たざる人生をば、今是昨非の定名無きに空勞するのみ、傳道之書の傳道者は道破せり、曰く太虛之虛、太虛之虛哉。バベルの高塔を築きし者は人巧の施爲に得々たりしが一朝神怒に觸れて秋の木の葉の散りちりに流落せり、韓に相たり趙に卿たるも混中の虱よ楚に覇たり呉に王たるも檻外の猿か。龍動街頭に秋草高く、巴里城中に寒烟暗しと歎ず可きは當來必至の世相なり、希臘羅馬も一場の夢なり、神の國は來らざりき、神聖羅馬帝國は神聖ならざりき、法王は偶像なりき諸牧師偶像なりき、畢竟今是昨非の評隲を脫れず、誰か砂上に樓閣を結構する者ぞ、國家社會人道敎育家庭一括して砂上の樓閣ならずや。然れども小我にのみ齷齪せず、聊なりとも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼蒼に對する道念あり、神の子たらんとする信念あり菩提心ある者あらば、希くば柳綠花紅の見地に在りて、國家社會人道家庭敎育藝文凡百の事に發願し同胞の衆生を利益す可し、小我を理想と爲さゞる者は無我の最上位には達せずとも、大我の理想を確信する人なり、佛たらずとも神たらん、神たらずとも聖賢たらん、君たら子ん。

明治前の厭世家とは斯の濁世を厭ひて佛地に至らんとして修行せし人なり修道者なり、其果其跡は其根機に從ひ各自各種の特色あれども、發願利生の菩薩心を發せし人なり、導師なり傳敎師なり坐して化他するも導師ぞ、眠りて利他するも傳敎師なり。明治の社會にて斯の如き室中獨居の修養の人に乏しく徒らに血眼となり大聲豪語十字街頭に馳驅する者多し、憐む可き哉彼等は基督の膝下に在りて法味に溶する彼の女には歎かるるならん。元政は詠じて曰く「こゝろにもをよばぬものはなにかあるこゝろにとへばこゝろなりけり」妙の一字の意義を盡くせり、靑蓮花の妙香は實に法味なり、醍醐味なり。昔時、明全は道元に緩歩の方法を示し、息を以て限と爲し、足を運ぶ脚跟を觀ず、躬らず仰がず傍觀者よりは一處に立が如く大光明藏に步せりと説く。脚跟地に着かず呼吸喘々として人道を說き社會を救濟せんとする者は、嗚呼捕風のみ捉影のみ我れは厭世家遁世者に與みするなり。分けゆかば野邊はしげれる夏草の中にも元の道やのこらんと詠ぜし、深草の元政は我が師兄なり。

明治後の厭世家には、不幸にして大我の理想なく、本より無我の妙諦は信ぜず、俗穢の佛僧淺愚の耶蘇傳道師にのみ接し、佛儒より建設せられし道德の基礎は搖動し、彼等を導引す可き先輩も故老も、十九世紀の物質熱に罹り、口を開けば過渡時代と答へて、實は年少子弟を試驗の坩堝(ルツボ)に盛りて高度の熱火に放置するものゝ如し。嗚呼是れ誰れの罪過ぞ、政事家に非ず、敎育家に非ず、宗敎家に非ず、斯の人世の不運のみ、必然の結果のみ、父は憐愍すると雖も、諸子は嬉戯して火宅の恐怖す可きを知らず、慘ましい哉。黄金世

は來る可きものか、相愛の道は五洲に限なく實行さるゝものか、家庭は理想圓滿の時あるものか、藝文は絶對の理想に達する世あるか、富は平等に配布せらるゝか、戰爭は地上より斷たるゝ時あるか、若し平和の春あらば、何百年間か何十年間か地球は何萬年まで人生に適する温度を保ち得るか、笑ふ勿れ、百年も千年も萬年も春雪一刻の夢ならずや、しるも知らぬも逢坂の關の過客ならずや。昔し鑄かけ松が橋上より器具を投下し、舟中の絃聲にインスパイヤせられて、魔神の役者となり、酒色に五十年の壽を擲たん爲に小盜と決意せしも亦た小々我中の小我觀なり、余が知る所の明治の厭世家は、この鑄かけ松と五十步百步のみ。鑄かけ松は江戸の細民なりき、小心翼々たる良民なりき、日々數錢を利して口を糊す、一夕兩國橋上を步せし時端なく、橋下を過ぐる屋根船を瞰下すれば、舟中豐かに酒食を置き佳妓兩三、絃歌を弄し、世に貧てふ者あるを知らざるが如し、松憤然として急ちに惡意を發せしと云ふ。淺間の火、華嚴の瀑は何に者を吞みしぞ、西行か芭蕉か將た兼好か大鑄かけ松か小鑄かけ松か、將た妄想の酒、瞋恚の色に溺れし年少未熟の小才子か、或は發狂の遺傳ある好學の青年か、親子の惡感、失戀の結果、落第の煩悶、千種萬樣なる可きも未だ嘗て信念道念より發憤厭世せし青年あるを聞かず、西行元政芭蕉の三子等も青年時代に世を遁れし者なり、世を厭ひし者なり、或は名利戀愛の煩悶もありしなる可しと雖も、更にヨリ善き理想を慕ひしなり、ダンテもビートライスの肉的愛より靈的愛に達するに到りし也。明治前には生老病死の世相を厭ひし人ありき、明治後には生老病死の世相に執着熱衷せし人あり、是れを厭世家と云ひ悲觀者と云ふ、矛盾も今甚しからずや。

余は斯の世を夢幻泡沫と悟了す、正等正覺は余が理想なり、利他は願なり、懺悔は常なり、名を異にし對する者は變ずるが如しと雖も、基佛の法界一味ならずや。余は明治後の厭世家を憐れむとゝもに、明治前の遁世家を敬慕する者なり、山家集、選集抄、方丈記、徒然草、草山和歌集、身延山記行、七部集、芭蕉文集

は大和民族のあらん限りぞ生命の水なり、靈界より流るゝ活泉なり、夢幻空華何勞㆓把捉㆒得失是非一時放郤せよ、敬坐す可し、冥想す可し、坐禪す可し、祈禱す可し、電燈電車電話の二十四時間中に靜閑の時間を獲得せよ、露とく〱試みに浮世すゝがばやと生命の靈的洗濯を爲す時間を要す、靈養なき活動は木偶の活動のみ、其の果は砂上の樓閣空中の宮殿なり、科學的物質的人道的の文明は樓閣宮殿なり、其の基礎をば必ず宗敎的文學的藝術的の上に置く可し金剛不壞の生命は肉に非ずして靈なり。菩提心の讃に曰く若人求㆓佛慧㆒通㆓達菩提心㆒、父母所生身、速證㆓大覺位㆒。

文藝雜考

文藝に顯はれたる獸慾（上）

佐々醒雪

人間の性慾即ち下等動物と共通な生殖作用に伴ふ慾を假りに獸慾と唱へておかう。その獸慾の活動を忌憚なく頗る露骨に書き表すといふとは、人間の禮儀に外れてゐるだらうか、ゐないだらうか。太股を出すことは電車にも禁じてある、或る人はこれを飜譯して西洋人に見せたら、日本では衆人稠坐の中で太股を顯す人があるかといつて驚くであらうといつたが、成る程尤な樣にもある。下がかつた話といふのは、日本でも野人の無禮としてある。西洋などでは勿論のこと、「雪隱」といふ語に避易して退場する淑女もあるといふことだから、太股の色には氣絶でもするか、乃至は久米仙人の見えて、椅子から落ちるが、其の邊は不知案内だが、何にしても憺した騷ぎであらう。さても、その下がつた話でもが、文藝といふものゝ中に顯はれると、丸裸の女神の像と同樣、美化せられ詩化せられること譬へば臭つた草の螢に化けるが如しとあつて、ポッカシオやゾラや、乃至は沙翁の怪しげな、氣を惡くする樣な措辭も、厭な氣を起すものゝ方が、趣味の下劣陋醜を罵られる、御方便な世の中だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の小說も紅葉全盛時代は、やつと色氣づいた息子時代て、其主人公の多くは未婚の佳人才子。配偶があると、如何なる佳人も主人公になる價打がない、何ても獨身時代が花さ、そこで振分髮の稚な親昵、初戀の御惚けから、惚れたはれたの所謂る煩悶、何にしても御安くない次第だ。ところが昨今は、小說家も大分老けて來たね、竹風の所謂る厭妻小說、戀女房も鼻につくのか、子持になつて萎びたか、いづれは新らしい浮氣筋、こゝに於いてか、馬車の中で股と股とが密接して、未知の女の懷に手を突つ込むやら、或は昔私通した女を思ひ出すやら、隨分と手の着けられぬ蕩樂者となりにけりさ。だが、安心し給へ、これは事實ではない、所謂る美化したる螢火の正體を、晝間の日影に照して、僕が醜化したのに過ぎぬ。螢火其者の美醜は天下自ら定論ありて、我輩等若輩の容喙すべきてはない。無我輩の樣な下根劣機の者が讀むと、一掬の淸香を紙背に聽くことが出來ないて、何となくおあい屁臭いね。昔の芝居によく出てくる、無器量な下女があるが、變な腰附きで障子越に窺き込んで、お臀を動搖させてゐるのに聯想する。愚劣極る、僕の趣味がさ。

だが、明治の小說ばかりが人間の獸慾を描いてゐるのではない。遠く古を案ずるに、古事記のミホドなどは唯滑稽で面白い、萬葉も可なり美しい。「甲斐が根の彼面此面にさすなわの、か鳴る間しづみ妹我紐とく」などは東夷の歌として當然であらう。これは小鳥獵の山間の野合だ。序ながら、萬葉古義に畝傍山の男か女かを論斷する爲に、その生殖器が男性か女性かを研究してゐるなどは出色であらう、平田篤胤の日本開闢說の生殖器的說明と好一對だ。

平安朝でも當初の伊勢や竹取は、いはゞ紅葉といふところで「通ひけり、あひにけり」位のことだ。土佐日記の何やらの貝はとにかく淡泊な駄洒落だらう。催馬樂は、元來が田舍唄であつたともいふが、離れて「寢たれどもまろびあひにけり」位の罪の輕い所で、勅撰集も「遇うて逢はざる戀」といふ矛盾的な語に、消極的の獸性發動即ち生慾の不滿足を訴へてゐるに過ぎぬ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こゝらは未だ可愛らしい所だ、紅緣未だ出てす矣かね。

物語類では、源氏が初めて大膽に描いた、流石は寫實派の開祖だ。泣き入つてゐる他人の女房を閨中に抱いてゐて、「見ざらましかば口惜しからましと思す」、などは、思ひ切つた描寫さ。湖月抄を見給へこの「見る」といふところの頭注に「實事あり、實事なし。兩說」など、鹿爪らしいことが書いてある。これは箒木の强姦事件。それから源内侍といふ白髮婆の閨で、源氏と頭中將との鞘當筋がある、宛然たる紅緣の『鴫』さ。それから次は紫の上、男はこんなことをする者かと大に驚いた未通女さ加減、(同じ樣なことが「取りかへばや」にも其他にもある)今の女學生には無い圖だらう。源氏には未だ〳〵いくらもあるが、今一つ甚しいのは、手習の三の君の閨へ、匂宮が薫大將に假裝して忍び込むところなどであらう。例の醜化するとかうだ。だが、流石は式部の筆は美しい、これ丈けは正直な所、厭な心持はしない。譬へば比翼の蝶々がむつれ合つてゐるのを見るやうだ。必竟この時代の人々の目には、獸慾が我々の社會程に賤しゝは見えなかつた。我々も式部の頭を通して獸慾を見てゐるのであるからさまで醜く感じないのが當然であらう。復讐を忠義と認めた世界では四十七士は美しい人格である。しかしこれを蠻行と認めてゐる歐米の近代の小說には、醜い風俗として屢〻描かれてゐる。性慾に對しても、程度こそ違へ、これに似た風俗上の變遷があつた。天才の筆が、果して讀者に自己の所感と同樣の印象を與ふるものであれば、式部がさまで醜いと感じなかつたことは、讀者にも厭ふべき印象を與へないのが當然であらう。

靑年男女應答の戀歌が、麗々しく勅撰に載つてゐる時代、一代の淑德家として傳へられた紫式部其人の、夫でない男に與へた戀歌が公にせられてゐる時代に、何人か今日の樣な神經過敏性の慣習に染んでゐようぞ式部の筆は自然である。

清少納言はお轉婆として有名なもので、枕草子には、更に大膽な橫着な惚氣もあれば冷嘲もある。例の季へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等は細心にこの獸性的描寫を誤魔化し去らうとしたが常に徒勞であつた。例へば、惡くすると孫どもが這ひ歩きさうなといふ年頃の親どちが晝寢をするのは、苦々しいものだ、ことに起きて湯を浴びるのは憎さげなど嘲つたのは、明かに宰予の晝寢である、晝も簞笥が何とやらの格である。「春曙抄が空とぼけて、「晝寢して湯を浴みるは惡きことにや」などと濟してゐるのは、とんだ滑稽だ。（紅葉の三人妻にも、この湯を母に沸させる段があると記憶する）高貴の御方に男の君が御渡來になる、御酒宴闌な頃に、男君の御安心の爲に、御睦しさを御見せにならうとあつて、晝日中女君を携へて御殿籠らせられる、誠にお目出度い次第だ、この御有様を辱く拜見してゐる清少納言であるが故に、思ふ人と夜着の中に埋もれながら聞く、曉の鳥の音を、無遠慮に詳記してゐるのも、更に無理ではあるまい。其他、例へば霧ふたがる曙の段の事實を、今人が今人の思想と言語とて描寫したならば、宛然女郎屋の曙てある。垂れ下つた下紐を「まだ解けながらなめり」と列ねたのは、生慾に滿足して何とやらといふ名句と、異巧同致ではないか「疎く思したるよしなどかすめいへば」とは、肘鐵砲の厭味の義、「逢ふの下草」口吟むとは、そゝり節、ばれ唄の山谷歸りといふ格である。

清少に美しい所もあるが、醜い所もある。彼女は醜と感じながらも、態とさらけ出した趣も混じてゐるからである。

王朝の末代は、德川の末代に似てゐる、藤岡君も確か指摘してゐるが、女の乳を氣にしたり、夏の月の打とけ姿の腰の當りから、男裝の女性を發覺したりするといふのが、狹衣以下の普通の着眼點で、私通や姦通や、私生兒や、あらゆる獸性の罪惡が小說を作つてゐるといつてよからう。愛情よりも性慾の方が盛んな時代であらうか、物語に描かれた世界は、とにかく其の通りだ。

平家鎌倉期に入ると流石男らしい文明て、平家の公達のセンチメンタルなのが憐れ至極に感ぜられる。男女の愛情も女々しく弱々しい、所謂る未練て、熱烈な

感情は、一切功名心に奪はれ去つて、性慾のみでなく男女の愛情其ものも、消極的な意氣地のない顔にのみ伴つてゐる。だから、離愁孤閨の外に詩材となるものは稀であつた。唯淸盛一人のみ平安朝式の面影があるが、それも常盤の苦悶や、妓王や佛御前の末路ばかりが詩的で、淸盛の獸性は主題にならなかつた、だが、隨筆的な記錄的な書物には、獸性が遺憾なく發揮せられてゐる。著聞集の興言綺語の條、ことに一生不犯の尼が、圖らず味つた獸性の滿足を佛前に告げに行く件などは、よく神經質の內務省が飜刻を禁じないことだと思ふ位だ。道鏡之陰倘不足に被思召と「はりかた」の起原を以つて筆を起した古事談の如きは、更に〳〵驚異すべきもので、かうまでに露骨だと、寧ろ氣が惡くなるだの、厭らしいだのといふ、人間らしい感情も起らない、唯吹き出してお了いになるが落ちだらう。

南北朝足利は、矢張り武士道全盛で、性慾に對して比較的に興味が乏しかつた上に、社會的の禮儀作法が嚴重になつて、上流社會の文藝は、この點には頗る淡泊であつた。和歌などにも「待てといへば寐ても行かなん强ひて行く馬の足折れ前の棚橋」(古今)の樣な激烈なのは跡を絕つた。唯だお伽草子や語り物や俳諧の樣な下等社會の文藝のみが獸性を描いてゐる。さしもの英雄義經公も、義經記や淨瑠璃十二段では赤い襦袢でも着て居さうと讀まれる、物草太郎も櫓の下に潜んでゐる所は、全く獸慾の塊である。だが、流石上流の禮儀作法が、作者を動かして、旣に獸慾を醜と認めせさせてゐるから、文字の上には、ユーフエミズムスが好んで用ゐられてあつて、作者の目ざす所は獸慾でありながらも、描いた文字は頗るかすめてある。譬へば裸體畫の腰卷の類で、我等には露骨なよりも却て醜いとしか考へられない。俳諧のは勿論滑稽の材料としてではあるが、「夜もすがらしたくぞ思ふ文珠尻」などの殺風景が恣にしてある。これは無法な我儘川柳點のばれ句の類で、是非の境に入るべきでなからう。

以上が、德川以前の有樣である。近世の文藝は更に複雜で、從つて更に面白い研究の對象である。(此項未完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

東京市の唱歌を評す

芳賀矢一

東京市が賞金を懸けて市の唱歌を募集して居る事は久しく耳にして居つたが、此度發表せられたのを見て失望したのは余一人ではあるまい。恐くはあまり市の條件がむづかしかつたのであらう。又或人のいふ如く懸賞金もあまりに少かつた爲に立派なものが得られなかつたかも知れぬ。余も現在は東京の一市民として東京市には興味をもつて居る一人であるから、どうしてもこの唱歌では滿足が出來ぬ。余はこの唱歌の作者には何の緣故も恩讐もない。聞けば作者は市内某小學校の校長て居られるとやら、これは誠に結構至極。余はかくの如き唱歌はかくの如き階級の人から出ることを最も望むので、位爵の高い人に作つて貰つた唱歌などは市としては有難くない。むしろ今回の當選者のやうな人の手に成つたものが、望ましい。それ故爾後又作りかへる樣な事があつたら、(余はむしろそれを希望する)やはり募集の方法によらねばならぬ。(懸賞の有無は別として)市の唱歌はあくまて市民の聲で無くてはならぬ。

今回當選の唱歌は第一に節の數が多過ぎる。これは最初市で極めた條件がむづかしかつた爲てあらう。一體あまりむつかしい條件を呈出するのが間違てある。この事は今さら言つても追付かぬが、東京市の唱歌といへば自ら範圍が極るのてあるから、其上に條件を付ける必要はない。作者の自由に任せてよろしい。さうして審査員もある事てあるから、其市歌としての適不適は審査員の鑑定に委せればよいのてある。とにかくこんなに多くの節があつては一寸歌ふのに誠に不便てある。露西亞の國歌の中途て尾崎市長が萬歲を唱へられたといふことが、新聞に見えて居つたが、もとより眞僞は知らないが、こんな長い唱歌を歌はれては、西洋人などは何遍も萬歲を唱へるてあらうとおもふ。國

歌とか儀式とかに唱ふ歌はどこの國のでもそんなに長いのはない。小學校の生徒は記憶するか知れぬが、普通の忙しい大人には記憶することが出來ぬ。其形式に於て已に鐵道唱歌式である。

次には其文句のあまりに平凡な事である。すべて散文的で、何等の詩趣のない事である。「國家に殉せし人の靈、祭るは九段の靖國社」「行政議政の諸機關もいよ〱益とゝのひつ」「國家有爲の人材を養ふために設けたる」「營む業も日に増して盛大にこそ向ふなれ」「列り立てる建物は製造場と知られたり」など誠にたゞ言てあつて、同じ事柄でも今少し詩的に言ひ顯す事が出來さうなものだとおもふ。歌といふ以上多少の技巧が無くてはならぬ。たゞ五言七言に合せるだけては少しも歌として人の心を動かす力は無い。「花は櫻木武士道の」といふ陳腐甚しい句の下に磐は高輪泉岳寺」と唯一箇處掛言葉を用ゐたことなどは最も滑稽に聞える。

次には其内容上「太平洋を渡り來て種下したる文明の」とは何事をいふのか、分らぬ。太平洋を渡り來たといへばアメリカをいふので、ペルリが來てから、開國の基を開いた意味かも知れぬが、この句では、日本の文明は全くアメリカ文明の種下して出來たので、日本の古文明などはサッパリ無い樣に見える、水道工事の事、學校敎育の事、製造場の事、技藝の進步の事、これ等はどこの國の都會にも共通の事で、東京の特色では無い。東京市唱歌としては東京に限つて動かぬものを讀込まねばならぬ「線路を四方に走せ違ふ。電車の響雷に似て、暮るれは千々の電燈の、光もまばゆし不夜の城」などいふことを東京の誇としてはならぬ。こんな事は西洋では田舍の小都會にもある。日本でも追々さうなるに相違ない。こんな事を東京自慢として居られてはたまらぬ。それよりはむかしの江戸っ子氣質でも讀み込むがよい。魚川岸の景氣のよいところでも詠み入れるがよい。

次にこの唱歌は現在を詠んだもので少しも永久的の性質を帶びて居ない。半永久でも無い。「今や明治の大御世に」「水道工事工成りて」「港もやがて築かれん」な

どいふのをみれば、この唱歌は築港の出來上ると同時に改作せられねばならぬ。「新橋、上野、飯田町、兩國橋の停車場」といふのも、中央停車場の落成とともに廢句とならねばならぬ。「旭日上る東洋に新文明の成らんとき、我等は東京市民ぞと世界の大路を歩むべし」と　んであるのを見れば、東京市民はまだ大きな顏をしては世界を歩かれぬのである。東京市の唱歌として市民がそんなに謙遜しなくてもよからうとおもふ。「かく隆盛に赴ける、我東京も歐米の、大都の規模に比ぶれば、遜色なしといひ難し」とまづ市の規模で閉口して居る樣であるが、市民の誇とするところは市の大小や、人口の多小にはよらぬのである。電燈や瓦斯の有無にはよらぬのである。余はむかしのアゼンの都を今のニユーヨルクの大都よりも貴くおもふのである。

この歌は中央停車場の出來上る迄の生命のものとすれば、格別心配もいらぬが、どの點から見ても、東京市民二百萬の民衆が歌ふべき歌としてはあまりに平凡て、無趣味で、拙劣である。之に比べれば一柳氏の大阪市の唱歌は數段上に位する。東京市が唱歌を募つてこれが最上等といふのには色々な原因があらう。余はたゞ市民の一人として甚だ之を遺憾に感ずるのである最後に今一度附言するがあまりにこの歌を非難して作者には甚だ禮を失したが、これは余が市に對しての希望から出たのであるから、その無禮は幾重にも御見逃しになりたいと願ふのである。

明治故人評論（七）

新島襄論

△新島先生に對する余の追憶

島田三郎

敎育家として知られて居る新島先生は、死後其先生の事業と精神とが多くの人に遺傳して偉大の感化を有して居る、且つ其親友たる米人デビス氏が精神を込めて細かに描き出したる傳記が遺つて居る、其感化を受

けた同志社の門下の人々及びデビス氏の傳記に付て遺憾なく先生の事迹は世に知られて居る。私は夙く先生の人格と事業とを承つて居つたが、親しく先生と相見たのは唯二回に止つて、それも極めて短い時間の事であつた、それ故に其傳記や同志社の人々の世に傳へて居る事柄以外に御話する程の記憶ヶ無い、併し深く先生を尊敬する一人であるから記憶して居る事だけを御話しませう。

故の陸奥伯は才氣絶倫、氣鋒縱横を以て世に知られて居る穎敏の人である、新島先生の熱烈純一の性質とは非常に違つて居る人で、正反對と云つても宜しい、併し私は陸奥伯を通じて新島先生の人と成りを聞いたのが始めてゞある、同志社の資金を募集する爲めに新島先生が國内の有力者に謀つた、陸奥伯も其相談を受けた一人と見える、其時陸奥伯に私が會つての話の中に新島先生の評があつた。

新島といふ人は宗教家であつて、特に博愛主義の基督教信徒である、又夙に米國に學んだ讀書家でもある又教育家として世に知られて居る、併し其根本の性質は熱烈なる愛國者である、維新の際國内の形勢未だ定まらざるに如何にして此日本を立派なる國と爲さうかと胸中に問ふて、先づ海外の視察となつた、勿論旅行費も無い、所謂苦學の書生として出掛けたのであるから非常な艱難を嘗めた、絶倫の忍耐に依つて此艱難に打勝つた、大に飛揚せんとする志望を持つて汚辱をも忍んだ、其心の底は如何に宇内の形勢に對して日本を立派なる國と爲さうかとの精神が胸中に躍つて居つた米國に居る間、建國以來僅に百年の米國が忽然として世界雄大の國となつたのは羨しいことであるが、又其原因如何と問ふて、國民の精神の奮揚に在ると答へた、更に一歩を進めて其國民の精神の奮揚、氣力の旺盛は何より來たかと胸中に問ふて、是れ基督教の感化に在るとの答を胸中に得たらしい、是が新島の基督教に熱心になつた根底かと思はれる。彼は一見して熱烈なる宗教家であるが、是と同時に非常なる愛國者である、人を愛すると同時に國を愛するの念の燃へて居る人で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある、靖献遺言を作つた人物に、之にポールの宗教熱を加へた人格と思はれる、學才の秀いでたるにも非ず世才の長じたるにも非ず、唯此一誠心一誠意が此人の人格の基礎てある、其應對も靜に其擧動も穩で、至極穩和の人のやうに見えるが、其胸中は火の如き猛烈なる人である、學校の爲めに金を募るには有らゆる方面の俗人にも接しなければならない、彼の本來の性質として隨分其事は苦しく感じたであらう、是も學校の爲め、教育の爲め、又日本の爲めと、此觀念が有らゆるいやな事までを忘れしむるであらう、自分は宗教の人ではない、又教育家でもない、一個の政治家であるが、新島の精神に動かされて相當な手傳をせねばならぬやうな感が起る、是は陸奧伯の新島評であつた。

新島先生は其誠心を以て種々なる性格な人をも動かした、陸奧伯も新島先生と反對の性質を持つて居ることを自分も知つて居る、併ながら其精神を大に認めて其事業の極めて大切なることを看拔いて、且つ其人格を斯く許し得たのは其眼識の犀利なる一端を見ることが出來る。

其後一二年德富猪一郎氏の傳言て是非新島先生に會つて與れろと言つて來た、私は平生先生を尊敬して居るから喜んで御面會をした、築地の精養軒であつたと思ふ、其時の話も矢張り同志社經營談てあつた、東京橫濱の間に同志者の贊成を求むることの話であつた、是は明治二十一二年のことで、私の洋行を準備して居つた時であつた、著書と洋行準備の爲めに、且つ交際も狹く、特に金力家に朋友が無いから、新島先生の話を承つても何の力を致すことも出來なかつた、唯東京橫濱の教育に身を寄せる人々の性質などを話して先生の參考に供へた丈けであつた。其後一度他の席て先生に面會して話したことがあるが、いつも同志社の經營談が主であつた。

私の先生を見たのは唯此二回に止つたが言語極めて靜に甚だ穩な人て、鋒鋩人を壓する底の氣象はなくして、春風人を和するの趣があつた、一言一語胸中の熱誠を吐出すの感を與へた、其話はいつも教育の問題て

あつたが、其中に如何にして必要な人才を日本に供給し、後來帝國の發達は國家を維持し開發すべき人物の養成に外ならぬとの意見を言外に知り得た、此應對の間に陸奥伯の前年の評語が能く其肯綮に中つて居ることを想ひ起さしめた。

傳記にあるが如く先生は艱難と戰つて、苦心慘憺、其天性の器を成就して逢ふ所の人を感化し同化し、其力に依つて好事迹を日本に遺した、比較的蚤死をせられたが爲めに其胸中に懷いた所の理想を半ばも實行せずして終つた、同志社の發達を意の如くならしめなかつたのは遺憾の極りであらう、世間も亦先生の爲めに深く之を憾みとする、併し其直接に同志社に遺した事迹と、間接に日本の精神を養ふた力は偉大なるものである、歴史的日本の觀念は基督教に反對の思想が多い特に日本の精華とも見るべき武士の精神は博愛の基督教と或點に於て相容れずと見る人が多かつた、詳しく言へば愛國と博愛とは兩立しないとの狹き觀念もあつた、教育家と稱する社會に此觀念がなか〱盛であつた、讀書家漢學者の中に鬱勃として此思想があつた、然るに先生の人格は猛烈なる愛國の觀念を胸中に蓄へて、基督教に歸依し、此思想を調和し得て之を教育の上に發展し、之に由つて多くの人才を作つた、此事迹が極めて日本の思想を一新する一の原因となつたのは時代に取つて最も必要なる任務を盡されたと思ふ、同志社の事業は先生の比較的早世の爲めに一時は非常な艱難に遭遇したが、近時は亦先生の遺した門下の人才が同志社を經營し、其人物も適當なる後繼者と認めらるゝ人が起つて、再び先生の事業を回復し發展するの好時機を見ることが出來やうと思ふ。

自分は同志社の事に付ていつも深き同情を持つて居るもので、事業其物の日本に取つて極めて有益大切であるばかりでない、先生の志が其事業に寓して、死せる先生の志は此學校と共に活きて居るかの如き感があるからである、人格の人を動かすことは想像以外のものであると思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

△故新島襄氏

佐治實然

拜啓小生に故新島襄氏のことを御尋被成候とは米國人に對して日本の富士山の風景を問ふが如く所謂御門違ひかと被存候小生が元と佛敎僧侶にてありしとは姓名の文字の上に顯はれ小生の名を知りて居る人にはかくれなきことゝ存候而して新島襄氏は日本基督敎の基礎を置きし人たることも世間に知れ渡りたる事也故に小生と新島襄氏の間には一大鴻溝有之候ひしなり段々世の中の議論もすすみ佛敎徒と基督信者の間に感情緩和し彼此の交際するやうの時運に向ひし頃は最早新島氏は昇天後にて小生とは上下無是の楷段を隔て候右様の譯ゆゑ小生が新島襄氏を知る機會は無之去り乍ら今こそ眞面目な顏して大層出世して居らるゝ基督敎の名家も假令ば横井時雄氏の如き市原盛宏氏の如き金森通倫氏の如き小崎弘道氏の如き人々が京都同志社の靑年學生として四條の芝居小屋にて破佛の大演說會を開きしことあり小生等本願寺の靑年僧侶も其向ふを張りて同じ芝居小屋にて駁邪大演說會を開き相互に罵詈讒謗して一時の快を取り聽衆の血を湧さしめたるなど今日より觀れば野蠻の行動も三十年の昔と相成り星移り物換り時勢は急轉直下して基督敎の名家も今日の如き社會的位置にすゝみ小生も十數年前よりゆにてりあん主義の旗持ちとして所々を徘徊するやうになりしと回顧すれば山高水長の觀あり頗る興味深きことに存候偖京都にて小生等が基督敎徒と大惡戰を演じたる當時にても他の佛敎徒は如何樣に考へ居りしか不分明に御座候へども小生は新島襄氏の如き豪傑が何故基督敎などいふつまらぬものを信ずるのであるかと思ひ居候要するに敵の大將としての新島氏の人格にはたしかに敬服致し居り候ひし也而し其敬服せし點は恐くは新島氏の眞の人格にては無しと想像するに難からず去れども朝夕親しく接せざるものが遠方より敬服するも的外れのことあり又誹謗するのも誤解に出ることあるは到底人の免れざる所と被存候小生は新島氏の維新前に國禁を侵して海外に航せし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意氣の壯烈を慕ひ上州の山奥より出てゝ世界的精神的事業に盡して生涯うむなき精神を敬慕致し候今日小生の友人より聞く所によれば新島氏は學生に對して情誼の厚き全く父子の如きものありしといふ是等の點は定めて子の如く愛せられたる人の筆にて充分にかきあらはされ候へしと推察候へば小生は又聞きの話は一切かき不申終に一言申たきと有之候其は一人物を過信するの弊は明白なりといふとに御座候此世に生れたる人物にして同じく此世に生れたる人物の手本となりて少しも缺くる所なきものあるはづは無之是等は尤も理義の顯著なるものなりと被存候諸君如何におもひ給ふや

（十月十七日正午）

△新島襄先生の傳を讀む

山路愛山

デビス氏の著はしたる新島襄先生の傳は余輩の深き興味を以て讀みしもの也、たとへ其序事の中には日本に來住せる外國宣教師に固有なる一種の僻見ありとするも讀者をして甚しき嫌惡を生ずるまでに至らしめず。大體に於ては正直なる傳記と評するを得べし。

何をか序事中宣教師に固有なる一種の僻見ありと曰ふや。たとへば先生脫藩渡航の動機を以て英語の聖書を讀まんが爲なりと云ふが如きこと是なり。そは先生が米國到着後ハーディー氏に寄せて救護を求むる書に當時の事を記るして

一日友人某の宅を訪ひしに其書齋に一小聖書拔萃の在るを發見したり、こは某米國牧師により漢字を以て譯され聖書中の最も重要なる事項のみを摘載せるものなりき。予は此書を友人より借受けしも若し之を讀むこと幕府に知れなば酷法に照され余の一家は嚴罰を免るゝ能はざるべきを恐れしを以て夜間窃に之を繙きしに予は此時初めて天地の神に就て知ることを得たり。即ち神は蒼天より土地を分ち、土地の上に光を造り、又草木禽獸蟲魚等を造り玉ひ、次に神の像に象りて男を造り、又男の肋骨を取りて女を造り、かくして凡て宇宙の萬物を造り玉へる後安息し玉へり。此日を我等安息日と稱ふる等のことを知り得たり。又イエス、キリストは神の御子なるに世の罪を御身に負ひ十字架上に死し玉へるを以て我等彼を救主と稱ふることをも知り得たり。予は是等の句を讀むに及び卷を投じて左右

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を顧み自ら問ふて曰く予を造りし者は誰ぞや。父母なるか、否。父母にあらずして神なり。予の机を造りし者は誰ぞや、匠人なるか、否。匠人にあらずして神なり。神地上に樹木を生ぜしめ、匠人をして其樹木を用ひて予の机を造らしめ玉へるものなり。かく考ふるときは予は神に感謝し、神に信賴し、又神に對して正意誠心を盡さゞるべからずと。此時よりして予は切に英譯の聖書を研究せんと欲し、英米の教師に就きて教を請はんが爲め函館に航せんと企て此事を藩主及び兩親に告げ其許可を請ひしも遂に許されざるのみか、漸く其企望に付き警戒を與へられしかど、予の確志は諫告苦言によりて動かさるべきにあらず。予は只管神に「願くは予の目的を遂せしめ玉へ」との祈を捧げその志望を益す確守したり。

かくして予は某日本教師に就きて英語の研究を始しが。一日江戶の某街上に於て兼て予を熟知し、且つ予を愛せし小帆船の船長に突然邂逅したり。予彼に帆船の出帆期日を問ひしに三日以內に函館に向て拔錨すべき旨を答ふ。予更に「予切に函館に航せんことを願ふ。君幸に予の志望を容れなば彼地に同船せしめよ」と云ひければ彼答へて「予は君を同伴せんとするも恐らくは藩主及び君の兩親之を許さざるべし。故に先づ其許可を請ふべし」と云へり。其後二日を經て予は些少の金子と數點の衣類及び二三の書物を携へ其貯へ盡きなば如何にして食ひ、又如何にして衣るべきかと云ふが如きことは全く考ふる所なく唯一身を神の御手に委ねて平然父母の膝下を辭し、翌朝將に函館に向て拔錨せんとしつゝありし一小帆船に乘組みたり。函館に着するや英語の教師を得んと欲し、百方手を盡くせしかども遂に之を得る能はざりしかば、今や予の思想は一轉して寧ろ海外に脫走せばやとの念を生ずるに生れり。然れど若し祖父及び兩親にして此事を聞きなば如何に悲み玉ふならんとの一念は一時予をして躊躇せしめたる所ありしも予は又靜思自ら謂へらく、父母は予を生み予を愛育し玉ひしも、予は更らに天父に屬すべきものなれば、先づ神を信じ神を感謝して其御旨に順ひ歩まざるべからずと。此時より予は海外渡航の便宜を得べき船舶を捜索し始めたり。

とあるに據りて推斷したる所なるべけれども余輩は、悉く此推斷を首肯せんには更に多くの商量を要することを信ずるものなり。蓋し先生が脫藩したる當時に於て、耶蘇教に對する我識者の感情は漸く一變し、窃かに支那刊行の教書を讀むものなどもありしは事實なれば、先生の如き眞面目にして、しかも多感なる青年が耶蘇教の教義を尋ねんとする好奇心を起したるは不思議の事にあらず。さりながら先生脫藩の全動機は一に聖書の神を求むるに在りきとせし著者の推斷は餘りに單純に過ぎたり。近世史を繙きて當時の思潮を按ずるに日本の人心は正に世界の大勢に攪醒せられ、身を挺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して海外に赴き觀國の壯擧に從事せんとするの欲望、有爲なる青年の心を挑發しつゝありき。而して脱藩潜航の手段に依りて其志を達したるもの亦少からず。或は藩主、自ら其士の青年なるものに敎へて此手段を取らしめたるものさへなきに非りき。そは當時に於て渡航の途は幕府の使節の船に便乘するの外は唯此一法ありしを以てなるのみならず、藩士の中に海外の事情に通ずるものあれば則ち藩の威力を加ふるものなりければ也。先生の脱藩渡航の如きも、實はかゝる思潮の一發現に過ぎず。先生の自ら語る所に依るに

予一日江戸の市中を散歩せし時、偶々玉島航海中（是より先き先生は藩侯の親戚、松山侯の持船なる一小蒸氣船に乘じ江戸と中國玉島の間を航したることあり）の一友に邂逅せしが、彼告ぐるに君公の汽船三日を出てずして箱館に向ひ拔錨すべきを以てし且、予に同行を促せり。こは唯一時の情誼的勸誘なりしと雖も予に取りては決して興味なき問題には非りき。かくて友人と袂を別ちし後、新なる望の光は電の如く我心に閃めき、終に箱館渡航を好機會として年來の宿志たる海外に出づるの企望を實行せばやと心窃に決する所ありき。然れども如何にして此志望を遂すべきか、藩侯に謀るも到底此行を許さるべくも見へず。故に予は先づ予の胸中を松山侯に告げ藩侯及び父母には此事を知らしめずして今回の企圖を成就せんと欲し、直に松山侯の寵臣某を訪ひ事情を明かにして懇願せしに、嘗てより相識れる間柄なりしかば大に其企圖を稱讃し予の請を容れ即刻藩邸に赴き、藩侯に告ぐるに實情を以てせしかば松山侯も深く予の志望を嘉みせられ、予の藩主に使者を送り、予をして自由の身たらしめんとし給へり。かゝる懇切なる使者に接して藩主も否むに由なく終に予を許して自由の身となし給ひければ玆に始めて予の計畫も漸く其緖に就き箱館航行を妨ぐべき何等の障碍をも見ざるに至れり。父は此報を耳にするや親子の情として予の渡航を欲せざりし者の如くなりしと雖も既に藩侯の命令ありたる後なれば今更予を留るに由なかりき。此事の決定後二日にして慈母及愛姉の盡力により旅裝全く整ひしかば祖父は予の知己、朋友を招きて此行を壯にせんが爲めに小宴を張れり。主客席定まるや祖父は先づ酌むに水盃を以てし再び相見ることの難きを語る。一座愁然として頭を擧ぐる者なく唯予と祖父とのみ呆然として相對せり。祖父は胸中涙を以て塞かれん斗りなりしと雖も、尙ほ強て笑を頰邊に湛へ、予も亦敢て悲哀の情を表さざりき。宴終るや祖父は予に告て曰く爾の將來は恰も百花爛熳たる山頂を攀づるが如し其快や名狀すべからず。何等恐怖の念を抱くことなく其志す所に向て勇進すべしと。予は祖父よりかゝる忠言を耳にせんとは夢想だもせざりし所なり。然るに今や此勇壯なる別辭に接

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しで予の勇氣は茲に一倍し感恩の情を以て祖父を拜し父母愛姉及び一座の知己友人等に別を告げ宿昔の希望たる世界を見ずんば再び家郷に歸らずとの決心を以て多年住み慣れたる我家を後にし萬里孤客の身とはなれり。

見るべし、箱舘航海は脱藩渡航の一手段にして而して脱藩渡航は當時の閣老中最も聰明にして事局に通達せし政治家、松山侯板倉勝靜の慫慂せし所。藩主の默諾せし所、父兄の枉げて許したる所、朋友の壯として送りし所なることを。先生當時の詩歌は善く其志を見るべきものなり。曰く、

武士の思ひ立田の山楓
錦着ずして歸るものかは

一襲弊衣三尺劍。回頭世事思悠々。男兒自在蓬桑志。
不渉五州都不休。

是豈宗教順禮者の口吻ならんや。されば余輩はデビス氏が先生渡航の動機を以て一に聖書の神を求むるに在りきと爲したるは偏見臆斷たるを免れずと云ふ所以なり。されど余輩は之と共に先生がハーデイー氏に寄せたる書簡を以て詐を書きたるもの、若しくは所謂方便を用ひたるものなりとするものにあらず。渡航の當時に於ける先生の英學は甚だ乏しかりしを以て此書簡の如きも思ふに何人かの代作若しくは潤色を待たざるを得ざりしならん。是れ此書の稍事實を失ひたる所以なるべき歟。

斯くの如くにして先生は宿昔の志を遂して海外を見るを得たり。而して之と共に米國に於ける模範的基督教徒の家庭に愛護せられたり。余輩は自由と民政と基督教の國なりし當時の米國が遂に先生を化して自由の使徒、民政の使徒、基督教の使徒として再び之を故國に送り返へせしことの偶然ならざるを信ずるものなり。

人或は先生を以て單に熱信敬虔なる傳道者に過ずと爲す。されど是れ一面の觀察に過ぎず。先生は其溫和なる衣粧の下に俠骨稜々たる武士の感情を有したり。嘗て其初航の船中に在りて羞辱を蒙るや、憤慨の極、刀を手にして武士の面目を全ふせんとせしことあり。船長の食匙を洗水と共に海中に投じたる失策を悔ひ自

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

已の携帶せし金錢を悉く出して船長の室に至り形容を以て過失を謝し、携帶せる金錢を賠償として受領せんことを請ひしこともあり。上海に於て支那譯の聖書を買はんと欲し、船長の許に短刀を携へ行きて之を米貨八弗にて購求せんことを請ひ、其快諾を得て始めて之を買ひしこともあり。其ハーディ氏の庇護を蒙るときに當りても成るべくは自己の武士的體面を維持せんと欲し、恩に眤れて必要以外の物を請ふことなかりき。面目を重んじ、獨立を尊び、氣節を挫くことを欲せざりし先生の此の如き品性は米國に植へらるゝに及んで熱心なる基督教徒となり、之と共に熱心なる自由の信者となる熱心なる民政の信者となれるは怪むに足らず。他語を以て之を言へば先生が父祖より遺傳したる宗教心は先生をして基督教徒たらしめ、先生の品性を支ふべき柱たりし武士道は先生をして自由と民政の信者たらしめたり。先生が多くの洋行歸りの傳道者と選を同ふせず、一種の異彩を明治想史に放ちたるもの實に是れに職由す。

果して然らば怪しむこと勿れ。先生が始めて新日本の使節たる岩倉、大久保、木戸の一行に會せし時日本在來の慣習に依りて此等の長上の前に平伏頓首するの禮を取らず、却て米國風なる平民的の禮法を取らんとしたることを。此の如きは先生の氣象を見るに足るべきものなり。

此時先生は又日本政府の金に依りて留學し居る十二名の書生と同樣に取扱はるゝことを欲せざる旨を公言したりき。そは自ら自由の國に育ちたる獨立の紳士なりと信じたれば也。先生の胸中に於て此感情の如何に強かりしかは當時フリント氏に寄せたる書簡に於て最も明白に現はれたり。曰く

過日森公使がハーディー氏に會見せられし時、今日迄予の教育のために消費したる費用の目錄を請はれしを以て或はハーディー夫人に今日迄の予に對する失費を償還せらるゝ事なきかを懸念せり。予はハーディー氏が其目錄を渡さるゝなからんことを希望す。若し一朝公使の手より凡ての失費を支辨せらるゝが如きことあらば予は日本政府の束縛を免るゝ能はざるに至らん。予は自由なる日本市民として主の御旨をなさんが爲に一身を献げまつらんのみ。故にハーディ

ー氏に一刻も早く會見し、此事情を陳ぜんことを希ふ。予は主が此問題に對して賢明且愼重なる判斷力を我等に授け玉はんことを祈る。

米國的自由獨立の精神が深く先生を感化せしこと察すべきなり。思ふに後年に至つて先生が日本に於ける組合、一致兩教會の合併に反對し爲めに教徒の異論を招きたるも亦實に自由と獨立とを基礎とする組合派の教會政治に心醉したるが爲のみ。何となれば「予は合議的自治制の愛慕者たり」とは當時に於て先生がハーディー夫人に送りたる心中の語なれば也。

所謂熊本「バンド」なる一團の青年が先生に歸嚮し其心を獻げて一種の精神的會社を結晶したるものは獨り先生が熱心なる基督教宣教師たるのみならず。之と共に自由を愛し、民政を愛し、獨立を愛するの人たりしが爲めのみ。

斯くの如くにして先生は日本の精神界に善良なる米國的感化を皷吹したりき。其事業と其勢力との範圍と性質とに至つては余輩の此處に盡し得べき所に非ず。而も余輩は一言せざるべからず。そは先生の事業は不幸にして外國宣教師と共にしたりしが故に數ば窮境に陷らざるを得ざりしこと是也。

日本精神界に於ける外國宣教師の功罪は固より遽かに論定し得べきにあらず。されど日本に於ける幾多の敬虔なる人士が外國宣教師と事を共にしたるが爲めに或は事を共にしつゝあるが爲めに無益の精力を消磨し、不思議の濡衣を着せられ、思想の活動を失ひし若しくは失ひつゝあるもの多きを見れば余輩は眞に痛歎に堪へず。正直なるデビス氏は此書の內に於て同志社の存立が始めより或る外國宣教師の爲めに猜疑せられ、無用視せられ、反對せられ、妨害せられたることを記るしたり。先生も亦嘗て米國傳道會社に對し外國宣教師が聖書を教ふること過度に失し、學術の教授を怠慢に付したるが爲めに有爲の青年をして同志社に失望せしめたることを非難し、彼等が自ら日本の國情に迂なるを知らず。自ら進んで日本の教役者を養成することをせず。却て本國より宣教師の來援を求むることを識れり。先生が彼等の難有迷惑なる干渉を屑とせざ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りしや知るべき也。若し先生にして始めより洛陽の一布衣を以て自ら居り、閑雲野鶴、眞に孤獨の傳道者たるを覺悟したらんには、余輩は先生の流風餘韻更に大なるものありしを信ずるなり。

然れども是れ唯備るを君子に求むるの言のみ。ハーディー氏の懐に投ぜし時より先生は外國傳道會社の捕虜となるべき運命を有したり。先生が傳道會社と離るゝ能はざりしは殆んど宿命なり。余輩何ぞ之を酷論せんや。余輩は唯獨立を喜び自由を喜び正直なる信仰を喜びし大なる精神が外國傳道會社の桎梏に苦しみつゝありしを哭せんと欲するのみ。

余輩嘗て京都に至り、若王寺山に上りて先生の墳墓に謁す。下瞰すれば則ち黒谷あり。舊日本の平民的傳道者法然の遺蹟なり。嗚呼新日本の傳道者たりし先生の功績は之を舊日本の傳道者たりし法然に比するを得べき乎。後の歴史は之を知り得るの機會あらん。今日は則ち其時に非ざる也。(明治三十六年九月三日獨立評論)

新島襄先生

安部磯雄

世には知情意の釣合よく發達して居る人もありますが、亦其中の一方に偏して居る人も少くありません。私の見たる新島襄先生は決して一方に偏して居らるゝ樣には見へなかつたですが、强いて何れの方面に最も多く發達せられて居たかと言へば、温かき優美なる感情ではなかつたかと思ひます。先生の如き涙脆き人を私は嘗て見たことがありません。先生は說教するにも演說するにも非常に熱誠でありましたから、屢感極つて泣かれたのであります。時には歔欷流涕殆んど語を發することが出來ぬ程でありました。學生などが死んだ時には大概先生が追悼の說教をせられたのですが、私は何時も泣かされたのです。學生中には『先生が今日も亦泣いたよ』などいふ者もあつた位ですが、さりとて先生は感情一方のお方ではなかつたのです。先生の意志が如何に堅固であつたかは其傳記を讀めば明に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分ります。亦學識に富んで居られたから決して常識に外づるゝ樣な言行はありませんでした。然し先生の熱情といふことは先生の人格に特種の光彩を添へて居た樣に思はれます

熱情といへば少し意味が廣漠に過ぎるかも知れません。世には學問に對し、事業に對し國家に對して熱烈なる感情を抱いて居る人がありますが、先生の熱情は專ら同胞人類に對して注がれたのであります。故に愛情といふ語を用いた方が適當であるかも知れません。先生が生前は勿論、死後に於ても尙ほ多くの人々に善き感化を與へらるゝのは全く此愛情に因ると申さねばなりませぬ。人を最も多く動かすものは知力でなくて感情であります。古來最も多く人類を感化したる偉人が熱烈なる感情を有して居たことは殆んど疑ふことが出來ない樣です

先生は慥に慷慨悲歌の士であつたに相違ない、十數年米國の基督敎的文明に接觸せられたゝため、其人格は一變して所謂英米の紳士風になられたのであるけれども、尙ほ東洋的豪傑の風は充分にほの見へて居たのであります。換言すれば先生は慥に革命時代に於ける偉人物の面影を有して居られた。私が先生の事を追懷する每に先づ其心に浮ぶのは先生の淚を含める眼と少しく顫へる語であります。今日に於て先生の如き熱誠を以て演說する人は一人もありません。これを思ふ每に私は先生の事を一層なつかしく思ふのです

△新島先生の性格

内村鑑三

新島先生が事業に忠實であつたこと、愛國心が强くして日本を切に思はれたこと、それから基督敎に深く歸依して居られたこと等は、何人も異議のないところである、が唯一つ私の疑ふ點は、先生を宗敎家と見る事が出來やう乎、其一點である、米國でも逢つたし、日本でも逢つた、先生と私とは相逢つたことは稀だとはせぬが、何時も心靈上の問題となると先生は沈默を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

守られた、私の熱信を褒めては呉れられたけれど、自身て深く味はれた心靈上の自證の境界を話されたことはない、一度も無い、先生を尊崇(アドマイア)する人から先生に就いての談話を聞いても、此處ぞ先生が宗教家だといはるべき點が窺はれない。先生の人格の如何は先生の化身と見られる同志社によつて知られやうと思ふ、聖書の中にも「樹はその實によつて知らる」とある、吾人は到底正當に人を解釋することは出來ぬ、只其の人の精神の現れたる事業の結果を見て、それから判斷を付けるより他には道がないのである、それ故同志社の結果の如何を見て、遡つて新島先生の何人たるやを知るべきであらう、が同志社の齎らせる結果は如何であるか、之は天下萬衆の前に示されて居る當面の事實であるから、敢て私見を此間に挿むまでもなかろう、先づその事實を見るに、同志社が出す人物には宗教家は少ない、滿更無いとは言へないが割合に少い、それは宗教を說くもの凡てが宗教家であるとする、左樣な標準によるならば談は又違つて來ようが、世には名は政治家でもその實宗教家なるものがあると同しく、名は宗教家でもその實又政治家なるものもある、同志社で出した宗教家には眞の宗教家なるものは甚だ少いと思ふ。重ねて約言するならば、新島先生は誠實の士である、愛國者であつた、自己の爲したる事業には熱心なる人であつたとは言ひ得るが、宗教家には言ひ兼ぬるといふ事に歸着する、日蓮とか親鸞とか蓮如とかいふ性格ではなかつた、又ルーテルとかサボナローラとかフランシスとかいふ人物でもなかつた、凡てその質を異にして居られたやうに思はる、然し斯うは言ふものの、或は私が先生に對して接近の度が少くて、遂にその眞相を窮めるとの出來なかつたのかも知れぬ。西洋の諺にも「故人に對しては善い事の他何も言ふな」とある、それ故これ以上の品隲は私の憚るところである。

△新島襄先生

横井時雄

一體新島先生は安中藩の人で關東人であります、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れで先生の氣風にも其の趣が出て居りました、非常な熱誠家で、眞面目で、感情的であつた、或る意味に於て宗敎上の高山彥九郞と云ふて宜しいかと思はれます、學問の範圍が多方面に涉り、智識力が高邁であり、而して人格が豁大であつた。福澤先生などゝは趣を異にして居られた、哲學者とか、文學者とか、乃至學者として社會に大勢力があつた譯ではない、勿論十數年海外で硏學せられたのだから、彼の時分の日本にありては誰れにも後れを取らぬ、學者としても立派な人物ではありましたが、先生の主として一世の感化を與へられたのは、熱心であり、至誠であつた、先生其の人の人格であつたのです。

先生は實に熱誠の人であつた、從つて感情的でもあつた、書生などに對しては非常に憐愍の情が厚かつたのです、が其の裡には言ふべからざる一種の威力が籠つて居る、それは敎育家としても宗敎家としても然うであつた、この風であるから宗敎上の學說、高遠なる談理などよりは躬踐實行を尊ばれ、己れの信ずる處を他に傳ふるに當りては、至誠の感情直下惻々として迫まるが如き概があつた、感極まつて淚を垂るゝなどは屢々あつたのです、高山彥九郞は上州の產でありますが、先生も矢張り上州、私はそれで先生を追想する每に高山彥九郞を聯想する。

高山彥九郞と云へは有名なる奇行家である、其の人と先生と似て居るのは熱誠であつた點丈けで、先生は奇行など敢てせられなかつた、先生は何う見ても堂々たる紳士と云ふ格で、禮儀を尊はれた方である、貴顯の人に對しては相應の禮を取られたのは言ふに及ばず、目下の者に向つても極く謙遜の態度を以て接せられた、衣服及び其の他日常生活に於ても奇を衒ふなどの風は少しもなかつた、感情一片に偏した高山彥九郞などゝは大分違ふ。

宗敎家としては頗ぶる自信か强く、信ずる處は容易に動かなつた、此の點は寧ろ頑固とも言ひ得べき位であつたが、それと同時に如何なる人の說にも傾聽するを惜まなかつた、一寸矛盾の樣だが、先生は實に他の說

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には謙遜の態度を取られながら、自說に到つては仲々枉くる事を肯せない、或は先生のかゝる態度を評して頑固を衒はんか爲めに過ぎず、など誤まつた解釋を施した人々もあつた樣だか、それ等は皆間違て、自信と謙遜の二つが先生と云ふ一人格の上に結ばれて存した結果であるとするのが正しいのです。

また敎育家としての先生を見れば、單に敎授すると云ふ能力にありては凡を拔いて優れて居たとは思はれません、たゞ長所ある人物を收攬して己れの用をなさしむるとの樣な事には他人の企て及ぶべからざる或る力があつた、一旦採用した人物には自在に其の長所を發揮せしめ、手腕を延はさしめたものですから、何れも樂んで其の下に力を盡したものです、側から見れば餘りに放任過ぎはせぬかと思ふ位各敎授を勝手に働かせた、それで其の人々も充分遣り度い丈けの事は遣つたのではあるが、振り返りて今日より見るに、益々新島先生の卓然として偉いのが分る、德望、感化、威信に於てそれ等の人々は先生の膝下に跪くにも足らずと云ふ有樣て、詰り先生の人格か偉かつたからでせう。

先生は謙遜てあつたから何人も親んで近づく事は出來たが、狎れ近ついて居る內にも犯すべからさる威嚴、侮るべからさる森然たる感じを常に其の四圍の人々に與へられたのです、殊に其の身か怠慢てあるとか、不都合な事でもしてある時などは、先生の顏を正視せられなかつたものです。

先生の紀念として殘つて居るのは京都の同志社てあります、今日の同志社は早稻田や慶應の樣に盛大てない爲め、先生の殘されたる事業の甚た振はざる觀あるは遺憾の至りてす、併し同志社に就きては色々の事情があつて斯くなつて居るので、先生の養成せられた人物は、今や社會に漸々頭角を現はしつゝあるのですから、遠からず同志社の一飛躍する時期のあるものと信ずる、今日の同志社の振はないのを以て輕々しく其の價値を斷じては貰ひ度くないのである、先生の感化を蒙つた人物は今後如何なる事業を社會に貢獻するか、同志社の將來は如何に發展するか、願はくは注目して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居て貰ひ度い、今日の同志社を以て吾々は決して最後の進歩とは思うて居ない、聊か期する處があるから世間の誤解なき樣此處に言ふて置く、之れは私一個の意見ではなく、吾々同志社出身者の一般に抱懷して居る所のものである。(談話筆記)

△新島先生

松村介石

新島先生の心の變遷、それから先づ說いて行かう、我輩は新島先生の弟子でも同志社の出身でも無い、けれども永年先生の樣にして居つた、又先生の處に一週間も居つて鐵砲打にも跟いて行つた、親しく交をして貰つたから少しは知つて居ると思ふんだ。

先づ我輩の推察を言ふんだがね、彼の先生の鄕里は上州の安中だけれど、江戸へ早くから出て居つた、その時分の江戸は天下動亂渦卷の中だつたから、矢張り時代に伴つた靑年の思想が先生にも有つたに相違ない、即ち國家を如何し樣といふ國家的思想だね、それが有つたに相違ないと思ふ、當時の靑年は今の靑年の樣に、食つたり飮んだりの問題がないから第一に國家といふ思想が有つたんだ、兎に角尊王攘夷討幕の議論、革命の議論と色々あつて、宛ら鼎の沸くが如くに騷いで居る、是非は干戈によつて決するといふ時だ、がその樣な問題は皆海外の影響から來て居る、其處で先生は、之は是非とも矢張り吉田松陰の樣に、親く海外へ渡つて彼方の形勢から見て掛らねば、解決は到底就かぬと斯う考へたものだろう、それで函館から婦人の服など着て遂々脫走したものらしい、兎に角船乘となつてまんまと米國へ入り込む、それから厄介になつたのがハーデーと云ふ人なのだ、

此ハーデーと云ふ人が妙に基督敎の熱心家で、品行方正な、實に溫篤な君子であつた、先生は此處で初めて基督敎に接觸したのだが、能く思案をした結果遂にその信者となつて仕舞つた、さあ信者となつて考へて見ると、最早國を出てから歲月は積つて居る、その間

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に維新の革命も出來て仕舞つて居る、して見れば之からやるべき事は當時の問題の解決ではない、左樣だ、爲すべき事は唯基督教の宣傳のみだと、斯う考へて彼地で學問を續けて居る、その間に岩倉さんの渡航がある、先生は頼まれて通辯となり、米國から歐羅巴までも隨行員となつて遍歴した、此樣な關係があるから、日本へ歸りても隨分出世の途は開けて居る、高位高官にも上ることが出來たに相違ない、が先生の目的は早くその時分から決して居て、身は精神界の先導者を以て任じて居たのだから、頃は明治七年である、先生が米國から日本へ歸る時には、志を米人に訴へて自分は之から本國へ戻り、專ら基督教の宣傳に力を盡さうと思う、それには資本が入るといふ樣なことて、米人から寄附金を得之て確乎たる根據を作つて來た、其處で愈よ佛教の根據地たる京都に地を卜して同志社を開いたのだ。

當然京都には反對者があつた、が又贊成者もあつた、特に第一資金は米國から來る、第二に英學の盛な時期であつたのに、學校の教師は皆外國人が無代價で來てやつて呉れる、英學が歡迎されるに伴つて學校も日に增し盛になる、從つてその中には學校內にもポツポツ信仰家が出來て來る、それに又丁度當時は佛教も儒教も一種の革命に遭遇して、一寸回復の道に困つて居る、同時に道德は腐つて來る、亂れて來る、何か根本になる道德の標準を見出したいと一般に待ち設けて居る、氣運は既に斯うである、ところで如何であらう、一方には新智識と新道德と、それから國家の爲には身命をも抛たうといふ、御維新革命以來から養はれて來て居るその盛な精神だ、それをそつくり受け繼いで基督教の爲なら十字架にも掛ろうといふ熱心がある、斯ういふ熱心で元氣のよい青年が諸方を風靡し廻るのだから、その勢といつたらない、實によい勢でしたわ、斯くして同志社は愈よ基督教の根據地となつたのだ、正に是れ新島先生大得意の境涯であつたろう、まあ明治の十五、六、七、八年かな、その頃が一番であつたろう、その前後を最少し加へたら、十二三年頃から二十

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年迄もなろうか。

その次に先生の頭に一つ浮んだ考は、自由教育、自治教育といふことだ、外國人の金を貰つたり、無月給の宣教師のお蔭を蒙つて、それて何時までも持續するといふ事は先生本來の考てはない、此樣な譯て前の樣な意見を唱へ出して同志社を全然獨立させ樣とした、先づ同志社を大學となし、内外人からの寄附を仰いて資本を作り、宣教師には何等の關係なく、文部省にも何等の緣故のない、純然たる一ヶ獨立の學校を作つて獨立の教育をしやうと試みた、處が左樣旨くは行かんだ、第一日本人から重に金を集め樣とて駄目だ、誰も澤山は出して呉れぬ、第二に彼の學校を獨立せしめ樣となるとだ、その建物も地面も皆外國から或る條件附て寄附になつてをるんじやないか、又學校の事に就いても凡て是まて宣教師と相談して來て居るんじやないか、だから色々の衝突も起るさ、面倒もあるさ、其れや此れやて心配して居る中に先生は病氣て中途て死ぬといふ事になつたのだ。

吉野山花咲くころは朝な朝な
心にかゝる峯のしら雲

此歌は先生がその事業に掛つて困難して居る時分に作つたものだ、死ぬる前になつて今から先が分らなくなつたから此樣な歌も自然に出來たのだろう、强ち同志社ばかりの事てもなく、一面我國の前途にも心を配つて歌つたことてあろう、即ち同志社の方から言へば、今や花なら滿開の姿だ、滿開といへば宜い樣だが兎角すれば散らんとする姿だ、一朝間違へば敢なく散らう、それが先あ心配てならなかつたろう、又日本の國家から見れば斯うだ、氏の沒くなられたのは二十二年頃と思ふが、氏は生來の愛國家てある、二十三年には國會も開け樣といふのだから、矢張樹木に譬へ樣なら花咲く頃だね、それに就いても色々心配のあつたのは無理もない、それ等の考が融化して此一首の歌となつたと思はれる。

果してだ、先生沒後、橫井時雄君が校長となられた時代に、宣教師から橫井の言ふ樣な基督教の信仰なら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

土地も建物も一切貸さぬと申込む、お仕舞には裁判所まで訴へ出るなど〻騒ぐ大悶着が持ち上つた、そんな始末て同志社は遂に花の散つた形になつて仕舞つた、實に地下の新島先生に取つては千載の遺憾だろう、氣の毒な事だ、我輩は同志社出身ても何てもないけれど、之を思ふと實に殘念千萬に思ふね。

之から批評を少しやろう、新島さんの人を動かしたのは無論學問てなし、手腕てなし、唯熱誠だ、至誠だ、涙だ、直に泣いたもんだ、新島の熱誠と涙といへば隨分人を困らせたもんだ、又成る可く公平をと志された、先生に取つて大きかつた處はその國家的觀念だね、日本を世界的に同化し樣とした、東洋の日本てはなく宇內の日本とし樣とした、言ひ換へれば日本を宇內化し樣としたのだ、それから達觀し見る點は、精神界のことは之から儒敎てもいかん、佛敎てもいかん、基督敎てなくてはいかんと見た、斯う見た處は早いもんだね、今日の進歩發展に就いては基督敎てなくてはいかんといふ考なのだ、それてその手段としては同志社といふものを永遠に成り立たさう、何處までも完成しやうといふ目的になつたのだろう、先生が永く生きて居つたら或は出來たのかも知れんが、今は前述の樣な次第誠に氣の毒の至りだ、が此樣な失敗を招いたその原因はといふと、我輩は斯う思つて居る、それは外國人から加勢して貰ひ、外國から金を持つて來れば事業は容易く出來るがお仕舞が困難だ、必ず其處に衝突が來るのは目に見えて居る、之を旨く行かうと思つたとすれば大間違の事だ、新島先生とて滿更知らぬでもあるまい、知つては居ろうが左ればとて又據ない、當時の日本人は基督敎の爲に金など出して呉れるもんじやない、據ないてもあろうが、之が抑も失敗の一原因、それから今一つは先生が病氣の爲てでもあつたろう、事業を急いだ、遠大の計畫をせなかつた、斯う急いだものだから從つて、凡ての人を自己の目的の犧牲としやうと考へた、だから個人の爲に餘り能く謀つてやることはせなかつた、究竟人を遇するに、その人の爲よりは寧ろ此人を同志社の爲に、我目的の爲に働かさうと勉めた、

此點に聊か「私」がある、それ故心服せない人もある、我輩もその一人である、思ふに今少し裕然したところがあつて、同志社の後繼者の爲に親切に圖つてやる點が多かつたら、彼樣に滅茶々々な事にはならなかつたと思ふ、先生の熱誠には服した、が先生の個人的善意を疑うね、服した人もあつたが、服せぬ人も随分あつたのは此點だろう、此邊になると福澤翁の方が偉いかも知れぬ、福澤翁には個人的善意があつた樣に思ふ。

押川方義君と新島先生との間に大議論が起つた話があつたつけ、新島先生の歸國は前にも言つた通り明治七年だが、當時横濱のグランド學校から植村正久、井伊梶之助、熊野雄七、本多庸一、などいふ面々が出た、皆まだ二十歳前後の青年だつたが意氣は甚だ盛なものだ、此連中は、西洋人から金を貰うことはいかん、學校でも教會でも皆獨立せにやならんといふ議論、大した氣㷔で遂に自治教會といふものを立てた、此處等が日本の偉い處だ、支那や朝鮮には見られぬ圖だ、其處て誰を主領に推さうと考へて居る處へ、恰も好し新島先生が米國から歸るといふ噂がある、それは西洋人から彼方の新聞に見えたと聞いたのだ、て新島は一廉の豪傑と噂されて居るから、歸國したら匆々說き付けて教師となつて貰はうと、協議は斯う一決して、新島先生着港の當日に出迎人を出す、それに選ばれて代表者となつたのが即ち押川方義君なのだ、先生が上陸する、早速出迎ひて論鋒を向け逐一事の次第を物語つたが、新島先生は頭を横に振る、我は之から自分で學校を起さうと思ふんだといふ、それは宜いが、でも金は如何するかと聞いたら、金はチヤンと米國から用意して來てある、教師と宣教師に賴むといふ、之を聞くと押川君は呵々と笑つた、第一其樣な事は國家獨立の面目に關する、第二に西洋人が言ふ事を聞くものか、遂には彼等の言ふ事を聞かねばなるまい、その時には甘んじて奴隷となるか、憤つて喧嘩をするか、二つに一つの問題となる、馬鹿な考は止せといふ、すると先生はそれは若い考だ、その樣な考で事業は出來ぬといふ、押川君も憤つて、吃度碌な事は出來ぬと放言して歸つた、

歸つて連中への報告が斯うだ、新島は大馬鹿ものだ、丈夫兒でない、卑劣漢だと、その以後植村などの連中はトンと先生に敬服せぬ事となつた。

聞くところによると、その後押川君が新島先生全盛時代に先生に逢つた相だ、すると先生押川の肩を叩いて曰くだ、君と曾て大議論をしたが、如何だ、君は當時甚く僕を罵つたが、それでも同志社は結句旨く行くじやないかと、押川君は笑つて結構です、兎に角祝しますと言つたきりの相だが、腹の中には潜かに、今に見ろと思つて居たといふことだ、今日になるとそれが矢張り先見の明てあつたらしい。（談話筆記、末段押川氏對新島氏の議論は余談として聞き得たる所なれども興ある事に思ひ附記す）

本月は材料豐富、頁數增加の爲め、**海內思潮**より已に組み上りたるもの五六頁を削減したり讀者乞ふ之を諒せよ（編者しるす）



米國戰爭準備論

『東京朝日新聞』

大西洋大艦隊の一部が既に太平洋に向つて廻航し始めたる今日に於て、紐育に於ける同業各紙は猶頻りにロオズヱルト大統領の此擧の是非如何を論評せり。而して共和黨の新聞紙にして之を非とするもの有ると同時に、合衆黨の新聞紙にして大に之を是とするもの有り。此に於て世間一般は此問題が米國の黨派問題より一進して國家問題となりたるを言ひ、ますます其の論評に耳目を聚めつゝあり。請ふ昨日及び一昨日の本紙の紐育特電を看よ。吾人も此問題が我日本に關係する限りの範圍內に於て、更に一言を禁ずる能はざるを覺ゆ。しかも我特電の報ずる所に據れば、紐育同業者の想像の一端は、既に廻航を以て日本に對する開戰の準備とするまでに及べる由なるが、之に就ては吾人は只一笑するの外なし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯く言ふは或は過言なるやも知る可らずと雖も、吾人がロオズエルト大統領を信ずるは、寧ろ合衆國民に優る所あり、而して開戰準備といふ事に對し、此方よりして敢て否認せんと欲するものなり。たとひ臆說の如く眞に開戰準備あるにせよ、日本が其相手とならずば、則ち戰爭の起らざる可きや必せり。此見地よりして吾人は更に進んで米國民の安心を請はんと欲するものなり。

然り而して大西洋廻航問題が黨派問題より一進して國家問題となれりといふに關しても、吾人は猶之を信ずることを猶豫せざらんと欲すといへども能はざるなり。合衆黨の新聞紙が廻航に贊成すと聞くを以て、持にハアスト君の新聞などが其の社主の署名を以て盛んに日本壓倒論を唱道すと聞くを以て、却つて其の黨派臭味の紛々たるを覺ゆ。吾人の見る所を以てすれば、艦隊の太平洋廻航は巧にハアスト君等に逆さまに利用せられつゝあるなり。本來廻航は廻航なり、海軍政策は海軍政策なり、帝國主義は帝國主義なり、全く米國の對日本問題と相渉らず。然るを合衆黨は、殊に其の一派たるハアスト君等は、廻航の事の決したるを見て、以て奇貨居く可しと爲し、附會して日本壓倒論を唱へ、太平洋沿岸の人心を動かして、傍より政治的人望を寄はんとす、而して囂々然として一種の說を披露す。吾人は只その說の黨派的なるを見るのみ、黨派臭の高きを感ずるのみ。然れども論者の心をして單に黨派的ならしむるにせよ、而して其主張をして爲にする所あるに出でしむるにせよ、日本を誣ひて野蠻國となし、只米國に對して開戰の好機を窺ふのものと推斷するに至りては、吾人寧ろ迷惑千萬を感ぜざるを得んや。今の世界列國中に於て日本は恐らくは戰爭を忌むものゝ筆頭なる可し。ロオズエルト大統領善く之を知る。タフト陸軍卿善く之を知る、ライト前大使善く之を知る。而して紐育同業者中亦善く之を知る者あり。乃ちハアスト君の如きも全く之を知らざるに非ざるべきに、猶且つ去十五日の其公表に係るが如き論あり。政治的人望を一時に僥倖せんとする黨派心の沙汰ならば其れ迄なれど、然らずんば則ち吾人は其講究の除りに淺薄なるを憫まずんばあらざるなり。試みに問はん、移民問題の將來は遂に果して戰爭を要すべきものなる乎、東西文明は徹頭徹尾不調和なる乎、而して五十年前のペルリ提督の使命は果して如何なるものなりし乎。又更に試みに問はん、我々日本人は米國を以て我日本を侵略せんとするものと爲し、布哇を併せたるが如くに我澎湖を併せんとするものと爲し、比律賓を取りたるが如くに我九州を取らんとするものと爲し、今日の米國を視ること恰も往日の露國を視るが如くして可なる乎。今日の日本を以て布哇及比律賓を窺窬すと爲すは、恰も今日の北米合衆國を以て臺灣及九州を窺窬すと爲すの類ならんのみ。愚も亦甚し。勿論、日米の國際は相互的なり。而も其相互的は斷じて相互的侵略を意味するが如くに野蠻なる可からざるなり、而して文明的に相互的なる可し、道義的に相互的なる可し。此の如き間柄なるに拘らず、猶且つ戰爭の準備あらば、其準備は猶我茨城縣下の大演習の準備の如きものならんのみ。米國の同業者中我大演習の準備を視て、以て日米開戰の準備と爲す者なくんば幸甚し。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文藝雜誌 新小說

●拾壹月號　拾貳年拾壹卷

思潮

自然主義論

文藝上に於ける自然派及び自然主義の意義……谷本梨庵
自然主義の理論及び技巧……片山正雄
自然主義論……金子筑水
文學上の自然主義……馬場孤蝶
自然主義……上田敏

小說

再會……川上眉山
愚夫……三津木春影
窒扶斯……昇曙夢
その曉……佐藤露英
夜露……田村松魚
男爵……太田宙花
神通橋……久日光
餞別……故谷活東

●大江幸若舞……高野斑山
▲紀和橫斷……本多嘯月
●かしこき女……泉鏡花
▲かつら影……高崎春月
●米人の結婚前後……佐藤迷羊
▲新俳優の凋落……伊原青々園
●舞臺のイプセン劇……中村表雨
▲名優ビヤボントリー……松居松葉
●明治座の一番目……山岸荷葉
▲槭楓雜話……前田曙山

▲ロマンチックの戀愛觀……登張竹風
●文壇消涵錄……後藤宙外
▲金魚……小川正直氏談●女子の躾け方……矢島揖子女史▲其他各欄多趣

繪畫
表紙（川村清雄）口繪（小林万吾）
口繪（田代曉舟）口繪（片山春帆）

實價貳拾五錢●郵稅二錢五厘●十二冊前金三圓拾貳錢
六冊前金壹圓五十九錢

東京市　春陽堂　日本橋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によ り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ほとゝぎす

拾壹卷貳號

○十一月一日發行○本號に限り一部定價金拾八錢郵税金壹錢
○東京市麴町區富士見町四丁目八番地俳書堂雜誌部

●魚徳（小説）……坂本四方太

魚徳は肴屋だ。息子がよい男でせつせと稼いで居る間は店が繁昌する。親爺は腮の掛金を外して朝から晝寢をして居る。金が湛ると息子は道樂を始める。親爺は肴の切り樣が下手で店が急にさびれる。漸く息子をつれて歸る。息子は又稼ぐ。店が又繁昌する。親爺は又掛金を外す。又飛出す。又さびれる。といふ趣向なり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

○能樂倶樂部演能會規定大要

○一個年中八回夕刻より靖國神社能樂堂に於て開演す
○當演能會は普通の例によらず毎回二三番宛撰拔きの番組にて各流の頭領株更番を以て出勤せらる
○會員は定席と個人の二種類に分ち四回分又は八回分宛左の觀覽料を前金にて申受く、當日臨時の觀覽は左の下欄による

席の種類	四回前金	八回前金	臨時一回限
○松の席(華族に限る)	拾壹圓	貳拾圓	參圓五拾錢
○竹の席	拾壹圓	貳拾圓	參圓五拾錢
○菊の席	八圓五拾錢	拾六圓	貳圓五拾錢
○蘭の席	五圓五拾錢	拾圓	壹圓五拾錢
○一級席(一人に付)	壹圓六拾錢	參圓	五拾錢
○二級席(同上)	壹圓貳拾錢	貳圓	四拾錢

但定席は敷物火鉢も催主持とし個人及臨時は自辨とす
○中途より加入の分は相當の割引を爲す
○入會は何時にても能樂倶樂部へ申込まるべく又開演當日能樂堂玄關にても其申込を受く
○學生に限り別に席を設け一人貳拾錢にて觀覽に供す
○十一月演能會は二十日午後四時半開會番組左の如し
頼政(櫻間伴馬)鳥追船(梅若萬三郎)紅葉狩(喜多六平太)外狂言二番

ホトヽギス第一卷

定價金壹圓
郵稅五錢

松山にて發行したる分(自第一號至二十號)合本壹册
右再版豫約發行せし處猶殘部あり注文に應ず活氣あり覇氣ある少年時代のホトヽギスと文壇一方の重鎭たる今のホトヽギスとを併せ見るも亦た興深かるべし

追て振替貯金にて御拂込の際は登記料貳錢御加算の事

東京市麴町區富士見町四丁目八番地
俳書堂雜誌部
(振替貯金二二五〇番)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

人性の研究

文學博士 元良勇次郎先生序
文學士 森巻吉先生序
神田尤京先生著

全一冊 定價金七拾錢 郵稅八錢

由來人性の研究は大問題なり、社會百般の活動と經國濟家の妙諦とは一に此研究を待つて知られざる可らざるは勿論、如斯は曲學阿世の徒輩が到底企求し得ざる所なり、著者元來乾坤一布衣、自ら終世を賭して此種の研究に從事せんとし今や遠く海外にあり。此に其一着歩として男女兩性に關する思索の結果を發表す即ち著者が抱懷せる**戀愛哲學**の概況なり、ショーペンハウエル、プラトーを品騭し、生物學心理學進化論社會學等に立脚して自家の戀愛觀を說き男女青年學生に對する現代教育法を闢說せり、その如何に無位無官の著者が**忌憚なく臆面なく**人の謂ひ得ざる所も說破し斷乎學者の體面を維持主張せるかは、思ふに讀者諸君が意想の外ならん。

發行所 東京市本郷六丁目廿三番地 振替貯金口座番號三八六二號 岡崎屋書店

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



茗荷畠

眞山青果

一

その前の晩、田住生が訪ねて來た。一昨年の暮に亡つた湯村の弟六郎の親友である。今度福岡大學へ行く途中とあつて立寄つた。此間の洪水で鐵道が不通ゆゑ神戸までは汽船にすると云ふ。白絣のあらい浴衣に、黑の帶、新しい瀧縞の袴をシャンと穿いて居た。お國風に衞さん〳〵と七つも違ふ湯村の名を呼んで居た。

「六郎さんが壯健ですと、今年は一緒に大學へ來るんでした。一昨日の晩停車場でお母樣が然う云つて泣かれました。」と、坐ると行也、その事を云出す。

「然うです。」と、湯村は答へた。

「この人は矢張り二高出身で、六郎さんとも友達、東京の法科へ今度來たのです。」と云つて、一緒に來

た小村と云ふ學生を紹介した。先きては會つた事があると云ふが、湯村は飽迄初對面に構いた。丁度、湯からムシクシャして居る所ゆゑ、日比谷見物に行くと云ふ二人を無理に引留めてビイルにした。トマトに鎌倉ハム、都燒の角罐も切らせた。

酒がやゝ荒んで來た頃、その小村は急に改つた調子で、「貴方に伺つたら解るでせう。全體ラブつてどんなものでせう。」と問ふ。好くある事で、大抵の人はこの問題を藝術家の所へ持込んで來る――何も藝術家のみに解せらるゝ問題と思つてる譯でもあるまいが。尙ほ云つて置くが、湯村衞はK――氏の門生で近頃世に知られた小説家である。今年三十になるが未だ獨り者、妹夫婦を相手に暮して居る。

「戀は戀さ、何んだつてそんな事を聞くんです。」と、湯村は瘦せた肩を聳てた。

「然し、何か變つた御意見があるでせうと思ひまして。」

「別に無いね、或る男と或る女と二人集つて、從來より更に複雜な、そして美しさうな生活を見出さうと勉める時、他はこれを戀と云ひます。詰り勉めて見るだけでさ。」と投出すやうに云つて、オリイントの脂をペッと袖へ吐く。

「そんな單純なものですか。」

「單純も何も、戀は苦しく觸れべき事實、興味をもつて論ずる問題ぢやない。」

「でも、それだけぢや滿足出來ない。」と小村もツイ深入りした。

「滿足出來ない？」と、小さいが光る目で見て、「一體そんな事を云つて、君は戀した經驗があるか。」と、

湯村は食指(ひとさしゆび)を出して小村を指した。

田住の方が却つて恐縮して、ヘッと頸(くび)をちゞめて友達の足の裏を突いた。

小村は眞面目に、「は、有ります、尤もあれが眞の戀(ラブ)と云ふものか何うか、そこは分りませんが。」と云ふ。

「何うした、別れたらう。」

「え、別れました。」

「君は？」と今度は田住を指す。

「僕ア有りません。」と田住は袴に手を入れて堅く坐つて居る。

「何故別れたんだ、小村君。」

「さ、兩親の承諾しないのも理由の一つでした、それに。」と言終らぬ中から、

「憎いだらう、女が憎いだらう。」と、湯村は自分の言葉ばかりサッサと搬(はこ)ぶ。

「いゝえ、別に憎いたア思ひません、事情を聞きましたもの。餘儀ない譯なんです。」

湯村は頭を前後に振りながら、「女の云ふ事情なんて的(あて)になるものか。」と、ても思出しては手酌でガブ〳〵呷(あふ)つて居る。

「そんな事ア有りません、僕は今でもその女を信じて居ますもの。」

突然(だしぬけ)に、「君、寢たかい。」と問ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「決してそんな事。」と、小村は眞赤な顏して不興氣に口を閉ぢた。
「駄目だよ、矢張り物語か詩にある戀をして居るんだ。僕もやつた。しかもツイ近頃の事よ。そして別れた、同じく事情ありさ。見たらう君、新聞に出て居たよ、湯村は某女學生に戀して、懊惱煩悶の極、小說が書けないんだつて、あれさ。」
「國民新聞に有りました。」と田住が云ふ。「本當の事なんですか。」
「本當とも、今てこそ笑ひ事だが、當時はこれて眞劍さ。いや、眞劍だと思つたんだ。何しろ詩にある戀を現實にしやうと思ふ馬鹿だからね。」
「然し貴方の云ふやうな、そんな冷たい冷かなものばかりでも無いでせう。」
「駄目だ、君等は未だ若いんだから。」
「然うでせうかね。」と二人は押しても爭は無い。今來たシチウをせつせと強い胃袋へ詰込んで居た。

二

湯村はこの日、朝ッから癇が立つて、妹ばかり叱つて居た。鹽鮭の鹽加減、座敷の掃除、銅壺に湯を斷らしたの、一々癪に觸る。繻袢の洗濯を忘れて居たのては、妹が泣出すほど叱り付けてやつた。
「馬鹿、不親切極る、何を着れば好いんだ。如何に田舍者だつて、それ位の注意が出來んで何うなる。」と散々毒づいて見たが、妹は病上りの蒼い顏して默つて俯向いてばかり居るので、終には、「こんな事ぢや所詮駄目だ、下女を一人傭はう、幸ひ先生から話がある、然うすりやお前達はお客樣になつて　三度

々々あげ膳て喰はれる。」とまて突込んだ。これだけはと思つて居たのに、到頭口に出して了つた。果して妹はオロ〳〵聲て謝る。氣の付かない所は改めるから、今日の所は勘辨して下さい、「今下女など置かれては、私共お氣の毒て、御厄介になつて居られません。」と疊へ手をついてシク〳〵泣く。でも湯村は、「駄目だ〳〵、そんな不親切な兄弟の世話になるより、金て傭つた他人の方が幾ら好いか知れない。」と云ひ〳〵書齋へ引込んだ。妹が襖越しに切りと謝るのに返辭も爲ない。

　妹婿が商法上の失敗から、夫婦して湯村の家へ寄つてから最う三月近くになる。氣の小さい二人は、「濟まない〳〵。」と口癖に云つては居るが、さて恰好な仕事口も無いので、兄の筆耕をしたり、走使などしてブラ〳〵日を送つて居る。常の湯村はたゞ應揚に、「何有、喰べる位の事なら何時まで居ても好い、ユックリ勤口を探すさ。」と然う云つて居る。妹と云つてもこれは早くから里子に行つて居て、里子流れに先方へ取られたのを、ツイ四年前に返つて來たのゆゑ、自然湯村との情合もうすい。敎育も受けず、生れたまゝに育つて來たのだ。婿はもと銀行員の頃、伯母の世話て一所にしたのだ。生れは東京の者てある。今朝仕事口を探しに家を出た限未だ歸つて來ない。下町に親戚があるから、大方そこへ泊る氣かも知れぬ。

　まづい晩飯をすまして、湯村は獨り椽端に寢轉んて居た。仕事の机へ向ふ氣も無い。酒屋と魚屋は月末の勘定を延して居る事ゆゑ、是非書かなければ約束の五日の間に合はぬとは思ふが、それでも筆が取れない。書き掛けの分なと仕上げねばならぬのだが、それも厭てある。遊びに行く所をとも思つたが、面

白い話のありさうな所も無い。K—先生からは絶交狀が來て居る。辰馬が家を持つたと聞いたが、何れあれも今度の絶交一件に關連して居るだらうから、尋ねて行くのも變なものだ。それに、第一、まだ宿所の通知も無い。

K—先生に絶交狀を附けられたのは最う度々の事で、他に話しても、「又てすか。」と笑はれる。感情の强い人ゆゑ、些いとした事で騷ぎ上げるが、直る事も直ぐ直る。十日か十五日も遠かつて居ると、直ぐ迎の人か、手紙が來る。この前、後の月の晩、酒の上から同門の誰彼を捉へて、ひどい暴言を浴せかけた際も、その時は大した立腹であつたが、ものゝ一月と先生の强情は續かなかつた。今度だつて數は知れて居る。事柄が事柄だ。根も葉も無い陰口が新聞へ麗々しく出たので、それを湯村の惡戯と怒つたゞけだ。日を腐らした上、此方から謝つて行けば何の事なく收るに相違ない。そして又、些と酒が廻つて來ると湯村の手を握つて、「憎い奴だ、君のやうな面憎い男は無い。今度こそ〳〵とは思ふが、別れて見れば寂しい、何うしても別れる事か出來ぬ。君とは全く腐れ緣と云ふんだらうね。」と斯う云ふのも見え透いてる。無論氣にする程の事ては無い。

然し、とも湯村は思つた。現に二十三日の晩、最後に會つた時でも別に變つた樣子は無く、常の如く快く飮んで別れたのに、踵なぐりに十日と經たぬ昨日、たゞあの新聞記事だけて絶交するとは可笑しい。何か無ければならぬ、と考へた。自分の態度の餘り强情なのも癪に觸つたらう、事を好んで好く面倒事を引起すのも癪に觸つたらう、近頃遠々しくして居るのも癪に觸つたらう、と思つた。然しそれだけて

は足らぬ。何かある、何かあると切りに考へた。

湯村はボンヤリ空を見上げた。行く夏の夕、靜けさは水のやうである。

三

湯村は可也醉つて居た。そこに出たビイル七本の中、五本は彼が飲んだのだ。痩せた頬殺げした顔は蒼く、目は鋭かつた。烟管へつめる左の指がビク〳〵顫つて居る。

何の機會からか、話は信仰問題に落ちた。尤も二人共に基督教へ籍を置くゆゑ、自然そこへ行つたのだらう。でも二人共酒は飲む、教會を離れて信仰が得られないものなら、宗教に背いても好いなど云つてる。

湯村は急に力を籠めて、「今の世に最う信仰は無い、神の權威は地に墜ちた。有るものは唯理解だけ、理解を離れては神の存在すら信ずる事の出來ぬ、淺間しい時代だ。」と云出した。

二人の學生は正直に顔を見合はした。

湯村は續けて云ふ。「夫婦だ、親友だ、戀人だと云つても皆然うだ。互に信じて胸と胸とが觸れ合つて、あやしい温味がその間に交流するなんて云つたのは、ズット〳〵以前の事さ、今の世は詩や物語から分離して居る、唯相互の心を理解し合はふとする外に何の愛情も無い。今の世には唯むごい冷かな目の愛だけが殘つて居るんだ。」と。

「然う考へたら、然し、人生は寂しいものでせうね。」と小村が云ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「寂しいとも、無論寂しい。」

「そんなにして迄、寂しがる必要がありますか、損な事です。」

「損得で論じやしない、これが人生の實相さ。吾々現代の人と生れたのが不幸なんさ。」と聲が憤つてる。

「そんなら、強いても信仰を求めたら何うでせう。或る場合には築上げるんですね、無信仰の時代なんて、そんな事を考へたゞけても恐しいですね。」

「築上る？ そりや好いかも知れん。然し築上げたいにも築けん人がある。僕なぞもその一人だ。君等のやうに降誕も奇蹟も更生も。何の苦も無く信じ得る人は幸福だよ、そりや幸福だよ。」と然う云つて、ランプの心をグット捩上げた。

小村も流石にムッとした。「然し僕等は降誕や奇蹟を離れても基督を信ずる事が出來ます。主の生涯が既に絶大な詩です、宗教です。」

「それが基督の人格美と云ふんだらう、度々聞く言葉だ。詰り理解ぢやないか、確實を信ずると云ふ事は既に信仰の範圍を脱して居る。」とグイ／＼酒を呷る。

「では宗教を原始時代に復さうと云ふんだ。」

「無論、總ゆる事が原始に復らんさア駄目だ。」と叫んだ。

「それぢや、どこに吾々の安心を得ませう。」と田住は謙遜つた聲で尋ねた。

「安心なんか現代にあるものか、新しき幸福とか知られざる神とか云ふものが、西洋詩人の理想通り見

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

付かりや結構だが、さも無い間の人間はたゞ動揺あるのみさ。冷たい〳〵波に揺られ〳〵て踠き苦しむのみさ。」

「迷信は何うです。」

「迷信も好い、けど僕等にや最う迷信も得られまい。」

「何う云ふもんでせう。詰り近代科學の影響なんでせうか。」

「根本は無論それだらう。人間の心に恐異心が無くなつた、見えざる目を恐れると云ふ事が無くなつた。」

「然うですかね。」

「雨に驚き、風に驚く頃の人間でなきア眞の宗教は有ち得ない。驚くと云ふ大なる力が人間に眞の信仰を與へる。詰り人間は餘り自然に馴れ過ぎた。」

この續きの話が長い間取交された。喋るのは湯村一人、二人は默つて聞くより外はなかつた。

「何うも有益な話を伺つて、非常に啓發する所がありました。」と二人の學生は厚く禮を述べて歸つた。

二人が歸つた後。湯村は妹に蚊帳を釣らせて寢たが、今の話に目が冴えて何うしても眠られない、酒も醒めた。

信仰と理解、何うも大なる問題らしい。慥かに小說になる。無信仰の現代に產れて、信仰に憧れる主人公は面白い、屹度書ける。辰馬が喜びさうな小說が出來やう。尤もこの事に付いては是迄深く考へもしなかつた。今日偶と、偶然と云はゞ偶然、口を衝いて出た言葉だ。湯村の癖で、ある時、偶然にある

問題に觸れると、話の中に皮がつき肉がついて動かす可らざる問題に生長する。今夜も慥かにそれだ。

今の議論を實際に當嵌めて見た。戀、交友、夫婦みなよく合理する。それと共に、先生に對する事件、彼女に對する事件、みな解決される。嬉しくて〳〵ならなかつた。

翌朝目が覺めると、辰馬から移轉の通知が來て居た。もう耐らなくなつて、直ぐ車を命じて家を乘出した。

四

高田馬場四百何番地。あの湯屋より少し早稻田寄りの北側と細かく書いてあるので辰馬の家は直ぐ知れた。仕立もの所、田中と標札が出て居る。車を下りた。

辰馬は湯村と同じ門生である。長年そこの玄關に居ただけ先生との因緣も深かく、先づ外樣と譜代ぐらゐの違はある。瘦せた、眉毛の恐しく太い、目の沈んだ男で、比喩と謎だけで小說を書かうと焦つて居る。起きてる事も事實なら、夢の生涯も事實に相違ないとは、その好く云ふ所である。未だ纏つた作はないが、いづれその內に書く〳〵と云つて居る。筆で書くより魂で書きたいと云つてる。例の朝寢、今起きた所と見えて、晝飯の膳に牛乳がついて居た。一閑張の机の上には「戀の挿話」に「聖僧の罪。」ソラの小說が二冊乘つて居た。

「相變らずだね、關はずやり給へ。」と、湯村は掾の照返しを恐れて、座敷の眞中へと坐つた。

「ては失敬するよ。」と土瓶をかけた箱火鉢を客へあてがつて、自分は食事にかゝる。兎のやうに前歯て

チャキ〳〵ものを嚙むのがその人の癖。

「實は今日、小說の趣向を相談しに來たんだ、批評を聞かうと思つて。」

「又書くのかね、好く續く事だね。」と箸を膝に置いて云ふ。

「書かんきア喰はれん。」

湯村は昨夜田住に話した事を委しく說明した上、「ねえ君、吾々は不幸にして無信仰の時代に生れたんだ。不幸な時代だよ、人が人を信じないで何うなるだらう。不安、懷疑、實に恐しくなるね。夫が妻をを信ぜず、友が友を疑ひ、親は子を疑ふ時代だ。考へたゞけでも恐ろしい。僕はこの恐怖を書いて見やうと思ふんだ。何かしら安心のサジエシヨンは無いかと悶え苦む現代の兒(マイ、エゐス、チャイルド)を主人公とした小說を書きたいと思ふんだ。」

「さア。」と辰馬の答はこれだけであつた。

「然し君は何う思ふね。信ずると云ふ事の無い世の中を不安とも不幸とも思はんかね。」

「思つても好い。然し、自意識の發達した我々時代には餘儀ない傾向だらう。」とサラ〳〵と茶漬を掻込む。

「不安は無いかね、煩悶は無いかね。」と湯村の調子は急込(せつこ)んで來た。

「然し自意識が發達すると云ふ事は他人の間から自己を獨立させると云ふ事になる。囚れた自分を活さうと云ふ事にもなる。」と膳を押遣つて、心靜かに落着いて煙草を吹(ふか)して居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「又例のレクチユアだ、僕は講義を聞くんぢや無い。」
「だつて然うだもの。吾々の時代が既に〳〵信仰と遠かつてる事は何人も等しく認めて居る事だもの。」
「それだけか。」
「それだけとは？」
「然うさ、君は唯然う他の耳から理解してるんだ、僕は自分の心に湧上つて、自分の口から云ふんだ。」
「それが何う違ふだらう。」
「それ、それだ、その口の冷かな事を見給へな。」
「然し不思議だね、自然も自然極端な純自然、第一性論を主張する君としては大部變つた議論だね。」
「君は何故何う熱が無いんだね。」
「君こそだ、思想と實在とを混同して居る傾があるもの。」
「最う好いよ、最う分つた、君は何事にも驚かない人なんだ。今に作品としてお目に掛けやう。」と湯村は話を切つた。大槪はこの言葉に終る。どんな問題を提出しても、ツイぞ一度辰馬は血を騷がせた事が無い。冷かに分解されるか、批判されるかの二つてある。その時は此方ても、「書いて見せやう。」と云ふ一語を放つのだ。體力も精力も弱い辰馬は、未だ一部と纏つたものを書いた事がない。それは自分にも殘念がつて居る弱點てある。湯村は他の弱點をのがさぬ男てある。
落着いて茶を飮む辰馬は又云ふ。「時に君、又先生に絕交されたつてね。」

「された、あゝ、爲れたよ。」
「何う云ふ心なんだね。」
「僕ア知るものか、爲れた方なんだもの。陰口を利いたとか利かぬとか云ふ、言譯するにも爲樣の無い馬鹿々々しい問題だから、僕は打遣つて置く事に決めた。」
「僕昨日初めてその話を聞いてね、君の所へ行かうとも思つて居た所だ。」
「御免蒙らう。昨日まで親友て候の何のと云つて居ながら、詰らない愚にも付かぬ瑣小事で直ぐ絶交騷ぎだ。成程、僕は我が儘だつたよ、他から見たら師弟の間ぢやないと思ふ程の我が儘を働いたに相違ない。だが信じられてるとばかり思ふからね、少々の事は許されるものと思つて居た。」
「間違だね、藝術家に他を信ずるなぞと云ふ事があるものか。」
「何故〳〵。」
「皆、自意識を持つてるもの。」
「それて好く君は不滿がないね。信じられない人間の中に活きて居て何とも思はんかね。」
「爲方がないね、時代だもの。」
「時代なら、極めて惡しき時代だ。」
「ぢや何んだね、君の今話した小說の趣向と云ふのも、詰りその絶交一件から思付いたんだ。」と、沈んだ大きな目て湯村を見る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「僕は君と違ふ。信のない世界には生きられない。理解だけぢや到底満足されない。第一寂しくつて耐らない。」

「常の君のやうにも無い、今日は存外弱い事を云ふね。」

「弱いんぢや無い。僕ア今まで世間を謬つて見て居た。少くとも僕だけは他に信じられると思ふから、思ふ存分に我儘もやり、強情も張つて居たんだ。馬鹿だつたね。」

二人はやゝ暫く默つて居た。辰馬は何服も〱煙草ばかり吸つて居た。湯村はソラの小説を取つて表紙を啓けたり、廣告を見たり、妙に落付かない樣子を見せて居た。辰馬は終の灰殼を火鉢の緣へ強く叩いて、

「そして、何うしたね、龍子さんのその後は。」と、眩しいやうな目を見せる。

「何うするもんか、あの儘さ。」

「時々は思出すだらう。」

「誰が？」と云ふ湯村の聲は險しかつた。

又言葉が切れる。表の通りを、鈍い調子の廣告樂隊が通り過ぎた。

「ぢや僕失敬しやう。」と立上る。

「何故？まだ好いだらう、久振りだ大に話さうよ。」

「またの時だ、僕は歸つて書くんだ。」

「羨しい精力だな。」と眞實羨しさうに見上た。
「ぢや君、先生へも好しくね。」
「何うしたんだ本當に絕交する氣か。」
「するんぢやない、されたんだ。僕は謬つて居たよ。ね、人は信ずる者だとばかり思つて居た。」
「信じなくとも好いぢやないか、理解でも交友は續き得るよ。」
「僕は理解の交友は欲しくない、誰でも好い、これから後は信じられる人を求めるんだ。」と冷に云つて表へ出た。
思ひ切悪るさうに辰馬は門口まで送つて來た。
「君、馬鹿に通り一返になつたね。」と車へ乘るのを見て居る。
「なつたんぢや無い、されたんだ。失敬。」と湯村は云つた。

五

茗荷畠を突切つて、大隈伯の邸について曲ると、新開の早稻田鶴卷町になる、たしか角は書籍店と思つた。
「旦那、市ヶ谷へ廻りますか。」と年寄りの車夫はそこに立停つて後を振向いた。
「いや家だ――急いで。」と湯村は車上にあせつた。直ぐ歸つて創作の机へ向ふ積りなのである。なあに負けるものか、書いて見せる、書いて見せると心が叫んで居た。

二三日續いての雨、上るには上つたが、夜上りだから長くはあるまいと人は云ふ。カッと晴れた秋日和の午後、二時は過ぎて居たらう、濃い蒼空にはカッキリ白い雲が雲母(きらゝ)のやうに輝いて居る。九月の日は明るかつた。夏よりも明るい。然しジッと物の色に滲入(しみい)る光では無く、輕るく物の表に浮ついて動く光である。向ふから高下駄を穿いて、雨傘をさして職工らしい男が來る。その番傘がキラ／＼と目に閃(きらめ)いた。鉛に喰はれた蒼い顏であつた。

この町の目貫、唐物店と洋服屋の四つ角まで來ると、長い町並が山伏町近くまで眞直に見えた。大學が休暇の間は町の姿まで怠けて赭色に長く見える。若い望に充ちた聲や叫び聲は何所の隅にも聞えない。自轉車、人力車、彩色(いろどり)した配達車、そんなものは一輛も見當らぬ。通る人も／＼皆歩調(あしどり)をゆるめて、日當りを選んで、秋蠅の力無く歩んで居る。下宿屋は二階中を開(あけ)ひろげて蚊帳や蒲團を乾して居る。店の裝飾に嶄新をほこる唐物屋や洋酒店の中には半ば大戸を下ろした所も見える。寫見(すがたみ)を澤山かけ並べた理髮店には鋏の音が閑さうに見えた。派手な誇張な看板に唯日が明るく射して居る。そして、檐も柱も濃い色のペンキで塗上げた支那料理屋や、下町の活々した街から追結(おひこく)られて來たと思ふ寂れた古本屋や、外に通ふ亭主の手助する薄資本(うすもとで)の烟草屋やが、カッ／＼店を張つて居た。

ロゼッチかの詩に「晝の女王座」と云ふがある。札場の若い男が桝(ボックス)に長々と寢て、西瓜の皮をペン小刀(ナイフ)でむいて居る詩であつた。何の關係も無い事だがその詩を思出した。そして、「寂れた沈着の無い町だ。」とこの町を見た。「魂が拔けて居る。」とも思つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋の光を總身に浴びて、年季らしい小僧が胸を張つて眞直に來る。固く乾いた雨上りの道を素足で踏んで居る、脛の黑い兒であつた。口をキッﾄ結つて居た。腹掛のドンブリには大きな棕梠の塗ブラシを突立て、片手に蒼色のペンキを入れた壺を下げて居た。通違ひざまに沈んだ目で車を見上げて過ぎた。憤を齒から出さぬと云つた意氣込が小兒ながらその顏に見えた。湯村は後から振返つたが、母衣が覆さつてるので無論見えぬ。どんな目付をして後から見たか、恐しく氣になる。見えない陰の目、見えない陰の目。手を握締めたいほど氣がいらつ。

ホッ、ホッと締の無い笛を鳴らして、自働車が過ぎた。湯村の車が右に避けやうとしたその車輪の際どい間をくゞり、重い強い發動器の響を聞かせて、砂埃の無い路を太いゴム輪が眞直に向ふへ馳せた。

「あ、危ねえ。」と車夫の叫んだは十間も距た後である。そして、暫時車を停めて汗を拭いた。車上には輕い服を着た貴婦人が二人、振向きもしない。

「大隈さんのだよ。」と一人の細君が荒物屋から飛出した。

「色が違ふ、三越だよ。」と今一人の細君、これは蓋ものをさげて居た、手を額にかざして見送つた。

湯村は俄と氣が付いて當月の收入を胸の中に算へ上げた。間に合ふだけはある。來月も來々月も書きさへすれば充分に暮は立つ。先生の周旋は無くとも買ひに來る本屋も二三軒はある、先づ大丈夫と思つた。書く、書く、と心に誓つた。ズウデルマンは、「藝術家よ、書け、悟る勿れ。」と云つたと聞いた。自分は遙かに悟り過ぎた、交り過ぎた。默して、そして默して書かなきアならぬ。馴れた机、馴れた窓明

り、默して書かなきアならぬ。空には蒼、土には綠、濃い〳〵色に書上げねばならぬ。

山伏町の通りへ出た。曲り角に大勢人が立つて居た。腰から下のパッとひらいた清國學生が五六人何やら大聲に罵つて居た。

兩側は低い屋根の家が續いて居る。この頃の大水に浸つた家々の牀は、まだ乾かない。夜は燒鳥とおでんやの出る角端の明店の前へ棚を据えて、葉のしなびた朝顏鉢が七つばかり並べてあつた。うりものと假名で貼札してある。蔓が長く〳〵延びて居た。この邊にも人はどよみをつくつて居る。大きな乳房の胸を露はに一人の女が、店頭に壜詰の酒を日に透して見て居た。

「おい、母衣を外してくれ。」と車の上で突然湯村が叫んだ。

「へえ?。」

「母衣を取るんだ。」と叫んだ。

車夫は梶棒を下ろして、オゾ〳〵母衣を後へはねた。

「これで好うがすかい。」

蒼い顏を日に曝らして、帽子も被らぬ湯村はうなづいた。車夫は又梶棒を握つた。そして、又馳出した。むきみやの老爺で、店はお喋りな上さんに任せてある。定七と云ふ、今年五十六になる。酒が好きで好く上さんに隠れて湯村へ來ては盛切酒の振舞になつてる。心臟が惡るいから稼業は今年限りだと云つて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

櫻木町の橋へ出た。丁度、葬式と通り合し、車は橋袂の青物屋の前に止つた。

橋をわたつて長い葬式は明るい日の下をしづ〳〵練つて行く。先手の龍燈は久世山の下にかゝつて居た。白木造りに鋲打の寢輿を十幾人の人夫が擔いだ。萌黄に綠色の襞袍を襲ねた白無垢を見せて、鋲がキラ〳〵と搖れ動く。編笠扮裝の施主が新らしい紋付の肩を揃へて靜かに俯向いて行く。導師、副導師の馬車。その後から會葬の車が幾十臺、みな塗色美しい母衣を下して長く〳〵續いた。

「おい、何所か外を廻つて行けないか。」と湯村は身を乘出して車夫をせめた。

「改代町を廻つちや大變です、何有最少してすよ。」と車夫は動かない。

行列を越して音羽の大通を見た。九丁目から一丁目まで眞直てある。空氣は澄切つて、遠くも近くも總て同じ色に見える。白いものは益々白く、白地の袖が糊ばんて冷たさう。人の唇も手足も脂が切れて美しく乾いて見える、

湯村は袂から卷煙草を出してマッチを擦つた。何本も無駄にした揚句、やつと點いたのをロクにも吸はずに、忙しく河へ投込んだ。前は青物屋てある。市場の荷が未だ着かぬと見えて、店はヒッソリ寂れて居る。それにトマトや西洋瓜や、人の目をひく色濃い夏の果は大方場退けになつて、淡々しい秋の果がポツ〳〵ならべられてある。水に流された梨子を大山に盛つて附木の札を立てゝあつた。

葬式は未だ通り切らぬ。

湯村はたゞ氣をあせつた。久世山の下、音羽の九丁目にはもとの戀人がある。萬一出ては居ないかと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も思つたので。今日ばかりは遇ひたく無い、見たく無い。何時もは何ともなく往來して居たが、今日は不思議なほど心が騷ぐ。自分も諦めて、他とエンゲーヂする事を許した。謂はゞ路傍の人、何うあらうと差支はない筈だが――さて、然うは行かぬ。先方は洋行歸りの會社員、西洋の派出な活々した社交を經て來た男。土産のトランクの中には指環やらブロッチやら露西亞更紗の派手な模樣もあつたと聞く。今ごろは世の榮華に誇り切つた目を上げて新しい戀人の耳に私語いて居ぬとも限らぬ。「昔の事は昔の事。」と男の肩に摑つて居るかも知れぬ。片手を男の肩に置いて、片手に男の髮をまさぐるのが癖てあつた。足を横に投出して、片手てヒタ／＼と乳の邊を叩くのも癖てあつた。人を打つ掌は痛かつた。

「私は忘れません、私は生涯忘れません。」これが別れ際の言葉てあつた。「忘れるな、キット忘れてくれるな。」と湯村は念をついた。

青物屋の葱は日に光つた。燐のやうに光つた。湯村は晒者になつたやうに思つて、額を兩手に抑えた。

葬式は通り過ぎた。

書いて見せる、書いて見せる、と湯村は聲に出して然う云つた。

六

外から入つた家の中は暗かつた。

「お歸りなさい。」と妹は然う云つて出た。

「油井は何所へ行つた、未だ歸らんのか。」と怒つた聲てある。油井は妹婿の名てある。

「何うしたんですか、未だ歸らないで。」と言葉尻が恐れに半分消える。

「何？」 態と問返したのである。

「未だ歸りませんで……。」とそこへ窮屈さうに小さく坐つて、何時も叱られる胸前の揣りを取締て居る。

「あつちへ行け。」と怒鳴つて、足音荒く湯村は書齋へ引込んだ。

原稿紙を出した、硯に墨も流した。途中考へて來た、「信仰」と云ふ題を書いた。手が顫えて居る。世に信じる力は無く、唯理解のみになつたと悟れる人の寂しさ、悶え、それを書く積りなのである。二三行書いたが何うも文章をなさない。三枚書損つた。今度は題を、「見えざる後より」とも、「見えざる目。」とも更めた。矢張り書けなかつた。直く前の井戸傍へ小兒が大勢集つて、何かガヤガヤ喚き初めた。湯村は筆を投出して、ゴロリと寢た。

巻紙を出してスラスラと書く。私は謬つて居た、餘り接近したのは惡るい。絶交は謹んで受ける。そして私は孤獨を守つて飽迄製作に從事する積と書きかけた。K―氏へのである。辰馬へはたゞ短かく、「余は活き得る途ありと信ず。」と筆太に大きく書いた。

風は冷々と吹入つて、襦袢着ぬ肌に寒い。今晴れたかと思ふと直ぐ曇る、まことに沈着の無い空である。庭の松、葉銀杏、吉野檜。遠くては向ふ屋敷の欅、朴の木、柳。庭の隅の秋草まで、見る限りの葉が皆動く。ザワザワと葉裏を見せて皆動く。

「おい。」と湯村は寝ながら叫んだ。熱いお茶が欲しかつたのである。

聞えない。

「おい、おい。」と二三度呼んだが返事がない。ツカ〳〵と立つて臺所の戸を明けた。妹は出窓際に鏡を置いて、身仕舞に氣をやつして、切りと鏡に見惚れて居る、白いものも幾らか付けたやうだ。

「おい、あんなに呼んだに聞えないのか。」と冷たい閾の上に立つた。

「あら。」と妹は最う眞蒼になつて鏡を隠した。

「何をしてる、馬鹿！　おしやれか。」

默つて俯向いてる。

「なんだ、その面で。宿場の飯盛ぢやあるまい、この部屋の態は何んだ。」

二疊の女中部屋の壁際にガラス鏡を飾り、小棚の上には安香油だの百合の花のレッテルの付いた白粉だの、罎に入つた洗粉だのを並べ立てゝ居る。角な食鹽の明壜に眞赤な葡萄酒のやうな髪油も入つて居た。「おしやれ所の身の上か、馬鹿め、自分〳〵の身を考へて見ろ。頭ばかり光らせても何になる、百性め。」と口から出任せに怒鳴つた。妹は蒼くなつてブル〳〵顫えて居る。

「何故自分の身を立てる事を考へない。いかに馬鹿だと云つて、その位の氣が付かないか。」と又怒つた。

「ですから、今日油井も‥‥。」

「何？　ハツキリ云へ！」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妹は泣出した。
「厭な色だ、何んだ。」と湯村は行也その髮油の壜を取つて流しに投付けた。三和土になつてる。ひどい音して粉々に壞れた。
「お兄さん、私惡るかつた……勘忍して……。」と妹はそこの板の間へ突伏した。
「何が惡るいんだ。何が惡るい。」とやたらに激して、白粉壜も洗粉も、みな投付けた。
「貴樣は一體兄を兄と思はない。亭主より外に大事なもの無いんだ。へん、亭主は大事よ。」と咽低く嘲笑つて又書齋へ戻つた。
　原稿に向つたが氣が興つて書けない。妹の泣聲がシク〳〵聞える。
「今日は駄目だ。」と獨言云つて、シャボンを手に湯へ出掛けたのは餘程過ぎてゞある。外はもう暗かつた。
　夕方、油井は歸つて來た。昨日來淺草の親戚へ泊つて、方々歩いて居たが、思はしい口も見當らない。兜町の仲買屋に書記が入用との話ゆゑ、行つて見ると最う新しい人が入つて居た。「運の惡るい時は何所まで行つても駄目です。」と悄げ切つて居る。實體な氣の弱い男で、借金の言譯にさへ始終まごついて居る。
「爲方がないさ、まア緩り探す事です。」と湯村は應揚に云つた。
「でも、何時〳〵まで斯うして御厄介になるのもお氣の毒でして、どんな所でも口さへあれば勤めて見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る氣で居ます。」

「何有、關はんさ、お互の事だもの。」

「然し夫婦連れてすからな、それに、御覽の通り氣の廻らん奴ですから、無、お氣に合はぬ事もありませうと思つてな。」

「だつて、僕にや妹だもの。」と笑つた。然し目は不安さうに相手をはかつて居た。

膳拵へして妹が持つて來た。二人はお先に濟ましたからとて、湯村だけ膳へ向つた。ランプの心を高も上げた。

妹は最う先刻の事をケロリ忘れたやうに、夫の傍へ坐つて活々した話振である。油井は又途中見て來た色々の話をして聞かせる、下町の物價の高い事、風俗の派手になつた事、三軒が三軒見て來た芝居の木戸留であつた事、秩父縞の月譜賣が却つて格安の事や何かを話して聞かせる、妹はそれを聞いて何時か一度是非その下町へ連れて行つてくれとせがんで居た。妹は二月前に東京へ來たなり、未だ一度も外に出掛けた事がないのである。

「何れ連れて行くよ、その內には、芝居も見せてやるよ。」と油井は答へた。

「貴方のその內は的にならないから、その內〳〵つて最う二月になりますもの。」と粘つた調子である。

「今度は本當だよ。」

「乾度〳〵、乾度ですよ。」と念を押す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「う、好い〳〵。」と笑つてる。

湯村は箸を投げるやうに置いて、「陸さん。」と呼ぶ。陸三郎は油井の名である。「陸さんは感心だな、これを連れて電車へも乘る氣か。紡績の女工と云はれるよ。」

「ヘツヘツ。」と煙管で頭を掻いて、「でも爲方がアせんもな。」

「好い氣だよね、二人共。」と湯村は書齋へ引込んだ。

七

書くのを思切つて、そこに腹這になつて、新刊書など出して見た。口繪や序文や飛び〳〵に眺めたばかり、身を入れて讀まれさうにもない。痒いのに氣が付いて見ると、足に蚊が留つて居る。厭々しさうに掌打にすると、血が掌に汚れた。妹夫婦は自分の間と定まつた玄關脇へ集つて、ヒソ〳〵聲で話して居る。笑ふ聲も聞える。「あれだ。」と湯村は苦い顏をした。

書架から手擦のした、羊皮表紙の新約全書を引ずり出した。盲目さぐりに開くと、約翰傳の十二章が出た、七節から讀初めたが氣も無く止した。又開けたのは馬太傳の六章、有名な山上の大訓である。小兒の時からの愛讀書ゆゑ、詩を讀む心で讀んだ、唯讀んだ、果ては聲を立て朗讀した。そして、「それ狐に穴あり、鳥に巣あり、されど人の子は枕する所なし。」と云ふ一節まで來ると、われとわが身に聞く聲が次第に亂れて顫えて居る。又續けて讀んだ。

偶と耳を立てると、妹夫婦が何か云爭つて居る。聲を憚つては居るが、間が淺いから手に取るやうに

聞える。
「馬鹿を云へ、何所に遊ぶ錢がある、氣樂な事云つてやがる。」と油井の聲である。
「だつて金てばかり遊ぶんぢやないもの。」
「ては何て遊ぶ、握り拳てか、貝殼てか。」
「知つてるもんか。」
「え、何んて遊ぶよ、敎へてくれよ、些つとは人並に遊んて見たいから。」
「また國に居た事のやうに？」
「然う〳〵、あの時の事云はれると一言も無い。」
「決つてるんだから、病氣だね貴方の。」
「病氣にしちや好い病氣だね、手數がかゝらないて。」
「その氣だもの、呆れて了ふね。」
「ヘッ、この氣か。」と何かおどけた仕方をして見せたらしい、妹はぷッと吹出した。
湯村は忌々しさうに聖書をドシンと襖へ投付けた。
「馬鹿だね、靜かにしろよ、兄さんが勉强してお出なさる。」
二人は又睦しさうに、聲を低めてヒソ〳〵話し初めた。
「何故不可ないんてす、え、何故？」と今度は妹が何かねだつて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「不可ないよ。」

「まア可笑しい、何故だろう。」

油井は默つて新聞でも讀んでるらしい、妹は耳根ッこへ寄つて承知しないらしい。

「だから、何故不可ないんです、東京〳〵と思つて東京へ來て、淺草も見ないなんて、こんな詰らない話は無い。」

「上野を見たから好いだらう。」

「上野だつて博覽會も過ぎて居たもの、私イルミネーションを見たかつた。」

「電燈がドッサリ點くばかりよ。水道町でだッて見られァ。」

「自分ばかり方々歩いて。」

「今に見せるよ、馬車に乘せて、三越で着物を買つて、白ぼたんで指環を買つて、そして奥山の玉乘りを見せやう。」

「馬鹿だね。私は出掛けて見たい。」

それから話は奥山の話になる。山雀の藝當やら、花屋敷の人形やら、珍世界、水族館などと色々出る。妹は肝をゆるめてもう話に醉つて居る。

湯村は蒼い顔して起上つた。そして、三疊に出て行つてそこの襖を開けると、寢轉んで居た妹は飛んで起きて、窮屈さうに坐つた。世間話を二つ三つしたが、油井は「は、は。」と謹んで挨拶して、煙草ば

かり吹いて居る。妹は勿論一言も云はぬ。額越に兄の氣色を窺つて見る。

又書齋へ戻つた。

十時頃だつた。湯村は突然、「陸さん、一杯飲みに行かう。」と誘出す。

「は、私は。――兄さん召上るなら麥酒を買つて參りませう。」

「馬鹿な事、お酌が無い。」と家を出た。

水道町のある洋食屋へ入つた。二階へ上つて見ると、客は二組ばかり居た。特に向隅に陣取つたのは清國留學生が七八名、遠い本國の言葉をもつて高聲に喋り散らして居る。

酒はウヰスキイにビール、割て飲むのが湯村の癖である。油井は日本酒の方が勝手だと云つてその方ばかりやつて居た。

湯村の方では打解けた調子で話しかけるが、油井は唯々恐縮して居る。談がトンと興まない。特に女中を提えてキャツ〳〵騷ぎ立てる支那人の傍若無人さに、湯村は眉を皺めてたゞガブ〳〵酒を呷上げて居る。

「兄さん、最う歸りませう。」と油井が云出したのは十二時近くであつた。二組共客は歸つて下ては最う戸を下ろし初めた。

「何所かへ行つて飲直さう。」と湯村の聲は大部もつれて居る。

「何所と云つて、最う遲ござすよ、十二時てすもの。」

「十二時だつて好いさ、神樂坂にや起きてる家がある。」と性急に帽子を取つて立たうとする。

「でも今夜は遲いから。」とモゾ〳〵して居る。

「大に騷がう、わあッと。そして飮むんだ。」

「それに、家でも待つてますしな。」

「それで歸らうと云ふんだな、歸り給へ。」と注ぎさのビールを一息に呷つて、「君は歸る家があるから好い。僕は無い。」と脣に流れる雫を平手でペッと拭いた。

「だつて、兄さん、今から飮んだつて同じ事ですよ、又明日召上がれば好いでせう。」

「僕ア大に話がある。」とそこへ坐込んで動かぬ。

「お話なら伺ひます。」と油井は迷惑して居る女中に目配して倚子へ掛けた。

「君ア女房が可愛いかね。」

「さア、困りましたね。」と頭を搔く。女中がクス〳〵笑出した。

「人間女房が可愛いやうぢや駄目だ。事業のためにや犧牲にする位の意氣込て居るんだね。」

「そりや然うですな。」

「駄目だよ、君は。駄目だ、駄目だ。」と頭をフラ〳〵させる。

「だつて、私があれを出したら兄さんが困るでせう、だから私は我慢して居るんだ。」と笑つた。

「然うだらうな、はゝはゝゝゝ。ぢや、禮を云ふ。禮を云ふ。」

二人はそこを出た。途中でも何度か愚圖るのを無理になだめて、家へ歸ると妹と二人かゝりて寢床へかつぎこんだ。

夢でも見たのか、三十分許りすぎると、湯村目を醒して、「陸さん〳〵。」と呼ぶ。二度も三度も呼ぶ。

ランプを持つて妹が恐る〳〵枕元へ來た。

「何の御用ですか、私致しませう、もうスッカリ醉つて了つて、正體なく眠つて居ます。」

「ときか。」と湯村は爛れた息を吐いた。

「貴樣達は幸福だよ、實に羨しい。然うあるのが本當なんだ。何時までも〳〵然うして暮らせよ。」と云ふ。

妹は何と云つたら好いか分らなかつた。

「手を貸せ、手を。」と恐る〳〵妹の手を固く握つて、振つて、「あゝ一生を然うして送つてくれ。」と離した。

〔完〕

病妻

大塚楠緒子

花柳の巷に踏み入つた男は、一度は受ける事を免がれぬものと見える病毒を、洋太郎も受けて居たと見える、其毒は知らず〳〵に妻の若い清らかな身に喰ひ入つて、一彦を生んでから間もなく、惡性の僂麻質斯が出て、惱み惱んだ袖手は終に兩脚とも利かぬ不自由な體に成つてしまつた、その美しい肉にのみ焦がれて袖子を娶つた洋太郎は、妻の身體が病魔に恣にされて一日一日と動かぬやうに成つてゆくに從ふて、執拗いほど愛して居た愛を一日一日と醒ましてゆくのである。

釜の熱湯に水の滴を注ぐ、滴が滴に續いて絕えぬ時は終に湯は冷たい水に返つて仕舞ふ、水を湯に返す釜の下の火は既に消えて居る、水は猶氷に成るべく此頃では洋太郎は、身の利かぬ妻に構ひつけぬは愚か、手當も追々疎かになつて、愛想づかしの銳い言葉をさへ幷べるやうになつた。

生家の母親は虐待と言つた、今日も洋太郎の留守に朝から來て一日袖子を說いた、

『女房が病氣に成つて役に立たなく成つたからと言つて、虐待する良人が何處にある、此樣に洋太郎さんに虐待されてゐるやうより、いつそ生家へお歸りなさい、隱居所に來てゐさへすれば誰れに遠慮もありはしない、お前は何故然う分別がつくまい。』

と言はれる。

「母樣は然う仰しやるけれども、あの一彥といふものを置いて……可愛いあの兒を置いて何うして歸られるでせう…………」

と袖子は兒のことを言ひ出して涙に搔きくれると、母親も强ひてとは言ひ兼ねて、家を出た時は何うしても娘を說き付けて引き取る事にして來やう、今日こそは、と思つて來た其今日もぐず〳〵に要領を得ずして歸宅つて仕舞つた。

嫁入の時の其儘、まだ褪めもせぬ鏡臺に懸つた服紗の色は濃紫、左程手摺れぬ手箪笥の環も今日は淸らに光つて、『手が無いといふでもないに幾かも幾日も投げ遣りに爲れてゐた一間は、今日母が來て片付けて呉れたので心地よく整へられた、久しく空洞になつて塵芥ばかり被いてゐた床の間の花瓶にも、生家の庭の野菊が一つかみ母の手に活けられたので、始めて今年の秋の花を見た、斯程にも娘を思ふ母に背いて、私は又、私の兒の事を思ふて此家が離れられぬ、切らうにも切り兼ぬる親子の緣の繫りもなく深いにひき比べて、夫婦とは詰らぬもの』、と袖子は思ふ。

兎も角も小奇麗になつたら一室は冷たい秋の氣に圍まれて暮れかゝる、暗く成つてゆく一室に母を歸へして獨法師に、袖子は病む身をうち詫る、病褥の上の縋物に凭れて、折り曲げられぬ兩脚を醜態に投げ出した儘、裾の方には、娘の時に着た小袖を直したといひさうな荒い縞の絲織の搔卷が、銘入友禪の肩當に麗はしく榮えて、ふうはりとうち掛けられてある。

『椽の下には蟋蟀が鳴く、悲しさうな聲で鳴く、聲の切れぬは悲しい思が切れぬからで有らう、……病んで

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

始めての秋である、秋の果つるまで未だ何れ丈長く彼の蟋蟀の音を聽かねばならぬか、』と袖子は泣き腫らした眼をして周圍を見廻はしたが、ちとの身動きにも兩脚の疼痛が犇と感える、障子でも開けて、せめて空でも眺めたいと思ふても人手を借りねば儘にならぬ、治る見込も少ない病氣に、費用ばかりかけるも徒費であるといつて、看護婦は先日良人が返して仕舞つたので、それ柄の不自由といふものは尋常てはない、看護婦の一人や二人徒費といふ財產では無いくせに、それだから虐待だと母親は說いたのである。

『女中も悉皆新らしいのに代つて仕舞つたので、ろくに私には心付けも爲て呉れぬ、遊びに出たまゝ一彥は未だ戻らぬのであらうか』、とそれにも是れにも袖子は氣を苛着つて呼鈴に手を掛けやうとすると、折よく彼方から一彥の小さい足音がして、守を後にして馳け込んで來た、一彥は四歳に成る。

『母ちやま』、と突然背中へ取り付いて冷い手を頸へ搦みつける、袖子は靜かに小さい腕を引き下しながら横に抱いて頰を押しつけて、

『一ちやん、遲かつたね、何處で遊んでゐたの』と聽くと、

一彥は返事をせずに、不思議さうに母の顏を見てゐたが、

『母ちやまお眼何うちたの、赤くなつてゐるの』、と言ふ。

『ああ、母ちやまお眼蟲に刺されたの』

と、泣いた顏を兒にまで咎めらるる厭苦さを笑つて見せて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『はやく、彼方へ往つて御飯を食べていらつしやいよ』、

『此樣な可愛い者を何うして離せやう』、と、袖子は獨り我胸に語つて、再三度抱きしめて起たせると、聽き分け好く一彥は、ぱた／＼と彼方へ馳けて往つた。

『何うして彼兒と離れられやう、たとへ手を下して世話を燒く事はならずとも、朝夕に顏を見てさへ居れば氣も濟むやうなもの〻、此家から籍を拔いたら、表からは指もさゝれぬ二人は他人になる、一彥が敲かれてゐやうが苛められてゐやうが、われは口も手も出す事は出來ぬ身になる、世間には生まぬ兒を苛責する非道な女も有ると聽くではないか』、

袖子は神經が興奮して來ると、彼方の部屋で一彥が嬉々と笑ふ聲にも耳を立てゝ、眉を寄せる、愛くるしかつた眼の媚は、長い間の口惜しさと悲しさと病の悶えとの淚に洗はれてしまつて、たゞ何時も力なく濕んでゐるばかり、艶よくふつくりとして居た、頰も瘦せて、見る人每に羨まれた容標は、何時ともなく無離と落ちて仕舞つた、暮れゆく一間に茫然と物思をしてゐる前へ女中か來て、瓦斯に火を點じて、藥の香の高い膳を据ゑたが袖子は首を振つて持ち去らしめた。

部屋は晝の樣に明るくなつた、明るい中に暗く住む程切ないことは無い、暗い袖子の胸には何の光も通さぬ、明るい此部屋の中に明るい思をして、木の葉の枯るゝ秋を、さながらの春にして良人と語らふた宵も有つた、桔梗が好き萩が好き、否さ僕は此女が好きと頰を突かれた時の良人の顏は憑らしい程樂しさうて、睨んで物を言ふことが此人にも有らうかと思つた、それが今日此頃は睨んでなければ自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には物を言はぬやうに成つてしまつたのである。

良人と自分とは別に知り合ふて戀した中といふてはなかつた、然れども結婚してからといふものは、たとへ戀人同士が一緒に成つても、決して是から上睦じい事は有るまいと思ふ程、二人は仲好く面白く樂しく暮した、良人は執拗いと思ふ程自分を愛し、煩さいと思ふ程自分に附き纒ふた、自分はハイカラ主義は嫌ひな方で、女は兎に角男の下に附くもので、男はちやんと旦那樣と崇められて威張つてさへ居れば好い者と思つた居た、所が良人は無暗に私の機嫌を取ることに斗り勸めて、庖厨の事を爲に出たり裁縫なんぞ。眞面目に爲てゐるのは大嫌ひて、白粉を付けたり紅をさしたり、取り替へ引き替へ着衣も違つたのを着て、何方かと言へば少し甘え氣味て物を言ふのが好きてあつた、他所へ一緒に出る時も、必ず私の人力車を前にして自分はお伴の樣に後から附いて來る、羞明が惡いと思つて振り返ると私の莞爾と笑ふ顏を見て又莞爾莞笑ふのが常てあつた、雜踏の中なんぞを歩いて行く時も、危險いと聲をかけては抱へる樣にしたり手を取つたり、群衆が見るので冷汗が出て、

『人の前ては最少し知らん顏を爲てゐて下さる方が好い』といふと、

『弱い者を強い者が保護して遣るのは當然てはないか、』と言ふ。

それも然うか知らんと思つたが、或時は、一體自分は良人に、人形を弄ばれるやうに弄ばれて居るのては無いかと思つて、然う思ふと好い心持はしなかつたが、結婚しても良人と氣が合はないで毎日欝いてはかり暮すといふ、お朋友の話を聽くと、やつぱり自分は幸福であるのだと思つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我體が、子供が生まれるやうに成つたと分つた時は、又一層優しく爲て呉れて、產の輕いか重いかを良人は切りに案じた、けれども產前一ヶ月ばかりは關西地方へ役所の用で出張をして居て、歸つたのはちやうど一彥の生まれる前の日であつた。

その二十一日目の夕方であつた、始めて產褥を納めて髮も丸髷に取り上げて、身化粧も叮嚀に爲て、

何となく取亂してゐた十月の間の心勞を拭ひ去つたやうに忘れて、氣も晴々と違つた人の樣に成つて、久し振に夕飯を一緒に食べやうとすると、良人は珍らしさうに箸も取らずに我顏をばかり見詰めてゐたが、

『少し瘦せたやうだ、瘦せて却て好くなつた、』と言ふ。

『まあ、然う、』と恥かしく打俯くと、良人は猶他愛もなく我姿を見てゐた。

其後は一彥には乳母を付けて、自分は子の世話に抱泥て身化粧を怠りなんぞせぬやうに爲せられた、

『氣を若く持つてゐる方が好い、さう早くからお母親さんじみては困る、』と口癖のやうに言つては矢張新婚の當時のやうに良人は私を方々へ連れて歩く。

子を產むと女の心持は變る、可愛い一彥の機嫌惡く泣かる夕方など、見す〳〵置いて行くのは女中の手前も氣が咎めて厭苦つたが、猶自分は良人に犇と手を握られて、緣日の賑かな往來や公園の木の下暗を散步するべく餘儀なくされたので有つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

流行の感冒に罹つて十日ばかり寢たことが有つた、其時なんぞもそれは親切に看病して呉れたそれ故良人は私の體が健康の時ばかりでなく病氣の時でも何時も斯う變りなく優しく取扱つて呉れるものとばかり思ひ信じて居た、所がそれは思違ひて有つたのてある。

私が起きられなかつたり、晩方の酒の酌が出來なかつたり、一緒に散歩に出られなかつたりする其間の不自由も不滿足も、日限の知れた十日や二十日の間てあつたればこそ辛抱も出來たのてある、今度の病氣に罹つて、ともすると兩脚利かなくなつて起居も叶はぬやうになるかも知れぬと、良人の前て醫者が言つた時に良人の顏色は失望に變つたのてある、一月たつてもはか〴〵しくない二月立つても三月立つても、つひ半年に成つても疼痛は緩まず愈々關節の利かなくなる事が著しく分つて、起上つても膝を折る事は叶はず、醜態に兩脚を投げ出した儘て居ねばならぬ樣になつた見苦しい私を見ると、

「お前の病氣にも飽き〳〵した、己れは一生お前の看病を爲て暮すことは出來ぬ、其樣な不具者に成つて妻の務が果せるか、」

と罵り始めた。

無理は無い、私が斯うして動かずにゐたら朝に晩に何れ程か良人は不自由を感じるてあらう、自分は何れ程の病苦の厭苦さをも、良人の愛さへ變らぬならば、何れ程にも忍ばうと思ふ、體を動かす事は出來ずとも、何樣にでもして良人の心の慰む法を講じて此陰氣臭い家庭に倦ませぬやうに務めやうと性急つた、けれども夫れは我が徒勞な心遣てあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

良人は肉體の不具に成つた妻の赤心は零同樣に感じるのであつた赤心はたとへ無くとも只美しい容貌や皮膚を愛でるので、それさへ有れば足りるのであつた、畢竟良人の卑しい愛は曝露に成つたので、今まで然も大切の者のやうに自分を優しく扱つて呉れたのは只卑しい慾望を滿たさうが爲めに過ぎなかつたといふことが分つた、自分は人形よりもより多く弄ばれてゐたといふ事が分つた、ばからしい、此病氣も元はと言へば良人故ではないか。

女中の話に、此間良人の机の上に女名前の手紙が置いてあつたといふ、そつと持つて來て御覽と留守の折、取りに遣つた時は、もう無かつたが、良人の秘密は机の引出し邊に蟠り初めたのかもしれぬ。」

袖子は何を思ひ出してか女中を呼んで鏡臺を病褥の側へ取り下さした。

濃い紫の小服紗を除けると、忽ち死斯の光は玲瓏の玻璃の面を射て鏡の底にわが面影を見る、荒れた皮膚に艶なく、靑春の潮の引き退つた脣は只冷た氣になつて美しと言はれた縹致も病んでは斯うも衰けるものかと、袖子は口惜しげに見詰めてゐたが、徐に櫛を取つて髮を梳かし始めたのである、動く半身を働かして俯向く頸に瀧の樣に落す黑髮は胸にかゝり膝に届く、櫛を入れて元から末まで掻き下すと、掻く度に長い髮の毛が幾筋となく櫛の齒に搦み付けては拔けて來る、秋は木の葉の枯るゝと共に女の黑髮も拔けて落ちる、病む身には殊に心細いのである、菫の香のする油を夥多に注ぎかけて、一筋も遲れ髮をこぼさぬやうに前髮を膨脹ませて、エス卷に結び上ると、性の好い髮の毛は俄に見違へる桀を持つて夜の一間に照り渡つた、鬱陶しく亂れ髮を振り披いて居た顏も、蘇生つたやうに浮き出て來て、窶れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たとはいへ、輪廓の麗はしい鼻や、長い揉上の邊が鮮になると、有り〳〵に變らぬ黑い瞳の美しいのが目に付いて來る、袖子は滿足して鏡臺を押し遣つたのである。

ふらりと洋太郎は歸つて來た。

この三日ばかりといふもの玄關から出入する人力車の音は聽いても袖子は其咳嗽の聲さへ耳に爲なかつたのである、珍らしく袖子の部屋の次の間まで來た、すると後から從いて來た女中が何か問ふた樣子だ、

『飯か、もう疾くに濟んだは、此樣な家へ歸つて飯が喰はれるものか、』

と荒つぽく言ふ聲が聽えたが。

『あゝあ、我家は陰氣で不可ん、』と私語いて、五分間ばかり部屋の中を歩き廻つて居たが、此方の部屋へは來ずに又出て行かうとする樣子なので、袖子は、

『所天、』と聲をかけた、足音が止つたが返事は無い。

『所天、ちよつと申上たい事が御坐いますが、』

と再び言ふと、襖の開いたまゝになつてゐる閾の上へ、すうと洋服姿の洋太郎は現はれた、身の丈も肉も豐富ある眉の太い鬚の濃い立派な男である。

袖子は更紗羽二重の被布に隱れたフラネルの衣紋を搔き合せ、縋物に凭れた儘、病褥に有る身を愼ましく、分けて脚の方を氣にして搔巻を引きかけながら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『まあ、其處へお坐り下さいまし、今日、生家から母が參りました、』と先刻まで母の坐つて居た座布團を指さす、洋太郎は洋袴の隱嚢へ兩手を突込んで、立つて考へて居る樣子であつたが、面倒臭げにどつかりと其處へ胡坐をかいた、途端に酒の匂がぷんと袖子の鼻を打つ。

『さぞ、泣言を言つたらう、』

じろりと、如何に醜態に利かぬ兩脚の投げ出されてあるかを思ふが如く、搔卷の方を見る。

『母が參りまして、お前も此頃のやうでは却てお邪魔になるばつかりだらうから、歸家つたら如何かつて申しましたんですけれども……』

今日一日泣き腫らした眼瞼を重げに上げて、良人の顏を窺ふた、その黑い瞳を、洋太郎はちよつと見たが直外らしに、

『お邪魔に成らうから生家へ歸れ、はツは、お母樣はお察しが好い。』と嘯いて冷かに笑ふ。

『けれども私は生家へなんぞ歸る積は些少も御坐いません、何處までも此相原の家の人に成つて死にたいので御坐います、それを、そんな苦勞は些少も察して下さらずに、所天は厭苦いことばかり仰しやつて……』

『よして呉れ、よして呉れ、もう夫れは聽き飽きた、』

と、洋太郎は煩ささうに首を振つて、無意識に隱嚢から鰐皮の卷煙草入を取出したが、氣が付くと周圍に火が無いので、舌打をして又仕舞込んで、立ちさうに洋服の腰を浮かすので、袖子は餘りの事と急

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

込んて、

「この病氣だつて、原はといへば所天の御病氣からだといふじや御坐いませんか、」と言ふと、

「白痴つ、己に祟るな、」

と、洋太郎は眞面目に聲を高うして我知らず坐り付く、袖子はその聲にはツとしたが、

「それだから何も私は所天をお怨み申しは致しません、所天のお心さへ變らなければ、そりやもう私は、病氣の苦しいのも體の不自由なも何の樣にも堪えます、けれど所天は此頃全然始めとは人の違つたやうに荒つぽい方に成つてお仕舞ひなすつたんですもの、だん〳〵厭苦くばかりお當りなさる……」

と、種々の悲しさが一時にこみ上げて來て、言葉が詰ると、袖子は袖て顏を蔽つてしまつた、白い額に一間の光が反射す。

病んてゐても身嗜みの好い袖子は今迄にも能く斯う思はせた事も有つたが、洋太郎は今宵はひとしほ病む妻の姿を先刻から優美と見てゐる、髮の毛一筋毎に艶を含んて、男の頭腦を掻き亂すやうな菫の香が立つて、被布が肩から滑り落ちさうな痩せた襟元に、淡紅色甲斐絹の裏が妙になまめかしく、不愍な念を惹き付ける、と思ふ程病んて居るのが腹が立つので、男の感情が焦燥する。

「役人といふものゝ務は煩さひ、煩さい務の他に、未だ上官の機嫌を取つたり同僚の氣を兼ねたり、ばからしい心使がある、それも我家の門を入つて玄關へ迎へに出る美しい妻の顏を見ると、總ての屈托を忘れて仕舞つて、此美しい妻は自分のものである、自分の專有の秘藏のものである、自分の好自由に成

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るのであると思ふ、その時程男の誇と勝利とを感ずることは無い、それが斯う病氣に成られては、男の誇と勝利とを蹂躪せられたやうに思ふ、妻の病苦を察して遣るよりさきに先づ自分の不愉快の持つてゆき處の無いに困しむ。

われは白狀する、利己に相違ない、妻を愛するは我が利己に相違ない、我利己は不具の病妻を忌む、何故妻は愛する良人の意に逆らふて病氣に惱むのであらう、病の壓迫に勝たぬのであらうと終には愚にもつかぬ事を考へ出す、それは無理であると斷念めてそれて、病む妻には何の咎も無いことを一旦は思返すと、氣も柔らぐが、兩脚を投げ出して不具な姿を、遠慮もなしに良人の目の前に突きつけてゐる若い妻を見ると、やつぱり腹が立つ、理性の制する柵から拔け出て、感情は我胸を夥に搔きむしる、いつそ我が目の前から感情を騷がす妻を取り除けたい、さらば始めて其時、病む妻を憐れむ淚が我眼から迸るかも知れぬ、」と洋太郎は思ふのである。

『優しく爲て貰ひたければ最初のやうな體に返れ、」と、投げ付けるやうに言つて、飽くまでも泣く妻を見てゐる。

『また所天は、そんな無理を仰しやる、」

と袖子は口惜しさうに叫んで、

『所天は私を弄んでいらしつたのです、それだから私の體が利かなくなつたといつて、憎くはかりお扱ひなさる、好うございます、どうせ私は脚の折れた人形で御坐います、さんざ玩弄に爲れた結果、も

う要らないつて捨てられる、」

「なにッ、」

と洋太郎は鋭い眼をした。

「もう看護婦も附けて下さらず、利かない體を投うりつぱなしにされて仕舞つて、此部屋の中で私は生埋めに成つて死ぬのです、」

「死ね、死ね、僻見根性も好い加減にしろ、死ぬ方が余程好い、」

と、辭の反跳には違ひないが、惨いことを言ひ放つと、袖子はわッと聲を立てゝ泣き入つた、泣き入る樣を洋太郎は小氣味好げに熟と見て居たが、『あれ程、若く美しく、はしやいで、小鳥のやうに家の中を賑はしてゐた袖子が、如何して斯樣な事をいふ女に成つて、自分も又、如何して斯樣に厭苦く當るやうに成つたのであらう、」と、不意と不思議になる、夫婦といふものゝ關係を、ちよつと解釋して見やうと爲る、妻に對する我が感情の何時も不條理に走ることを考へる、病んで泣く妻を不愍とも思ふ、その間に暫時氣も折れる、張つて居た肩を落して、切りに二人の運命を歎くやうに見えたが、袖子が飽く迄も口惜しさうに身を震はして泣き續けるのを見ると、再び顏色を變へた。

「おいッ、」

袖子は默つて居る。

「お邪魔に成らうから歸つて來いとお母樣の言つた時、お前は何と返事をした、」

「何と言へば好かつたと、所天はお思ひになります。」

と袖子は涙の下から皮肉なことを言ふ。

洋太郎は其答を憎しと聴いて、鼻の先でふんと笑つて、

「然うさな、邪魔に成るとはいはんが、勝手に爲るが好いさ、」

「離縁れと仰しやるんですか、」

袖子は泣き腫らした眼尻も裂けよとばかり、女の一心を籠めた眼を据ゑて良人を見つめる。

「離縁とは言はん、」と洋太郎は顔を背けた。

「言はんが、離縁れば好いと待ち設けていらつしやるんでせう、」

と背ける良人の顔を追ふて耳を澄まして答を待つたが、答は無かつた。

袖子は腹立たしげに唇を噛んで、

「見下げ果てた……所天は見さげ果てた……不具に成つた私を追ひ出して、健康な女をお貰ひなさるんでせう、」涙のつたふ頰へ能く掻き上げた鬢の髮が一筋、はらりと落ちた。

「それは巳れの勝手だ、」洋太郎は無理に落着た風を見せて自暴に口髭を捻る。

「一彦を何うなさる、一彦は私の子です、」

「一彦は己れの子だ、それも己れが勝手にする、」

「えゝ、そんなら所天は、一彦は取り上げて、私ばかりを追出すといふんですか、所天は、あんまりな

……あんまりな、」

袖子は狂氣のやうに成つて、身を悶えると、忽ち感じる足の疼痛に呀と叫ぶ。

『逆上るな靜かに言へ、』

と、流石に聲を高うした卑なさを洋太郎も心付いて周邊を見かへる。

滿腹した一彦は女中を相手の遊戯にも飽きたりと見えて、此時ガチャ〱と玩具のサーベルを引き摺りながら威勢よく此一間へ馳け込んで來たが、樣子を見ると、急いで泣いて居る母の肩へ抱り附きながら眼を圓くして父の顏を見た。

夫婦の聲が止んで、寂莫となつた瞬間、いつのまにか降り出した秋の雨が、しよぼ〱と軒を敲いてゐる音が聞える。

雨の音に交つて倦まず弛まず鳴いて居るのは蟋蟀で有る。

（完）

次號の本欄には　作者苦心の大作

虛無　三島霜川

掲載せらるべし。其如何に我讀書界を驚かすべきかは次號の出づるの日、親しく讀者の目撃せらるべき所なれば、今茲に之を贅するの要なきも、題名の「虛無」は所謂政治上のそれとは、全然無關係のものにして悲痛なる經歷より悟得したる悲痛なる人生觀に附したるものなることを斷り置く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和歌　紫舟選

○　佐野翠坡

秋の蚊はこひしき母の終焉のみ息の音(ね)してわれになくかな

しら波はわたつみやゐのみ使の萬馬の如も礒によすかな

玉の頬の如くみのれるちのくの林檎畑の朝の月かな

乙女ども花輪の如くわれめぐりあれどかなしや一の君かく

大いなるのぞみのかたち秋の空すみて光りぬ瑠璃の色して

靈まつり朱(あけ)なる蠟はありし世の君が心ともえさかるかな

雨の夜をこほろぎなきぬくらき灯に人ら博(ばく)うつむしろ戸の家

君を得しわが心をもやすらかに胡蝶ぞねむる花草の上

わが胸をのがれし悪のかたちして空に雲ゐぬ冬來と言ふ日

かなしみと申すわらはを木がくれに見せて花ちる夕まぐれかな

○　梶原白花

母なき子母となる日はほほゑみの中に涙の頬やつとふべき

萩桔梗うつろう姉のおん墓にくれて遇ひたる初時雨かな

たえ／＼と枕に水の音をきく夜露ひたふる山の宿かな

秋の夕なべての人はおん姉のごと涙しぬなつかしきかな

よろこびに入るきざはしと夕暮を欲りする迄におとろへてけけり

木犀の花香ゆかしき黄昏を君のけはひに風吹いて來ぬ

吾が涙君が涙をさそひ得(え)てこも／＼おつる末の日もあれ

後の世に吾れや生くべきわが墓に君がなみだの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雨ふらん時

○　　　　　　猪狩水村

ひそやかに魂は倦んずる胸ぬけて青き花咲く夢の野を行く

人は亡び世はたゞ青き月光にひたさるる時靜けさは來む

冷やかに涙は下るいつの日に果してなごむ吾心ぞや

うら若き心は知らずふるひきて涙徒ら頰を流れぬる

ひそみたるよろこび心光得てわがあらましを照らすに似たり

○　　　　　　大津照水

すゝき野や寸程いでし穗の上を風渡るなり月のぼる時

白晝(ひる)の「時」死して黑ずむ殘骸に冷たきくれの鐘なり渡る

「時」といふあやしきものゝなき國に二人生れてとはにいきなむ

春の海藻の花かげにうつくしき夢の世たどる貝もあるべし

金色の雲は起りぬ夕づく日奉じて山の陣に入らんと

ともすれば若き日のこと聲だかにかたりて人をわらはする君

○　　　　　　大澤峽村

君まちぬ葉を洩れ白き花のごと月光にほふ橘かげに

かたくなにとざせる胸の戸ひらくと火のかぎもちて君近づけり

山越えて月ほのめきぬ蘆に住む鳥なく河のかはたれ時を

われ捉らふ黑き瞳(め)くにし弓矢とり射なむとたてどされど能はず

○　　　　　　金城醉竹

十月や蕎麥の花咲く高原の上に淺間の山煙かな

ある日ふとふれし御胸のつめたさに心をのゝき安き日もなし

わが心君が心に抱かれて玉としならむ日をこそおもへ

よそ人に心囚(と)られし君なれば憎みつゝなほあはれみて居ぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見君ればこゝろの窓もほがらかに光ぞ満つる黒きかげ消え

なみだなく浮き笑み見する人になほわがこゝろ行く夜晝分かず

目うるませおもはれ人は夕月の小窓によりぬ白萩の花

○　小林狂霞

秋の雨こゝろの家に君をみぬさびしらに以て心死にぬる

夏ゆきて古りし籬のかなしきに死馬の骨かふ人待つおもひ

秋の風末の原野は穂すゝきの雪をかづくと便りして來ぬ

秋されば眞野の榛原きりがくり樹のくれになく美き鳥おもふ

○　中川靈波

朝の日は島のかげ行くおほ船のこひしき人の衣に照らなむ

牛の脊二つ並びしかたちして白む遠根の夜明け方かな

○　小川溥村

喜の大木は枯れて憂の木華やぎ初めぬわが胸の野は

針の舌炎のこゝろ持ちてわれなやます君に女を知りぬ

○　川村湖花

われとわが心ほこりぬ逢はてある日も恨まざる淸らさにゐて

われらのみあるこゝち君とゐてあかず眺むるこのひと時は

○　菅原喜代藏

うつくしき物みなうつるよき目して此の世やおくるなつかしき人

○　國見南洋

故郷の方なり夕べ雲さけて母のひとみと秋の星みゆれ

○　武田歌男

月の磯さゝらぐ波の靜けさにひかれてみたき思ひに立ちぬ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



柚味噌

消え易き火をうち佗ぶる柚味噌哉　へき生
葱味噌の貧しきに飽き柚味噌哉　同
柚味噌焼く黄菊の宿の句會かな　同
釜ながら膳にまゐらす柚味噌哉　同
ホ句一(ひと)夜僧と柚味噌を賞しけり　同
柚味噌釜載せたる秋の扇かな　同
十人に一つ足らざる柚味噌かな　同
青き柚の二つ殘りし柚味噌哉　同
食ひ捨てし柚味噌の釜や菊の霜　同
閑居して偏へに古雅の柚味噌哉　同
庭前の柚子を頼みの柚味噌かな　同
一つづゝ十人に燒く柚味噌かな　同
柚味噌釜金槐集に載せにけり　同

恬然と火に臀据えし柚味噌哉　同
尻焦げし柚子や味噌猶冷やかに　同
茶博士の之を得意の柚味噌哉　同
釜一つ蓋の合はざる柚味噌かな　同
よべの柚子味噌冷かに殘りけり　同
柚味噌の釜並べけり芭蕉の葉　青奴
詰め下手の焼下手の柚味噌焦しけり　花骨
還俗の人に柚味噌の馳走かな　青居
十文字に柚味噌の釜をくだきけり　蜂居
老ひされば一つの柚味噌守りけり　霜葉
齋戒の口になれたる柚味噌かな　銀杏子
故郷の柚と味噌と送り呉れにけり　藍雨
やけこげる柚釜の尻を覗きけり　尺水
自炊して湯治の客の柚味噌哉　鐵伯
柚味噌を配る膳かな小碟かな　鬼村
寺守の一人佗しき柚味噌かな　羽川
師の僧の昔語りや柚味噌燒く　京杜
柚味噌に病後の粥をすゝりけり　瓢郎
經本に柚味噌の味噌の名殘かも　鬼子
師の坊の夜來られて柚味噌かな　濠雨
膳の上に懷しきもの柚味噌かな　梅谿

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

陣中に利休召す夜の柚味噌かな　釘山
師の君の好ませ給ふ柚味噌哉　青波
師の坊は貧に安んじ柚味噌哉　南華
よく語る番僧も居て柚味噌哉　藤人
柚味噌なめて禪堂に入る三日哉　夜色
歌反古柚釜の尻を拭きにけり　總子
發心す柚味噌なめたる其日より　四綠
柚子味噌や渾沌として釜の中　方外
醸し得し酒の酸さや柚味噌燒く　歸去來
欠伸して柚味噌に句案盡きにけり　雪峰
爐の隅に猫眠りけり柚味噌燒く　泡石
南無彌陀ぶつ／＼柚味噌煮たちけり　刀川
嘗め盡くす柚釜に箸を投じけり　白鳥
精進の終り日を燒く柚味噌かな　俯仰
柚味噌燒く三輪の酒屋の主かな　草童
貧にして賤しからざる柚味噌哉　骨董
柚味噌會野寺の僧も來りけり　桃村居
柚味噌に我一句彼一句かな　同
柚味噌嘗めて夫婦年よる雪の家　釜村
寒菊や柚味噌や庵のホ句心　同
老僧は洟をすゝつて柚味噌かな　溪水

柚味噌やく庫裡や冷たき足の裏　同
柚味噌嘗めて坊主頭を並べけり　柳子
雲水を泊めて夜語る柚味噌かな　同
爐の灰に柚釜の跡の凹みかな　星象
柚子味噌を句案の膝にたらしけり　同
柚味噌に古瓶の酒を飲みをしむ　鬼洗
一座皆俳諧宗の柚味噌かな　同
柚の釜を碎く辭のあるたわれ哉　董哉
柚味噌なめて眠りて愁なかりけり　同
火鉢三つ各々に燒く柚味噌かな　渭南
試みて未だし蓋す柚味噌かな　同
一瓢の飲に甘んじ柚味噌かな　稚草
一山の聖の數や柚味噌釜　同
茸呉れし僧に持ち行く柚味噌哉　玉雪
心ゆく經に柚子味噌忘れけり　同
柚子味噌の汚點わびしさの白衣哉　同
俳神を祭る一顆の柚味噌かな　縱横
且つ語り且つ燒く庵の柚味噌哉　同
柚子味噌や貝の盃蕨箸　同
先生の端然として柚味噌かな　沐雨
妻あれば子あれば柚味噌あればこそ　同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我一つ彼一つ柚味ねぶりけり　同
三人寄れば文珠の智ある柚味噌哉　小魚
俳諧は柚釜の底の拔けしより　同
柚子味噌や月越す程の米はあり　同
ホ句を知る妻を娶りて柚味噌哉　李王
柚味噌燒く庵に芭蕉の雨を聽く　同
貰ひ湯に妻は隣りや柚味噌燒く　同
俗論に柚味噌は焦げてしまひけり　同
子規の忌も果てゝ日數や柚味噌會　同
藥湯を出てゝ柚味噌の夜食かな　石鐘
柚味噌燒く厨の隅や鼠啼く　同
まどろみていつ燃えぬけし柚釜哉　同
柚味噌燃くわれを孤影の守り鳧　同
愕として柚味噌の炭火崩れけり　同
柚味噌燒いて言葉少なの句會哉　同

應募俳句は東京市本鄉區駒込曙町大谷正信宛の事

募集課題　乾鮭　十一月十五日締切
　　　　　初空　十二月十五日締切

前號「柿を食ひながら鳴子を引きにけり」の句の作者を四綠とせしは董哉の誤なり。



「我國體と基督教」を讀む

麻畦

著者の自序によれば本著「我國體と基督教」とは、曾て學士會院に投したる論文なるも、手續未だ進捗せず、同院の記事とし、世に公にせらるべくして猶ほ公にせられざるを待ち詫び、遂に自ら出版の運びに至りたる者といふ、吾人は著者加藤博士が、如何に熱誠を籠めて世に示さんとせらるゝ心血の文字なるかを知る、此かる博士の態度に對しては多大の敬意なくんば非ず、而

かも議論の内容を見るに及んては、如何にして爾く稱氣に富めるが、幾多の矛盾を含んて而かも猶ほ晏如として自ら平なるを得るか、科學者は確實を愛す、統一を尊ぶと聞くに、如何にして爾く確實を失ひ統一を缺くの立言を敢てし得るか、此點吾人自ら省みて輙ち通ずる能はず、更に博士に向つて問はんと欲するところなり、否少しく智あり識ある青年以上の人士に在つては、唯之愛國の熱誠溢れて百頁の文字を爲したりと見るまてにて、格別博士を罪せざる代りに又格別博士の説を意とせざるべし、吾人も亦誌面の狹隘を感したる本號に於て、左まて惜氣もなく多大の文字を使用せざらんと欲するも、尙ほ氏の博士なるが爲に、僅に文字ありて而かも智と識と未だ甚だ至らざる人々の或は漫然傾聽の態度あらんかを恐る、此處に數語を附するも又巳むべからざらんか、博士は我民族敎と世界敎との關係を說き、而かも之を解して我民族敎の奉ずる諸神は、別に英靈の萬古に存するといふにはあらず唯その遺德を追稱し敬意を拂ふに過ぎずといふ、吾人も亦之を贊す、されど我諸神の性質既に此の如くならば、全然その神格を異にする主宰神(或は如來)と、之を禮拜するに於て何の支吾ありや、換言すれば遺德を追稱するの意にて禮拜する神と然らずしてその全靈に縋らんとて禮拜する神と、其處に如何なる撞着ありや、若し所謂民族神を以て希臘羅馬の昔に信仰を擧げるアポロ、ヘラの諸神の如き者と解するならば、議論は自ら異なり、支吾撞着は元より免れざらんも、博士の唯物論的所見は之を許さず、次には佛敎は世界敎なれども傳敎弘法のごとき本地垂迹の說となりては猶ほ國體と同化し得べし、耶蘇敎は然らず、好しや之に倣はんとするも其性質上之れに倣ふの日は即ち自滅の日なるを如何せんと說く、如何にも本地垂跡說が時潮を同化し易かりしには相違なきも、之を以て直に挽めて阿附したりとせんは餘りに當を失すべし、密宗の本地垂迹說は天台華嚴の汎心觀より當然導き來らるべき理數を有す、而かも是れ豈に佛敎のみとなさんや、耶蘇敎とても亦同じ、凡そ世界敎とも見做さるべく、唯一神を信ずる程の宗敎に

在ては當然斯る汎心論とも調和し得べき一面を有す、而かも野に咲ける一莖の百合を見て、其處に神性を認め渇仰の眼を開けはとて、之をしも直に偶像そのものを拜する偶像教となさんは幼し、次に神をお化の様なるものといふ、是れ既に甚だ迷へり、而かも博士はいふ、天父なるものか實存するものならば致方なしと、その意、神にして在らば固より信せん、更に言はば神にして實存し、申すも畏き事ながら皇帝よりも尊からば我之を禮拜せんとの事なるべし、然らば皇帝は至尊なりその上に更に尊ふべきものあるべからず、有りしとするは不敬なりといふは、これ蓋し博士の眞意にあらず、眞意は唯科學的證明を得べき神なるものあらざるか故に我は之を信ぜすといふに止まらん、不敬呼はりは抑も末ならん、此處に至れば論點は神の有無、更に言はば知識と信仰との問題に有るべし、然り博士の根本の誤謬は實に此處に根滞す、博士は知と信とを全然隔離せしめて信を見ること道路の人の如く信は知よりして生ずるも、信よりして智は來らずといふ、是れ已に沒分曉の言たるを免れず、少くも知と信との如何なるものかを辨ぜざるもの言たるを免れず、知の本領は物の説明なり、信の本領は物の評價なり、物に性質ありてその説明を待ち、價値ありてその評定を待つ以上は知と情と等く同一物に對して並び存し得るの理は固より瞭々たり、科學と宗教との衝突云々といふ事は、這般の點に存するには非ず、唯夫れ宗教は情意の上に立つが故に勢保守的なり、科學は知の上に立つが故に勢進歩的なり、保守的なるが故に一旦取り入れたる過去の智識をば飽く迄失はざらんとし、進歩的なるが故に宗教の説明的方面に用いられたる舊知識をば顧みず、駸々として邁往するを免れす、科學と宗教との衝突は唯此處に存するもの、而かも此の如きは、正しくは知信の衝突と言ふべからずして、唯新舊知識のそれと名くべきのみ、知と信とは互に存在し互に作用し得べしとすれば、吾人は智的に凡てを統一して其處に實在を認むると共に又情的に凡ての統一を見て、其處に神を仰ぐこと豈怪むべしとせんや、此一關を透破し得

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あば、神は赫奕として如々の靈體を示現すべし、然らば不敬呼はりも如何ともなし得ざるべきかな、而かも此くして認めたる唯一神が、何が故に國家と兩立せざるか、一視同仁を旨とすれば、正義の戰に劍を拔く能はずとや、降魔の利劍てふ文字凡てを盡す、一人に對しての殺人刀は萬人に對しての活人刀たるに當つて、その鋒尖の一層快利を加ふるものあるを知らずや。說かんには事尙ほ多からんも、他は末節のみ、肯綮旣に解く暫く筆を此處に擱かん

鼯鼠の小鳥食み居る枯野哉　蕪村
木枯や畠の小石目に見ゆる　同
蕭條として石に日の入る枯野哉　同



十月の文壇

白　帆　生(寄)

候秋に入つて、十月の文壇は可成に花々しく飾られた。中に就き最も秀いてたものは中央公論所載

○犧牲(秋聲氏)である、本篇は只に本月文壇の佳作であるのみならず、恐らくは本年の短編中の傑れたものであらう。性格の最もよく現はれゐるのは主人公紀よりも、弟の病院長の方て、若し主人公の妻に就いて今少しく悉しく書かれたならば、紀が一層引立つた事であらう。不思議にも篇を劃つた四回とも結尾の句が銳く胸に響くので感興が深い。唯最後の回栗林の述懷を惹起す前夜に敬三が其三男を養子に吳れる樣な話が持上つたが而かも吳れる意志が無かつた事を短く地の文て書いてあるが其れを具體的に書いたらば甚麽ものだらう。省略に過ぎはしないだらうか。

○同誌所載未亡人（風葉氏）は氏の作として無論上乘なものでは無い。此篇を讀んで第一に感ずるのは例の美しい技巧であるが、此技巧は技巧本來の目的以上に餘計な事をしてゐるやうだ。即ち内容の不備を技巧で誤魔化してゐるやうに思はれる此篇の捉へ處は一寸とした主人公の心理の一轉化に過ぎぬ（「好奇心」にしろ、「おど聖」にしろ、近頃の氏の短篇は皆然うだが）。而もいはゞ序文たる鎌倉の月夜の叙述に力を入れた割りに、慈善音樂會の光景、そこに於ける山下の心理の經過がアッサリし過ぎて居るので、あの晩照子に對して嫌惡の情を起した山下が急に再び照子を得やうといふ念を懷くに至る迄の變化が突飛過ぎて首肯し難い。要するに技巧の爲めに面白く讀ませられたといふ丈け、性格にも事件の發展にも慊らぬ處が多い、て何だか長編の中の一片のやうな氣がされる。

○小膽者（春葉氏）日置正直といふ私立法律學校の出身であるが、其れも謂はゞ看板だけ、餘り働の有る方でもない、譬へば一人でゐる　から、旅行を爲ると初の日だけは紛れてゐるが、居所が丁と極つて氣が沈着くと共に、直に家が戀しく成る、と言つた樣な男の性格と其正反對の學校時代には隨分お撥だとも言はれた程の妻の性格とを經に、それに生活の壓迫を緯にして、生活の變化に連れ、種々に現はれる性格の狀態を書いたもので、作者が描かうとした所は略々盡されてゐる樣であるが、さればとて特に作者什中の佳作と言ふ程でもなからう、此篇に較べると八月の新小說所載蘇生の方が力が籠つてゐる。之れは文藝俱樂部所載。

○復讐（紅綠氏）お人好しの木地挽福松と言ふのが、那邊の齒れか分らないお虎と言ふ鳥渡垢拔のした女を旅の病ひから救つて女房にした。處が其女房は福松の眼を盗んで弟子の庄公と姦通く。終ひに福松が此事を知つて、如何にもお人好し的の復讐をする。と言ふ筋で技巧には俳句から來たかと思はれる佳い處があつて感心したが肉の臭ひがちと強過ぎるやうだ。「肉」以外の邊に材を見出す事は、作者が將來の爲め一考すべきものであるまいか。

○中央公論の第一人者（青果氏）劇として會話が少しく生硬だ。尙缺點を擧ぐれば人物の性格が出て居ないで、「第一人者の運命」といふやうな攻を中心としてゐるとてあるが、形式は一幕物としてよく整つてゐる部分では老博士と孫の徹太との對話が最も活躍してゐる。後段に道子の夢を點出して此あり得る夢とかの老博士の信ずるに難い現實とを對稱さしたのも面白い。今までの諸方に現はれた脚本に比すれば、善い意味に於て一番新しいものだ、併し公衆が斯ういふ舞臺上効果を解するに至るの日は猶遠いてあらう。少數の具眼者を對稱としてなゝる作品を與へた作者の努力と勇氣とは感謝に値する。

○趣味の久本氏（青果氏）只こんな人があつたのを書いたものとするならば今少し突込んで書かれればならぬだろうと思はれる。書き方が上辷りして居て青果氏の下作であらう。作の面白味は、自分といふつまらない人間をも、愛して平常なづけてゐて、その男に適當な輕い秘密な役を、言ひつけたところにあるが、それならば書き方が不明瞭だ。

○中央公論の鳥の賜（癸山氏）氏の作中での善いものとは思はれぬ。又氏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の作中に前例の無かつたものだ。恐く氏は古い、此頃では誰れも顧みぬ狹斜の中から、新らしい意味を見出さんと試みたものであらう。これは新しい材料から新しい意味を見出すよりも確かに困難な事であるに違ひ無い。前半には明かに此苦心が表はれてゐる。娼妓と客の心理などがそれだ。併し後半がこれに伴はなかつた。小町が蘇生してから偏へに自個を想ふに急で、對手の男を想起しなかつたといふあたりは今少しく強く明に書かれたら大いに見直したゞらうと思ふ。

○新小說の孫（秋聲氏）同氏の犠牲と何か連絡があるやうな氣がされる。技巧は不相變達者な者だ。祖母の片意地な性格はよく現はれてゐるが、結婚當時の娘の佼子の心理はもつと立入つて書く餘地があるやうだ。

○同誌の飢渴（薫氏）の作品はいつも、これがストリンドベルヒの紹介者かと思はれるやうな穩かな物だ。飢渴といつても、文字を見て想像する程恐ろしいものでは無く世馴れぬ青年が、他人に同情を寄せ得る範圍に於ての苦痛に過ぎぬ。が此温さは皮肉な此頃の自然派の作者達には見られぬ處だ。無暗に流行を追はずに、常に自個の性情に從つて靜かに書いてゆく氏の態度の輕浮で無いのを取る。

○貴公子（晴浪氏）すら〲として嫌味なく面白く讀まれた新進作家としては性格描寫も巧みて全體の調子も能く調ふて居る、此の態度を持續して宜ろしく精進せん事を希望する。

○趣味の中では一番嫉妬を面白く讀んだ。由來葉舟氏の筆には一種人を擽ると云つた樣な處がある。打解れて痛いと云ふのでもなければ、[illegible]

られて心持がいゝ、と云ふのでなく矢張り擽ぐられて居ると云つた樣な感じ=妙に判然としない、感じの強い所が無いのを云ふのだ。此の篇にしても然うて、之れ丈け深く人間の性情の發展して行くのを微細に見る伎倆はありながら、終りに往つてふいと放擲かして居る。一篇の着眼點が最初から弱かつた行爲でもあらうが今一工夫ありたい。風葉氏の未亡人と同一傾向だが較べると葉舟氏の方が成功して居る。

○正宗白鳥氏の老人は決して佳作と稱せらる可きものでなく如何にも描寫が上滑りして飽氣なく、いつも氏に見らるゝ鋭さも無いから、讀んだ後世間に斯う云ふ老爺さんも居るかなと云つた位ゐの感興を得らるゝに過ぎない。

○太陽に所載の空想家は正宗氏にしては伎巧の勝れた作品の一つであらうが、之も氏の佳作の中に這入る可きものでない。主人公は悉しく描き盡さてれ居るが、其れて居て印象が薄い。寧ろ主人公の色を明瞭に出す爲めに持つて來た葛原や娘の方が却て能く顯はれて居る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



我輩も猫である（九）

白也

暫くは至極無事に月日が經つた、たまには暇の時も無くつては遣り切れぬ、我輩猫類の手は筆を持つに甚だ適して居ない、造物者は我輩等には、文筆を弄はせぬ可く製造したものと見える、それを強いて筆を持たうと云ふのだから、甚だしく不便を感ずる、尤も元々造物者の量見に逆らつてする仕事であるから、多少の不便や困難は辛棒しなければならぬ、その位の覺悟はある、けれども不便は實際不便だ、その不便に忍ぶのだからたまには骨休みをする時がなければ、正直の處遣り切れぬ、それ程不便ならよすが可いと云ふ人もあらうが、それは我輩の勝手だ、敢て天の命に反してまでも困難な不便な境遇に立つて見やうとするのであるから、止せと云はれたからとて、ウン然うかと止す樣な我輩ではない、書きたい内は誰が何と干渉しやうが固より書く、その代り厭になれば何時でもよす、更に執着がない、結末なんぞは着かうが着くまいが、そんな事に頓着はしない、結末の爲めに骨を折るのは名譽心がある者の業だ、いくら人間に譽められた處、猫としては何の有難味もない、そんな事よりは近處の雌猫にでも騷がれた方がましだ、我輩も近來大に自然派にかぶれた其うち時候は遠慮なく變移する、英吉利のシドニースミスとか云ふ男は、皮を脫いで肉を脫いで骨丈て涼みたいものだと云つたとやら、先輩から聞き及んだ、先輩は能くくだらぬ文句を知つて居る、シドニー、スミスと云ふ人はどんな人物か知らんけれど、こんなくだらぬ事を得意になつて云つて居る處を見ると、餘り利口なお方とも思はれない、そんな無粋な事を云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よりぬか味噌の中に三年も這入つて居て、別嬪に嗤られたいとても云つて見る方が遙かに可い、シドニー、スミスの文句位は日本のブラックスミスでも云ふ、況んや猫に於ておやだ、

誰が何と云はうが云ふまいが、暑いに定つて居る夏も何時のか間に涼くなる、近頃は夕風が少々鼻にこたへるやうになつた、シドニー、スミスも骨ばかりになつたら、それこそ秋風が骨にしみてたまるまい、又肉を被つて皮を被つて、おまけに絆天の一枚も被りたいと云つたらう、夏の文句だけが後世に傳つて、秋の文句の傳はらなかつたのは遺憾である、尤も人間の云つた文句が一とつ殘らず後世に傳りッこては、大に面目に關する事もあらう、小供の時分に便所の中で、最ういゝよと云つたまで喧傳されて、ナポレオン曰く最ういゝよなどと、今日の人間にまで云はれるやうでは、絶世の英傑も少々へこたれるに相違ない、あばた女の白粉跡のやうに、消える處と殘る處と出來るので妙なのである、我輩と雖とも梯子段の三段目て、男を下げた事などは、成るべく後世へ傳はらぬやうにと内心大に祈つて居る。

こんな事を云つてる内に地球は我輩の眼玉の如く絶えず動いて、氣候は我輩の眼玉の如く絶えず變化する、我輩の身體も亦我輩の眼玉と其運命を共にして、昨今甚だ變化した、この變化を一名生長とも云ふ、然しこの生長は肉體に於ける生長て、頭腦は依然として舊態を固守して居るはちと心細い、向上の量見だけは確かにある樣だが、餘り高くなつたとも思はれぬ、甚だお恥しい次第である、がこれは我輩の頭腦が惡いので、我輩が惡いのではない、我輩の頭腦は我輩が作つたのてはない、宇宙の何者かゞ作つたのてある、製造人は神てあるか猫てあるか知らぬ、我輩は母親から生れただけは兼て聞き知つて居る、それも聞き知つて居るだけて、果してそれが事實てあるか奈何かは我輩が目擊したのてないから、確信は出來ぬ、又我輩には論理上奈何しても父親がある可き筈のやうに思はれるが、何處の何者が父親てあるか、未だ見た事も聞いた事もな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い、我輩の頭腦の製造人は、よし猫であるとしても、決して母一人ではあるまいが誰だか解らぬ、從つてこの頭腦が不手際に作られて居るからと云つて、差し當り尻のやり場もない、强いて苦情を申し込むなら母親の處であるが、それも幼少の砌に生別したので、生死の程も不明である、妻君の語る處に依れば、我輩の母親は妻君の緣家に養はれて居るのださうだが、それさへ芝とばかりで町名さへ知らぬ、抗議を申込まうにも申込みやうがない、不精巧なる頭腦は不精巧なるものとして、我輩は諸君と共に斷念せざるを得ざると悲しむ、而かも我輩は、其不精巧なる頭腦の持主だけに、之れを吊するの度も一層深い、自分の持〃となると、小指の顏は云ふまでもなく、煙草入蟇口の類に至るまで、總て不精巧なのは決して可い氣持のものではない、思ふに斯う云ふ事に多少の經驗をもつ者は、我輩の頭腦に向つて大なる同情を注ぐに相違ないと信ずる、それかあらぬか先達て、北海道の未知の無名氏から、主人の處へ繪端書が來た、繪端書はコロタイプで、右方には鏡臺や含嗽茶椀や、揚子齒磨きなどがあつて、左手の障子の破れ目から、小猫がニュッと半身を現はして、上の方に大きく Good morning. How are you! Mew, Mew! と三段に書いてある、主人はこれを見ると、フヽンと笑つて態て我輩の顏の前へ突き出した、少々極りがわるかつた。その翌日であつたと思ふ、矢張り未知の人からの端書で、主人の名の替りに「も猫君」と書いたのが來た、これには流石の主人も面喰つたと見えて、オヤオヤと云つてポカンと眺めて居たのは奇觀だつた、すると妻君も窺き込んで、あらッと云ひながら主人の顏と我輩の顏とを、半々に見比べたなどは、思はず拍手を催さしめた、それも二十日程前の出來事で、今日は甚だ暇である、小人閑居して不善をなすと古聖が腰だめに放つた豫言もある、古人の豫言をして全く當らぬものにするのは後輩の不徳である、弟を戒める方便として兄貴を譽むるが如く、悴を導く手段として親爺をかつぐか如く、百姓を治むる策略として郡長樣をえらがる如く、世間の馬鹿共を統治する爲めには、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

少くとも古人の豫言を當てさせる必要があると思つたから、一番閑居して不善をなさうと思つて、當てもなく主人の書齋へ這入つて見た、然し唯漠然と不善をしやうとしても、鳥渡手掛りがない、千兩役者もチヨンと木頭が這入るので、ギツクりと見えも出來る、きつかけなしに眼をむいた處、其間の拔け加減は、鎭守祭りの茶番と撰む處はない、きつかけなしに不善を仕様としても、さう安々と出來るものではない、不善をなすにも相應の辛苦と勞力とを要する、其精力を要する程度は、善を爲すのと全く同等である、唯其行爲の發展する方向の異るのみだ、善事をなす根本的の、精力そのものが賞讃に價するものならば、不善をなす精力其ものにも賞讃の價があると思つた、何かありさうなものだと、本箱の上へ飛び上つて、四方八方をぐるりと見た、奈何もうまい種子がない、不善の種子とりは新聞の種子とりより骨が折れる、尤も我輩は未だ新聞の種子とりになつた事はないから、其業がどの位骨が折れるものか知らんけれど、何んだか不善の種子とりよりも容易であるやうな氣がする、何故そんな氣がするかは解らぬ、唯そう思ふのみだ、然しこの「唯そう思ふ」と云ふ事は深い意味がある、この言葉は之れを解剖すれば、不善の種子とりの至難なる事を暗々裡に唄つて居る、うちのかぼちやを厭たと思ふ眼には、隣りの三平二滿が別嬪に映ずる、三平二滿が別嬪に映ずる眼底には、厭なかぼちやの幻像があるのだ。

暫く書齋を見廻したが、唯其不整理極まる不快な狀態が映ずるばかりだ、主人は常にこの不整理極まる書齋にあつて、あの塵だらけの机に向つて平氣て居る、身醫師として直接に衞生の事に從事して居ながら、自分の机の塵を意に介しないとは、殆んど主人の心理的現象を解するに苦しむ位だ、然し斯樣な矛盾は世間一般に見る處であるから、敢て主人のみを攻擊するわけにも行かんが、嘗て紅鹿君とコンセンスを論じた學者としては、甚だ飽き足らぬ感がする、

主人に見る矛盾の行爲は、今日我輩の企てた不善の種子とりには、全く何等の關係をも持たぬ、この書

齋に種子がなければ、裏の方へでも拾ひに行かうと、本箱の方からポンと札の上へ飛び下りたら、前足をグニャリと何かの中へ踏み込んだ、机の上にぬかるみのあるのは意外だと思つて見ると、安ぞ知らん、印肉の中へ踏込んだのだ、これはしまつたと思つて、周章いて後へ飛のくと、今度は後足を硯の海へ踏み込んだ、前足が赤で後足が黒だ、黒と白となら黒白を分たずともしやれるのだが、赤と黒とては源平咲きわけとももじれない、融通の利かぬ色分けてある、然し優長に控へて居る場合てないから、いきなり硯の海へ沈沒したる後足を救ひ出して、ブルブルとおッぷるつた、處がヘマの時はヘマの續くもので、机に裝つてあつた主人の秘藏の美人繪葉書の顏の處へ、ポッポッと染みを作つて了つた、絶世の美人は俄かに大黒斑（あざ）の美人と化した、これが實物であつたら確かに縁談の大障害になつて産婆か看護婦にでもならうと云ふ念を起させるに相違ない、厄介な美人にして了つたものだと、流石の我輩も呆然として、暫時染め分け美人の顏を眺めて居た、

見れば見る程同情に堪えない顏になつた、容貌は女の唯一の財産である、其財産を斯く遺憾なく殘酷に蹂躪したのだから、繪葉書若し靈あらば、一念必ず我輩を腦ますに相違ない、然う思つて見ると何となく悽くなる、面と向つて居るのが氣味が惡い、何とかして此黑痕を消す工風はあるまいか、黑痕を消す事は、即ち女の財産を回復する事になる、とりも直さずこの薄命の美人を救ふ所以であると思つて、樣々に考へた末、一トつ舐めて見やうと決心して、ペロリと舐めた、ザラザラと音がする、薄くはなつたが未だ十分でない、又舐めた、未だとれぬ、又舐めた、未だとれぬ、今度は奈何だとザラザラ矢鱈に立てつゞけに舐めて、今度こそ愈々十分であらうと思つたから、ヒヨイとやめて見ると、墨痕もとれたが美人の顏もなくなつて了つた、襟首と束髮との間が、薄ボヤケてベト〳〵にぬれて居る、顏の紛失した美人は甚だ恐れる、奈何してこんな事になつたのだらうと考へて見ると、別段に不思議はない、唾液でぬれた上を、わさび下しのやうな舌でザラ〳〵

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舐めたのだからたまらない、美人の顏は紙と共に削り落して了つたのだ、益出てゝ益失敗だ、而かもこの美人たるや、主人の秘藏しておかざる處である、主人は生きた美人を我がものとして秘藏する程の、金もなければ柄でもない、その癖欲望だけは人並以上である、然し主人もまんざらの馬鹿でもないから、其欲望の倒底滿し得られざるを自覺して居る、其結果は切めて繪畫けるものなりとも、擅まゝに弄ばうと量見をきめたものと見えて、この間大枚十五錢を奮發して買つて來たのが、即ち今顏を紛失するに至つた繪葉書の美人である、夫れ斯の如く來歷ある繪葉書であるから、歸つて主人がこの慘憺たる繪葉書を見たならば、如何に憤怒し哀悼し、激厲し痛哭するかと思ひやられる、其胸中の焔は如何なる勢を以て、如何なる方面に破裂するか解らぬ、これが我等の仕出來した事と知れたら、我輩は主人の鐵拳の下に非業の最後を遂ぐるに至るかも知れぬ、よし幸にして横死だけは免れるとしても、被る可き損害の多大な事は極めて明亮である、知らん顏をして罪跡をくらますに若くはない、動物は如何なる場合に於ても自己が中心である、正義も人道も自己に直接利害の關係を持たぬ時にのみ、揚言すべき熟字である、我輩は今先づ、逸ち早くこの場を逃げ出す必要があると認めたから、急いで書齋を驅け出やうとしたら、疊の上は落花狼藉、黑と赤との足跡は永遠に止まつて、我輩の犯罪を證據立てやうとする。

新刊批評

▲我國體と基督教　加藤弘之著　金港堂出版

通篇五章、信仰と智識、宗教と科學等の大問題より說き起して民族教と世界教、佛教と吾國體に及ぼし、最後に主題なる基督教と吾國體を論じ、科學的證明のあらざるものは何ものをも信ずべからずと結べるもの、その意は一神的信仰と國家的思想との間には鴻溝の越ゆべからざるものありといふに歸すれど、根本に於て宗教の本質を解せざるものあり、之を假に唯物論者に免れざる弊處と見るも、猶は甚だ統一ある立說とは許すべからざる點多し、概括して一神教は國家と兩立せずと說きつゝ、尙ほ基督教は我國體と兎に角不調和なり、自余の國にあつては或は調和し得るやも知れずといふが如き、神道を宗教視すべからざる理由を、単に

他宗教と角逐せしめば、その勝劣の批判より權威を損ぜしむることもあらんの恐怖より導くが如き、甚た堅實と明正とを缺くものあるを惜む、黃禍說など稱へらるゝ今日、單純なる利己的動機の愛國說などは時に取つての斟酌ものと思はる。（定價金二十五錢）

▲ワシントン言行錄　百島操著　內外出版協會發行

事あれば朝に立つて國柄を執り、事なければ野に退いて耒耜に伴ふ、丈夫兒の胸懷名利の外に落々たるものあり、新敍爵者多くして動もすれば青年の理想も誤らるべき今日、前の大統領後の一老農にて終りたるジヨージワシントンを語ること、その思想上に益することゝ少からざるべしと信ず。（定價金三十錢）

▲時勢と青年　皆川正禧譯述　內外出版協會出版

原著者ジヨシアストロング氏が時勢の推移、即ち科學的智識の進步、社會の發展等と廣く注意を拂ひ來り、さて神學と宗教とを論じて知信の關係を明にし、神學に變遷あるも宗教の本質には沒交涉なるを明にし、次に勞役と犧牲と愛とを以て萬有を通ずる宇宙間の三大法則なり、即神の道なりと叫び、之を以て青年に教えたるもの、敍述平明以て神人に關する一わたりの解釋を得べし。（定價四十錢）

▲紀念小書馬革　松田秀峯著

文字の洗錬を缺くは暫く措け、立つて書きしなり、走りつゝ書きしなりとは、著者の自序に於て已に斷りおける所ならずや、名からして馬革なり、兵馬倥偬の場裏に辛うじて纂にし得たる著者の雅懷なり、一種の陣中日記として見んには愛すべし。（非賣品）

▲エピクテタスの教訓　稻葉昌丸譯　浩々洞出版

ローレストンの「エピクテタスの教訓」を譯したるもの也。譯文明快にして晦澁の弊なく、ストア哲學元祖の教訓、咀嚼なれば旨味饒か也。故淸澤滿之氏が之を以て西洋第一書といひ、平常愛讀措かざりしといふもの故なきにあらず。高き思想の樂みを求むる人は熟讀の價値あり。（定價七十錢）

▲離愁　白柳秀湖著　隆文館發行

著者の小品文、雜文及びツルゲネフとトルストイとを略敍せる「北歐の双星」等を收めたり。北歐の双星は餘り略敍に失して二文豪を傳ふるには少しく物足らぬ心地し、小品文等は餘りに稚氣を帶びたると、文字稍々誇張に失したるとありて我輩には感興薄し。只時に天眞の情流露して多少見るべきものなきにあらざれども概して價値あるもの少なきは遺憾也。（定價三十八錢）

▲大和魂　川合清丸著　日本國教大道發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主として材料を神道に資り、大和魂を說明せんとしたるもの也。著者は恐らくは神道者なるらしく其部面に於ては一種の見識を有せるものならんも、大和魂其物のみを說かんとして、之と今日の實際生活との關渉を說かんとも志さゞるは慊らぬ心地す。

▲歐米の新思潮（第二輯）　內外出版協會發行

ウヰリアム、ピー、トレント氏の「戰爭と文明」及び「世界主義と明族主義」を譯したるもの也。譯文槪して流暢なるが如し。（定價廿錢）

▲少年水滸傳　米光關月著　成功雜誌社發行

關月氏の自在なる筆を以て剛健なる快男子が破天荒の事業をなす所を記せるもの、眞に少年水滸傳の名に背かず。少年の好讀物の一ならん。（定價三十五錢）

▲ネルソン傳抄　増田藤之助譯註　隆文館發行

▲豐太閤征韓史　同　上

前者は英文獨習叢書第一編にして後者は第二編也。共に英文學に造詣深き増田氏の譯文及び註解を附し、原文と對照して載せあれば英文研究者にはよき手引草といふを得べし。（定價前者六十錢後者五十錢）

▲日本國道論　有馬祐政著　富山房發行

有馬文學士が學者的に日本國道を研究したるもの也。加藤博士の「我國體及び基督敎」出てゝより國道、國粹等を論ずること流行となりたるやう也。而し本書の如きは稍々其眞面目なるが如きを見るべしとせんか。（定價七十五錢）

▲湖上の怪物　佐川春水譯註　建文館發行

ヒーアソンス、マガロンに出た妖怪談に譯文と註釋を附したるもの也。英語研究者の參考となるべし。（定價三十五錢）

▲正宗白鳥氏の「紅塵」及び長谷川二葉亭氏の「其面影」は次號の誌上に精評すべし。

十月一日發行の我「秋期大附錄號」に向て高評を賜はりたる都下及び地方の新聞雜誌に感謝の意を表す（反省社）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋銀座四　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋區鎗屋町　良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾五錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金拾八錢	內國金一錢 外國金六錢	金拾九錢 金廿四錢
六冊	金壹圓	內國金六錢 外國金卅六錢	金壹圓六錢 金壹圓卅六錢
十二冊	金壹圓九拾五錢	內國金十二錢 外國金七十二錢	金二圓七錢 金貳圓六拾七錢

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を記し拂渡局所を東京駒込と指定せられたし
一弊社は振替貯金三十四番に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられべく候
一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治四十年十月廿八日印刷
明治四十年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尙ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一七圓五十錢也　同径三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同径三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同径四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同径四寸五分丸　同目方正味六十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製径二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同径三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同径四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同径四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同径五寸丸同　同目方正味二百卅匁付

〔定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢〕
〔文字彫刻　一字　金拾錢〕
〔大字彫刻　一字　金七拾錢〕

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

〔電話下谷特九六五　一二四四〕

IN JAPAN
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA